

塔柳川

昭和四十七年一月九日第三種郵便物認可
平成十七年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九三五号



白川協加盟

No. 935

四月号

《最新刊》 田口 麦彦 著

楽しみながら上手くなる

穴埋め 川柳練習帳

クイズを解いてきみも達人

現在活躍中の川柳作家の秀句を例題に、キーワードを埋め字することで自然と川柳が上達する本。クイズを解く楽しみと川柳が上達する喜びを同時に手に入れることができます。例句はテーマに分けて出題してあるので体系的に学ぶことができます。また原句の答えだけを紹介するのでなく詳細な鑑賞も掲載してあるので充分に納得することができます。三章からは各句を埋める問題で捉え方や適切な措辞の方法まで理解することができます。四章の添削コーナーでは段階的に推敲添削を紹介、実作に役立つように配慮しました。

四六版並製 240頁 定価税込1680円送料210円

《好評発売中》

川柳表現辞典 田口麦彦 46上製箱入
税込三五七〇円送料210円

現代川柳の秀句六九二七句、見出し語一五四二語をあげて語の意味等説明。表現の方法と技術を示した

川柳技法入門 田口麦彦 46上製カバ
税込一九八〇円送料210円

川柳上達の技法を九二五句の引例で説明。一句の完全までの推敲添削他 風刺・ユーモア・比喩等の方法

現代川柳入門 田口麦彦 46上製カバ
税込一九八〇円送料210円

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を現代の言葉で例句をあげて説明。実作者への入門書

時事川柳入門 田口麦彦 46上製カバ
税込一八三五円送料210円

現在を17音で切りとる諧謔精神の表現方法やサラリ
ーマン川柳の即興性など、九五三句の例句で解明
ご購入はお近くの書店か直接小社まで・各書の内容見本進呈



旅雑誌

『おとなのいい旅』へ旅の句を！

河内 天笑

昨年八月当欄に書きましたが、リクルートから要請で、同社の旅雑誌「おとなのいい旅」に川柳を載せるべく、城崎温泉への川柳紀行の旅に誘われました。夫婦とも川柳作家であることが条件でしたので、私達には適役で心よくお引受けをして一泊二日の旅となりました。編集部員とカメラマンが同行の一行四人は、城崎温泉の名所を巡ってその先ざきで川柳をつくるという段取りです。

こうして私達二人で三十数句を作って編集部に渡し、夏号では見開き二ページに訪れた場所や私達の写真と次の四句が掲載されました。

志賀直哉座った石へ腰を据え

天笑

心の眼曇ると仏の声聞けず

天笑

一の湯の辺りの歌碑にふり向いた

月子

大正のロマンの部屋の白日夢

月子

この旅雑誌の川柳は大反響がありました。去年秋にリクルートから小包が届き、私達の旅の川柳に刺激された人達からどっさり川柳やら短歌のようなもの、俳句もどきの作品がいっぱい入っていました。この中より特選一句、準特選二句、ユーモア一句を選んでほしいという依

頼でした。その際、惜しくも特選にならなかつたいくつかの作品について注釈をつけておきましたところ、今年の冬にリクルートから連絡があり、その注釈文を春号に載せたいということです。勿論OKしました。

三月十六日に書店に出た春号（一九三頁）には、次の様に「旅の句」募集の欄がありました。

「天笑先生があなたの旅の句を講評します。旅の思い出の一句をぜひお寄せください。」

◇応募方法……ハガキに旅の句（三句以内）

住所・氏名・年令を明記の上左記へ。

〒530・0001 大阪市北区梅田二―二―二二

ハービスENT20Fリクルート

「おとなのいい旅」川柳係

となっております。一般誌に川柳が載ることは大変有難い事と感謝しています。皆様、ぜひリクルートへ旅の一句をお送りください。「おとなのいい旅」誌に川柳の大きな花を咲かせてください。

自選句

あっち向いてはいこのごろ鈍くなってきた 天笑

ちよつと目を逸らしてる間のVゴール 〃

箸二膳マンネリズムも辛のうち 〃

進む道決めるにも運つきまとい 〃

ホワイトデーの義理を果たした事がない 〃



座右の句

人間を掴めば風が手にのこり

(五呂八)

私の句

忠告が煎じ薬のように効く

山宮 愛恵

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 旅雑誌「おとなのいい旅」へ旅の句を！……河内 天笑 ……(1)
筆 ……安藤寿美子 ……(2)

川柳塔(同人吟) ……河内 天笑 ……(4)

川柳塔の川柳讃歌(4) ……木津川 計 ……(54)

自選集 ……奥田みつ子選 ……(55)

水煙抄 ……波多野五楽庵 ……(59)

■句集紹介 木本朱夏句集「転生」 ……波多野五楽庵 ……(80)

愛染帖 ……波多野五楽庵選 ……(81)

誹風柳多留二四篇研究 77 ……政岡日枝子選 ……(84)

茴香の花 ……(86)

筆

安藤 寿美子

筆とはまったく相性がわるい。どの筆も私に意地悪をする。母は自分が悪筆だったから、なんとか私をひとなみの字が書けるように仕込んで、代筆させようと企んだらしく、随分お習字の稽古に行かされた。だけど母のおもわくは外れて、私は両親のへたくそな字をまるまる引き継いでしまった。父も小学校の校長だったが、父の書く原稿を読んでもくれるのは、最古参の先生ひとりという噂であった。

小学校にあがるなり、習字のお稽古に行かされた。二階のお座敷で私はつまらないなあと思いつつ、べたべた墨をぬたくって居た。その時、風につてかすかにチンドン屋の楽の音が聞こえて来た。私はがらりと筆をほうりだし「チンドン屋来たア」と叫びながら階段を駆けおりた。先生が家まで送ってこられて、「まだお稽古はよおます。ゆっくり遊ばしたげとくなはれ」と。叱られた記憶はない。父に叱られたのは母のほうだったのではないか。その次に行ったのは、お習字と言っても点やはいばかりやる教室、逃げ出さなかったのは、母がついてきて後ろに座っていたからだ。

「壺」……………石森利昭選 ……(88)

一路集「スーツ」……………国森武子選 ……(88)

「軽い」……………都倉求芽選 ……(89)

初歩教室「立派」……………三宅保州 ……(90)

秀句鑑賞 同人吟……………遠山可住 ……(92)

水煙抄……………岸本宏章 ……(98)

三月本社句会……………(94)

各地柳壇(佳句地十選/穴吹尚士)……………(101)

柳界展望……………(115)

四月各地句会案内……………(116)

■編集後記……………楓葉・義子 ……(118)

座右の句

凡人へもつたいたなくも陽があふれ

(久米雄)

私の句

土壇場へまずは小便してかかり

加藤 茶人

その次は日舞の友達のお父上の書道塾、これはすこし続いた。友達と日舞のおさらえをしたり、遊んだりできるのでお習字よりその方が楽しかったのだ。

女学校二年の時、毎日お清書を提出して、「よし」を頂ければ進度表につけて貰うというのがあった。友達の人々が何故か「うちもうお清書ださへんねん」とむくれていたので、原因もなにも聞かず「ほなうちもださへんわ」とも一人の子と三人でミニストをやった。先生は催促もされず、お小言もなく、その学期の通知簿は、十点満点の四点をつけられた。その間の事情は母には一言も言っていなかった。青くなつた母は、またお習字の先生を探して来た。

今度は柳の葉のようなやさしい字を書かれる、お上品きわまる先生で、ほかの人が「このごろはおマルが増えましたねえ」と褒められているのを聞いて噴きだし、書きかけのお清書をだめにしてしまった。その後は戦争、敗戦、結婚、離婚、子育て、再婚とお習字どころではなかった。

そして今「公民館まつり」に展示する短冊を書く時期になると、昔の不勉強が悔やまれるのだ。川柳グループだから読んで下さった人に「いい句だな」と思つて貰えるよう下手な字でも、真面目に書けばいいのではないかと、悪筆婆さんは開き直っているのである。



河内天笑選

倉吉市 牧野芳光

冬の陽の影よろよと地に落ちる

私の臭いのとれぬタオル干す

苦労した木だ美しい紋がある

菜の花になれるつもりのプロッコリー

一握の灰になるまでする戦

ひとつずつ悲しみ降ろす無人駅

東大阪市 谷口 義

おじいさんは笑いおばあさんは怒り

わたくしの都合で笑えないテレビ

身一つで立っているのは雪だるま

雪が降りますとテレビで言っている

一日で老けてしまった雪だるま

平行四辺形のまま夫婦なり

兵庫県 大谷 幸次郎

新潟で無理して笑う雪ダルマ

気負う日のコーヒー渦を巻いている

五男五女昔の女タブだった

贈られたベストほのほの背に温い

ポイントは喉越しの良さ海鼠食う

一枚の舌ではつきり物を言う

弘前市 宮崎 ヒサ子

降り止まぬ雪は魔性になって降る

屋根雪を降ろして枕高くねる

除排雪の話などして今宵鍋

連帯感深めてくれる雪のんの

テレビ消すストーブの音暖かい

陽の長さ名のみの春も少しずつ

富山市 島 ひかる

よく動く風車の下にある明かり

納骨の明日へ雪を分ける汗

雪の中仏と分けるさくら餅

銀世界の中に動いているいのち

価値観の違い理想が褪せてゆく

笑われる悩みがあつて寝付かれず

弘前市 高瀬霜石

ご馳走が多いと箸が進まない
怒らないけれど叱る時は叱る
知らない街へ行ったら歩くバスに乗る

人気者来るので席を空けておく
お気に入りの写真このごろ減っている
一番に来て隅っここの席をとる
河内長野市 村上直樹

温室で冒険の種育たない
黒粋の中の笑顔が気に入らぬ
大阪に派手なおばちゃんわんさいる

島根県 森茂美

晩婚の三三九度へ神が笑む
俺々詐欺みんな頭のいい奴だ
気休めに飲んだお酒で怒ってる

さて地球次の一手は何処でなに
身の丈にあわせ五欲をぶった切る
秒針がかちかちと今を消す
自分史への祝辞愚直の二字がよい
鬼瓦今年も雛を抱いとくれ
若人よ君に贈ろう夢一字

堺市 柿花和夫

あなたアと一度呼ばれてみたかった
うれしいのが此処にもひとり昼の酒
産声だ明日の星だ乾杯だ

檀原市 居谷真理子

春行きの切符二枚を懐に
君の手に会いたがってる私の手
父と娘のような夫婦がいる小店
思わくは捨て飲みたまえ酔いたまえ
淋しさをなめあうメール飛ぶ深夜
大地から一つ頂く露の臺

和歌山市 木本朱夏

きさらぎのミステリアスなチョコレート
お湯割りの梅酒かわいくだを巻く
ふところのお金が懐炉より温い

天災が人の心を温暖化
医者通い火事場の力残すため
春一番未練のかげら舞い上げて
自分史を改ざんしたい春の鬱
深爪の痛み残して恋終る
妻よりも電子レンジは上爛屋

大阪市 西出楓楽

カサブランカでボガード見たは白日夢(モロッコ紀行)
ターバンの巻き方を聞くバスの中
王廟の静寂誰も犯せない
ミントティーしばしモロッコ人になる
迷路都市フェズは中世を今にする
時差やとと馴れた頃には旅おわる

堺市 志田 千代

世間という尺度の中で生きてきた
うまく死ぬ夢をみている日向ほこ
お通じのためにと作る芋料理

不足ない妻だと妻は思うてた
泥棒のために門灯消してある

年金はニイーシー ロクの十五日

堺市 石堂 潤子

老人用計算ドリルそつと買う
通院が仕事と笑う友の杖

目には目を私流ですここにここに
悔しさを言えぬ自分が大嫌い

嫌な事忘れて今をいつくしむ
最初はグー拳の中の運に賭け

大阪市 神夏磯 典子

花の精生きる力を持つて来る
花開く私もちよつと美容院

チューリップなんでそんなに素直なの
木蓮の白さに心叩かれる

それからの話を雀聞きたがる
損得を考えてたら動けない

相生市 中塚 礎石

流れ星宇宙の夢が乗っている
窓際に居座っている正統派

平手打ち妻に残した悔い一つ

いい話聞かせてくれてそれつきり
御大の本心雑魚がつい喋り
不発弾大きな音は台所

鳥取市 春木 圭一郎

悩んだらとにかく外へ出て遊ぶ

ありのまま自分を見せて楽になる

あせらずに最後は笑う人となる

自分ではどうにも出来ぬことがある

何もせず待つのも勇氣ある一手

失敗もいい経験と感謝する

柏原市 永浜 加津子

一夜にてヒーローとなる勝ち越し弾

冬空の満月凜とおわします

被災地の雪の重さよせつなさよ

ポケットへ頭の葉チョココ三つ

恋しくて春よ春よと書き綴る

温かい言葉にばあも舞い上がる

橿原市 安土 理恵

年金受給シルバー世代という自覚

好奇心提げて もすこし闊歩する

不揃いに羽ばたく子等は個性的

大根二本並べ何だか恥ずかしい

うどん屋の猪口と向き合う通夜帰り

見直しています今日まで生きたこと

可児市 板山 まみ子

二三日このまま見たい雪景色

およばれに手土産ちよつと値がかさみ
さむ空へ鬼と一緒に福は内

おつまみを決めて今夜は何にしよ

三か月まだ花盛りシクラメン

静岡市 安本 晃 授

一滴の水の重さを聞く鼓膜

名月と雪を肴に夫婦酒

思い出をたどると母の海に出る

春日和けらけら炎える二枚舌

連休へタイムカードもひと休み

静岡県 菌田 獭 杏

今日こそは名前を聞こう散歩道

広大な田舎の家は欲しがらず

去勢した豚がコンクリ鼻で割り

Uターンしてふる里の町おこし

初孫をペットのように可愛がり

愛知県 早川 盛 夫

万札を出されスカシを確かめる

日に干してミカンの皮も無駄にせず

大根と侮るなかれ京の宿

気の長い話お金が貯まったら

運のない人で混んでる焼き鳥屋

滋賀県 中 宗 明

初詣で一番乗りになつしぐら

なにごとくもメールで済ます味気なさ

その昔よくても今は過去の人

喜寿迎え怖いものなしわが天下

アンテナとあだ名付けられ暇な主婦

京都市 高島 啓 子

明日嫁ぐ娘の笑う声がする

上げ下ろし布団にもらうストレッチ

眠らせた夢出してくる冷凍庫

専用車だと男性に言わずおく

方円の器に従いゆく海風

京都市 都 倉 求 芽

百年の計なんて議員の辞書にない

お代官様年寄ばかりに白羽の矢

掃除機の口が老人に向いている

盛り場のビルに巣食うた蟻地獄

血だらけの躰で絆ぶち切られ

亀岡市 井上 森 生

少しでも笑うと福が来てくれる

天地の偉力地震の後で知る

なかなかにやるよ世紀の英王子

待ち兼ねたつくしは春の風連れ

つやつやの熟柿のように母眠る (百寿母眠る)

京都府 丹後屋 肇

敬遠の指示にマウンド横を向く
処世術玉虫色で恙なし

時限爆弾抱えて鍋をつつき合う

グッドアイディア浮かぶながい放尿時

スマイルも修羅場も知っている鏡

大阪市 前 たもつ

ガラス越し冬日やさしく美しい

不景気へ年金ぐんと株を上げ

万病の風邪だとわかる歳になり

少しエッチなこと考えてリフレッシュ

クリスチャンの妻と寂聴聞いてます

大阪市 小糸 昭子

水没の街に予算のリスト洩れ

テレビとお鍋背中合せの夫婦です

メロディーで電化製品合図する

いささかの私情交えて社長訓

大役がすんで見上げる青い空

大阪市 小泉 ひさ乃

花粉症春を謳歌の邪魔をする

ねずみ取ること知らぬまま去勢され

冬ソナのおかげ純愛甦る

啓蟄へ老いも若きも弾み出す

自転車をもドミノ倒しにした嵐

大阪市 伊藤 博仁

三線に浮かれた席の手が踊る

拍手しにきつちり起きるコンサート

だんだんと趣味が重たくのしかかる

暗がりに心も捨ててごみの山

宙で取るカモメの技に餌がとぶ

大阪市 津村 志華子

み仏のおわず都の温い風(京都 3句)

父母が静かに眠る本願寺

苔の寺わたしを無色にしてくれる

欲捨てて力を抜いて生きてます

打ち解けるうれしい友がいてくれる

大阪市 井丸 昌紀

母頑固父も頑固で仲が良い

鯨鯨が空見る時は死ぬる時

音なしの構えも香りごまかせず

乗り換える駅に馴染みの店がある

給料は二月も同じだけくれる

大阪市 松尾 柳右子

師の影は踏まぬ教えについて行く

影踏み遊びが出来ぬビル谷間

金婚を間近に控え大げんか

発祥の絵馬鞍馬から出たと言う

終りなき学びは日々の新聞紙

大阪市 近藤 正

大阪市 西川 更紗

新春の扉をあける福寿草

ストレスが積る私の預金帳

バレンタインチョコの試食にのほせ気味

不景気に揺さ振られてる風見鶏

直線をわざとはずした不肖の子

大阪市 古今堂 蕉子

きりたんぼ比内鶏つれやつてきた

飾られた言葉あなたに似合わない

こんなええ妻いてへんというてある

取り替える時機失したねお互いに

食あたりしそうな妻の頼みごと

大阪市 板東 倫子

緋の袴ひるがえす巫女の幼な顔

地下街を迷わず抜けたことが無い

電話口風邪引き声がうつりそう

料亭のおせちも若者には不評

不機嫌な猫がわたしを睨んでる

大阪市 中村 叡子

寒の餅搗きこの子にもあの娘にも

大雪で帰路が不通のバスの旅

遠くても飛行機がすき北海道

仁徳の帝に民は訴える

あせつても言う事きかぬ足を揉む

行革が素顔を見せた二枚舌

目に涙心を許す鬼もある

雪下ろし引く手あまたのボランティア

引き際の目途がつかない自衛隊

苦も楽も二人三脚四十年

大阪市 清水 絹子

気持ちだけもらっておくと地藏さん

粕汁に風邪も恐れて寄りつかぬ

立て替えに子にもけじめの請求書

景気よく栓抜いたのに友の下戸

花便り二つ返事の友の声

大阪市 本間 満津子

恩師の忌チヨコレートに沈丁花

ええなんでと判らんことが多くなり

増えたのか精神異常この世相

西暦を昭和に直し考える

名アナの画面梅の香匂いそう

大阪市 川久保 睦子

冬トマトみせかけだけの女です

鈍行でいいの長生きしたいから

逢いに行く軽いリズムの赤いくつ

鳴りそうな受話器見ている雨の午後

恋煩いサンマ焦けても気付かない

大阪市 奥村 五月

下戸の母お酒の席でよくもてる
甘えさす母に墮落の子が育つ
褒められてお茶まで出した花の庭
手術後も酒の誘惑断ち切れず
猫みたいな男も飲めば虎になる

大阪市 津守 柳伸

申告を済ませ手軽な旅探し
いただいて見回す限りカレンダー
精一杯生きて極楽への予約
自分への褒美アカスリ泥エステ
雪解けの小千谷笑顔も痛々し

大阪市 津守 なぎさ

豪雪へツララまつすぐ陽に映える
旅ごころ狂わす義兄の人工弁
青空に映えてまぶしい金の鯨
病院の待合室は情報源
ウグイスの声も至福の屋形船

大阪市 星野 きらり

来た道を振り返るなど地藏さま
目覚めよくいい日にしよう青い空
百歳の賀状の温さ励まされ
小豆粥独り仏と小正月
もうと未だ使い分けして日は暮れる

大阪市 川端 一步

目の悪い母好きだった春の海
大声の笑いで鬼を追い払う
一本の大根買うにしばし立つ
瘦身は何をつけてもよく似合う
年金で暮らし文化の果てにいる

大阪市 川原 章久

着膨れを一枚脱いで福は内
人間のエゴを救さぬのがマダマ
他愛ない姉と妹の長電話
大正の気力雷よく落す
我儘な子供嫉ける鬼になる

大阪市 榎本 日の出

金かけぬおしゃれとつてもむずかしい
白い雲正直そうに見えるだけ
貧乏のプライドもあり買わぬ主義
あと十年生きればいいと思う歳
諦めた方がいいよと鏡言う

大阪市 大川 桃花

目が弱りうまい具合に見えぬ皺
とり年の宮様今年お嫁入り
噂の輪 席外せない帰れない
母の勘作り笑いを見抜かれる
四面楚歌せきとくしゃみに囲まれる

大阪市 玉置英子

元気には軽いストレスいらしい
枯芝の底に希望の緑増え
加湿器でなおさら結露多い窓
福豆の八十二個は多過ぎる
仲良くはとも出来ない近い国

大阪市 杉澤 汀

早寝して明日は試そう足と腰
織田作の口縄坂をはい上る
咲く花に歩き疲れて天王寺
気がつけば彼岸参りの群にいる
通天閣見下す窓でコーヒ飲む

大阪市 岩崎公誠

エレベーター犬の親子は怯え顔
悲しげな老人ばかり昼のバス
パソコンにのたうち回る老いの脳
地下鉄も市バスもただのバス届く
ふところに笑い袋を持つ元氣

大阪市 小谷集 一

目の位置を変えると見えてきた出口
世間の目ごまかしてます白髪染め
こだわりのないがプライド顔を出す
両の手に持てるぐらいの欲はある
アドリブがきかない僕と古時計

大阪市 榎本舞夢

一年を振り返りつつ除夜の鐘
元旦の朝金魚にもおめでとう
泣き顔を見せまいとして被る面
市松も足袋新しくして節句
美しく映る手鏡買いいに行く

大阪市 渡部 さと美

大雪に暖冬予報あざけられ
大阪のおばちゃんあごでしゃべらへん
スニーカーはけば勇んで歩きすぎ
バス待ちへあなたもお医者ゆきかとは
そつと掌につつんで使う寒たまご

大阪市 鶴田 遠野

愛情一本晩酌をまた追加
花束を自分に買った定休日
娘の世帯我が家の風味漂わせ
春風に酔って秘密がひとつ増え
何もかも捨てさす恋の直行便

大阪市 岡本久峰

折節に上客宛の誘い水
ひとかどの髯蓄えてゴミ拾う
春一番眠気覚ませと吹きつける
素寒貧健康体をもて余す
亡妻の遺影にそつとカスミ草

大阪市 安 達 はじめ

スランプのトンネル抜けて春に逢う

止まり木を一つ譲って打ちとける

笹舟をそつと放してそれゆけと

栄転の内示へ広がる歩幅

早春の出番へ毬がよく弾む

大阪市 熊 代 菜 月

ふる里の墓参の道へ雪しきり

恋をして意見無用の孫娘

つり皮がライندگانスの昼下がり

本命になった義理チョコ孫の恋

好きなこととしてストレスをためている

池田市 栗 田 久 子

つかのまの恋と気付いた春の虹

私の思いを汲んでくれた花

土の香のする筈に朝の露

遅霜のニュースも届く花日和

菜の花の色に染まっていく日暮れ
泉佐野市 山 本 蛙 城

副作用出でから読んだ注意書き

神経痛老化ですねと軽く言う

あら捜し予算案などそつちのけ

どの欲も旺ん余生と言いませぬ

欲しくないところだけ伸びる毛の憎さ

和泉市 中 川 楓

思い出し笑い時々春ですネ

目と鼻と頭の中も花粉症

わたくしも水仙の葉もひとねじれ

下駄の音なつかしミユルけたたまし

叶わぬ夢抱いてしぶとく生きていこ

和泉市 西 岡 洛 醉

散歩道他人の笑顔に頭下げ

年一度友の便りが笑つてる

各停の旅が続いて老いの日々

喜寿の春脳味噌ほちほち溶けはじめ

一病息災と言う体型を守り抜く

和泉市 横 山 捷 也

たくましく生きた男の広い肩

いつからか足手まといになった愛

母の忌にまだふくらまぬ梅を折る

大根の白さ自慢の肥えた土

平凡な日々味噌汁と白い飯
大阪狭山市 矢 野 梓

春が来てどつと芽ばえる旅心

お喋りに行く足どりは軽やかに

後で来て我が物顔でよくしゃべり

酸欠の街を救急車が走る

五十肩拍車をかける怠けぐせ

茨木市 藤井正雄

表ならミナミ裏ならすぐ帰る
大胆にイッキ飲みする訳があり
受話器持ち替え計報聞きただす
根回しの酒と気づくが美味い鯔
姉さんの料理色彩だけ豊か

交野市 森本弘風

階段で背中のお金を払てやり
財政を補う税を今日も飲む
酒好きな主治医多少は良いと言う
豆撒きに鬼が笑うて逃げて行く
水仙がおいでおいでと春招く

交野市 山川日出子

パレスチナ停戦合意イスラエル
約束の四島しぶり二島のみに
鯨が愛地球博監督か
里帰り梅と鶯待つている
孫二十歳亡母の指輪を譲る春

交野市 田岡九好

まだ何かあるかも知れん古希の春
ひよつとしてあれは皇女の恋だろか
子らの列つかず離れず下校パト
使うのが一寸気になる古い札
正義感イデオロギーも腹八分

河内長野市 水谷正子

また少し入れる新潟募金箱
複雑な八十歳の祝金
嘘八百まだ半分もついてない
まだ十時梅田新道宵の口
血圧を言うてられないロスタイム

河内長野市 山岡富美子

お誘いへすぐに飛び付く春の靴
絵の具血旅の詩囊をふくらます
血を分けているから修羅が深くなる
血の巡り良すぎるひとと車間距離
正論で切つて返り血浴びる酒

河内長野市 加島由一

君のことばかり思っている四月
米をとぐ爪ではないが美しい
お亡母さんこんな男になりました
考えておくと上手に逃げられる
結論は顔が嫌いということか

河内長野市 植村喜代

わかる時きつと来ますと言う他人
静か過ぎる夜をテレビ付け流す
時どき言葉に躓いて真つ白に
少しでも親からの恩娘に返す
七十六歳に実感ありません

河内長野市 井上喜醉

平和でも戦の付けがある日本

薄情な男は赤い舌を出す

福耳が自慢の一つ楽天家

アザラシの散歩で騒ぐ港町

肝つ玉だけが大きい空財布

岸和田市 井伊東吉

ダイオード訴訟が浮かぶ青信号

義理チョコに変った妻のプレゼント

米国牛輸入がついに寄り切られ

和え物やすましに春を呼ぶ菜花

出直しの姿や如何プロ野球

岸和田市 雪本珠子

幸せは心の中に住んでいた

プロセスを楽しみながら作句する

草花に生きるエナジーもらつて

花びらも封書に入れて旅便り

マリリンと言う名の猫に首つ丈

岸和田市 岩佐ダン吉

丸い地球信じひたすら走ってる

一冊の本生かされたことがある

反対はひとり気合の手を上げる

人間のなにを計るか棒グラフ

充電の日々だったろう回り道

岸和田市 原 さよ子

負けん気を出しては無駄な汗をかき

たらの芽の天ぶら嬉し木曾路宿

血圧の薬も入れる旅靴

手作りのバッグ目に立つ膝におき

レンジでチン下手も上手もない料理

岸和田市 亀井皎月

昼と夜温度差が呼ぶ米うま味

何十年飯一膳で来た体

女房の支持率どつと下げ続け

働ける人は幸せだと思ふ

ひと捻り婦唱夫随が丸を描く

岸和田市 中島寿海

外交の歴史問題ゆすり種

ストレスをいっぱい溜めて旅で捨て

見つめられ胸ときどきが勘違い

手をかけて育て咲かせる好きな花

雑草の中で咲いてる捨てる水仙

岸和田市 土橋房枝

いい人と言われてあなた苦しそう

抜け目なく海老で鯛つる里帰り

糸切り歯糸を切らずに退化する

老人を狙う犯罪世を憂う

気の走る母で父さん濡れ落葉

堺市和田 つづや

白菜の浅漬けがある今朝も幸
良妻で賢母で化粧かかさな
早朝はウォーキングで留守します
すみっこが好き負け犬の血だろうか
流される事も愉快だなあ雲よ

堺市河内 月子

梅の花ほめておうすと羊羹と
梅日和鷲めじろ来てくれる
お天气が良いとなんでも干したが
ゆずられた席断つたことがない
お手玉が上手になった孫娘

堺市宮本 かりん

待つ事に慣れたわたしの長い首
口止めの甲斐なし内緒ばれて
したたかな根性持っている笑顔
強がりを言うても芯が揺れている
とうさんのきつとは期待してません

堺市村上 玄也

お菓の飲み友達が増えてくる
読む人の気持無視した説明書
勿体ない気持で不用品の山
順不同と断つてがある序列
光だけ一足先に春を告げ

堺市西村 りつえ

福は内人間怖く逃げる鬼
口八丁ノルマに遠い手の動き
桜もち女らしい男多くなり
梅 桜 あとの団子がなお嬉し
嘘通すパワーも消える物忘れ

堺市齋藤 さくら

尻もちをついた話で座がなごみ
暇できたとたんに風邪を引いている
酔うはずの無かつた友の悩み知り
ストレスを散らす魔法は露天風呂
真つすぐな道にも迷いあるらしい

堺市山本 半銭

寒の月下駄小走りに乾く音
如月や机上に鬼遊川柳集
躍動へ力を溜めている二月
側溝を自在に走り猫の恋
百均の小瓶に花の誕生日

堺市源田 八千代

初節句ママのセコハン段飾り
雛壇にキティ人形仲間入り
ひな祭のメロデイ奏でオルゴール
ばんぼりの仄かな明かり御殿雛
親王の闇おもわせる雛収め

堺市 矢倉五月

目からウロコ娘ははずすコンタクト

珍しい苗字も話題午後のお茶

掴むにはちよつと勇氣のいるチャンス

祝辞終えやつと料理が目に入る

ごめんごめんで消える程度のわだかまり

堺市 近藤豊子

合格のさを夢みる受験生

親の夢子の夢満開の桜

夢それぞれ横一列に卒業す

大地震棚田くずれて雪の下

雪おろしボランテニアさんありがとう

堺市 神原文

若くても昔ばなしはするだろう

ジーンズは歳だと言わぬ穿いてみる

この歳で手に汗かいて人見知り

年かさに合った貫禄まだ持てぬ

豆を煎る匂い野球に春が来る

堺市 國見蘭香

迷惑と思っているよ犬の服

四季を愛で心のリズム整える

試着室春の心をふくらます

おもいつきり背伸びしている午後の猫

日は落ちる若者達ははしやぎ出す

四條畷市 吉岡修

余生へのアンケートです丸が減る

貧乏神いつか息の根とめてやる

怪しいな むやみやたらにいい返事

どの恋も迷宮入りにして時効

マドンナの影にサタンの気配する

吹田市 山本希久子

春の道春の言葉と歩くなり

眼鏡かけかえても明日はノーヒント

ケイタイ番号憶えるに長過ぎる

これからはくよくよせずに生きる古稀

京会席琴の調べを聞きながら

吹田市 瀬戸まさよ

身内より話深まる古き友

思い出を綴るコーヒー二杯飲む

しわしわの手だ遠慮する酒の酌

柚子風呂に柚子茶ふうふう風邪も逃げ

共稼ぎ回覧板はいつも夜

吹田市 太田昭

出迎え無き退院の朝肌寒し

饒舌な男は嘘を練り合わす

もがいても元の殻には戻れまい

縦社会に歯向かう棘を研ぎ直す

言い訳の言葉を持たぬ独裁者

吹田市 穴吹尚士

生き生きとした日本を夢に見る
いつからか妻とおんなじ夢を見る
いつの日かパリに行きたい妻の夢
夢捨ててからはネクタイ吊ったまま
わしづかみした少年のでかい夢

吹田市 早川棲世

正眼に構えたままで蟹食われ
どの神もいくさの好きな信者もつ
異教徒に利害で論される聖戦
治安には触れず正論説く社説
故郷捨てて来たのへ街の選挙カー

吹田市 野下之男

改革の太鼓叩きをまだ止めず
九条に赤信号を点けたがり
神様も溜め息洩らす津波事故
許す気になれぬ三面読んでいる
米寿でも美人の横が良いらしい

吹田市 岩屋美明

テレビ見て猫も一緒に笑い出し
噴水の虹と少年旅に出る
弁当を二つ入れてる部活の子
タンポポの空へ舞いとぶ志
入学式横一列のメダカたち

吹田市 須磨活恵

悠然と春を待つてる冬木立
この命大事に思う煎じ菓
平凡に感謝しながらもの足りぬ
絵の具皿夢は多彩な古希の春
春風におしゃれ心が攪られ

吹田市 木下敏子

好きな道だから歩ける痛くても
そういつも福は内とは限らない
生きて来た足跡綴る五七五
友情の輪が広がったボランティア
前向きに明日へ虹の橋を架け

吹田市 大谷篤子

寒い日は猫が優しく膝にくる
傷心に体温もとに戻らない
一步引く癖今もまだ続いている
心配りに心の隙間うめられる
うっとり心地よい風背なを押す

大東市 児玉蛙

けつまずきはつと気が付く忘れもの
玄関に靴をきちんと一人っ子
夫婦難かざり思い出たべにいる
矛盾抱き転びながらも前向きに
スケジュールためて頭はもつれ出す

大東市 南原正和

日差しよく布団を叩く音しきり
ばあさんに風呂冷めるぞと声かける
寒いでしょう焼酎供え暮参り
揺れる浮子気にしながらの握り飯
彼来る日買物籠も嬉しそう

高石市 浅野房子

生きてゐる限り多少の無理はする
正直に生きて時々風邪を引く
親にまで手が回らぬと言う介護
夢も見ずぐつすり眠りたいわたし
うとまれているとも知らずいじらしい

高槻市 江原秀夫

おとぼけがあやしい空気薄くする
八十はまだ先がある芋焼酎
豆を撒く心の底の鬼は外
プランコにはしゃぐ親子の冬日和
消費税天下御免の間間風

高槻市 傍島克治

運じゃない腕だ腕だと自慢顔
水ぬるみ気持がゆるみ春となる
主よりも影が慌てた癌告知
やけくそが逃げたチャンスを取り戻す
勝てるのは歳の差だけのなさけなさ

高槻市 左右田泰雄

ほのほのと余生楽しむ夫婦箸
格好良くスタンドプレーして見せる
居座って本音をはかすまでねばる
傘の雪はたき落してバスを待つ
待合室のようなセルフの喫茶店

高槻市 乙倉武史

臍練りの苦勞はいらぬ独身者
探しもの先ず屑籠が疑われ
晩年の備え裏目の低金利
その先は約束出来ぬ歳となる
馥郁と妻が遺した沈丁花

高槻市 執行稲子

罪いくつ抱いて手合わす弥勒仏
ツーステップ春にはみ出るダンスの輪
ことごとくに迷信と言う天の邪鬼
山椒の実ほんと叩いて香のはじけ
不機嫌が治る一発ホームラン

高槻市 瀧本きよし

出る杭になろうといつも生きている
リハビリを終えて爽やか風をきる
米粒を箸で挟んで呆け封じ
嘘がばれ咄嗟に次の嘘が出る
外来語に弱い白髪の生き字引

高槻市 西谷 治三郎

ヘルパーがあした来るので掃除する
二日酔いするほど飲めた頃が華
フリーター何万いても国ゆたか
警察官上司が部下に逮捕され
立ち話しているうちに名がわかり

高槻市 井上 照子

水中花大きな秘密かくし咲く
信じてた甘さ痛みで返される
晴ればれと合格の顔みるカメラ
貧困に育った僕にある強さ
不始末を拭う上司も目はふたつ

高槻市 生田 義一

百均の店で事足る老いの日々
古写真ほんとに俺か鏡見る
お茶受けに田舎饅頭花を添え
肉よりもおでん食べたい冬の夜
久々に鍋の湯気立つ三宅島

豊中市 江見 見清

お弁当出るといからついで行く
お弁当ちよつと覗いてから開ける
ひらひらのお賽銭です今年こそ
独り良し二人でいてもそれも良し
こんな唄知ってたのかと歳を読む

豊中市 安藤 寿美子

八十歳生きざま水の如くあれ
八十歳恋の記憶も薄れたり
八十歳喜怒哀楽もほどほどな
八十歳遺言ノート買ったけど
八十歳妖怪変化も親るいや

豊中市 山門 タミ

和三盆抹茶一服雪の午後
ルンルンと話せば出るわ故郷なまり
リハビリで何が何でも歩き度い
早咲きの梅よあせるな寒気団
一年中春爛漫の花屋さん

豊中市 吉田 あずき

商策に負けておすしの丸かじり
福も鬼も歓迎します侘住居
物よりも心が欲しい歳となる
騒がせて実は自分の健忘症
一呼吸おけば言わずに済んだこと

豊中市 岸田 知香子

緊急時慌て動かぬ車椅子
処方され青息吐息抗ガン剤
仮住居マンション生活お気に入り
立春に吹雪く外見るガラス越し
庭付きに娘があこがれて春の花

豊中市 藤井則彦

弁当の何とも旨い二時間目
成人になるとスリルのないお酒
野良猫の宿が気になる雪の夜
亡き母の吐息が滲みる謡本
折角の新居に吹いた隙間風

豊中市 水野黒兎

雪の降るビルの谷間の一枚田
如月に風鳴りやまず友が逝く
鍋物の季節にひとり欠ける席
甕からすずめ湧き出る木曾の春
絵の具より濃い菜の花の真つ黄つ黄

富田林市 池森子

一本の道を通つ直ぐとは行かず
もうすぐを待とう地獄の蓋が開く
無理と無駄省けば五感から乾く
ロスタイムばかりが溜まる冬の坂
美しい順に掬っている金魚

富田林市 藤田泰子

飼うならば雑種がいいと思つて
壊れそうだから大事にしてくれる
年波という自然には逆らえぬ
同性だがチョコをあげたい人がいる
淋しげな顔琴線に触れてくる

富田林市 大橋鐘造

人間に疲れて被る鬼の面
目の鱗落ちて無口が喋り出す
一言が邪魔をしている仲違い
熱爛で尖った空気丸くなる
味方だと信じて渡すにぎり飯

富田林市 中崎深雪

花冷えに美女の意地悪想い出す
期待感ふくらむ三分咲きが好き
無口でも目が語る人もてたはる
飢えたこと忘れてないが食べ残す
すっぴんでも笑顔きれいな人やなあ

富田林市 片岡智恵子

金婚に市から届いた夫婦碗
半世紀迷いもあつた浮き沈み
五十歳の息子の歴史走馬灯
立ち止まる余裕をくれた昼の月
頑張った自分を癒すチョコレート

富田林市 中井アキ

まっ先に春と遊んだ路の臺
信じ合うそれだけで良い箸袋
掛け替えのない日と知つた砂時計
白髪にもときめきくれる冬母
片恋のリズムも春と弾み出す

富田林市 稲川 惠 勇

地団駄を踏んでるくじの桁ちがい
あつさりと兜を脱いだ意気地なし
返済が終わるとでかい顔で来る
三世代家がふくらむ古希の宴
住みごこち貧乏神に気に入られ

寝屋川市 江口 度

子が癒える爪の先まで血が満ちる
納豆の糸から余命たぐり寄せ
忍の字を千ほど書くと風が止む
部屋の隅から笑いをくれるシクラメン
雪おろし何べんもしてやつと春

寝屋川市 平松 かすみ

さくらんば食べ放題の思い出よ
少子化へ産めよ増やせよ言われても
傷口を捲る週刊誌が売れる
万引きを見逃すころ痛むけど
悪の道避けて歩めよ十五歳

寝屋川市 籠島 恵子

待ち人を見ながら友を待っている
二度とないチャンスだからと背伸びする
相槌を打っていたので誤解する
イモがいいイヤ麦ですと妻の酒
本番の方が楽しいレポーター

寝屋川市 富山 ルイ子

すぐぼろり涙腺ゆるくなってきた
文明の利器の携帯持つて見て
携帯を習う頭をひねりながら
寝た切りの友なおざりにせぬ介護
少しずつ友歩けると言う便り

寝屋川市 太田 とし子

置き替えてみてもやっぱり四畳半
児の巢立ちおいてけぼりの古畳
灯がゆらぐ仏のメールかも知れぬ
仏さん毒味したからハイどうぞ
またひと日暮れてしもうた春ですな

寝屋川市 森 茜

好意ある拍手を貰う負け力士
ふろふきの湯気ほのぼのと顔揃う
酔っ払いどうし通じているはなし
紫をまといつんつんラベンダー
おばあちゃんもう寝てはるわ午後八時

寝屋川市 坂上 高栄

ルーペにもお世話になって字を拾う
老齢化産児奨励急がねば
肩書を外せばどーっと来る疾風
豪雪地テレビニュースに胸痛む
恩讐を越えた洞門のみの跡

羽曳野市 徳山 みつこ

被災地にもう出たろうか露のとう

ことしまた私のために雛飾る

望んでもリストラはないどんと主婦

春だ春だと山いつせいに萌える

私もリセットをして新学期

羽曳野市 吉川 寿美

亡母に祀る御飯ふつくら炊きあがる

ぎこちなく夫が粥煮る熱三日

違うぞと自動改札通せんぼ

むかしばなしがとつても好きな木の杓子

鍵穴につまっているのはプライバシー

羽曳野市 安芸田 泰子

年金の暮しとなって寝正月

冬籠り猫も私も太り過ぎ

日向ぼこ猫と余生を分かち合い

水に流す約束をしてから疎遠

もう一度母に会いたいひなまつり

羽曳野市 三好 専平

山道の落ち葉に悔いはなかりけり

ままよままよとしぐれ降る街を

検事まで暴力団になめられる

凧を弾のごとくに頬に受け

地獄にも監視カメラが置いてあり

羽曳野市 酒井 一壺

開発へ山から届く果し状

微量にも心許せぬ塩加減

因縁の勝負となって負けられず

いらいらへ集中力がままならず

無駄削る工夫へいつも四苦八苦

東大阪市 北村 賢子

蒼天へ窓を一杯開け放つ

義理のチョコよりも自分に旨いチョコ

美しく咲いて静かに枯れる花

いまこの時の孫の笑顔を貯金する

凍てつく夜ことさら星が美しい

東大阪市 指宿 千枝子

雑念を社の森へ捨てに行く

センベイに飽きたと鹿がキャベツ食べ

国宝を見る二時間の美術館

コーヒーを入れて仏とティータイム

窓際に凍死している冬の蠅

東大阪市 安永 春

ゆらゆらと微震ですんだその裸足

シクラメン笑うたように朽ちてきた

風邪こじれテレビ見えます雪まつり

これということもないけど白い服

ひな飾り下見しまひよか松屋町

東大阪市 笠井欣子

自分では高齢者とは思っていない
日々好日お餅嬉しい焦目つけ
新年会他人の靴で午前様
気が引ける電話のベルはみな私
御主人の代筆悲し友痴呆

枚方市 海老池 洋

前向きの美学と思うジャンプ台
死に神に絡まれCTMRI
養生は修行の一つだと思ふ
青い空喜ぶときと恨むとき
医療ミスと言わさぬ手術承諾書

枚方市 鈴木政子

詰め寄って管理者困らす組合員
明日がない日本か吉野屋に人人人
粗もチンも不用のものが増え
女性専用車ラッシュやっぱり詰め込まれ
親子でも金銭上は他人です

枚方市 二宮山久

梅の香に酔ってる二人不倫かも
年かなあ一日一度は忘れもの
露天風呂月は東に日は西に
糖尿病なにより薬万歩計
ほら春が来てます散歩妻の背に

枚方市 安達忠央

青空も凍てつくなかを鮒釣りに
老いてなお心弾ませ枯れた恋
駅弁が好きで鈍行ひとり旅
生きる糧とどかぬ夢を持ちつづけ
喜寿傘寿個人タクシードライバー

枚方市 宮川珠笑

浮袋破れたままのマイライフ
なるようになって亡夫の七回忌
家事させず孫も抱かせぬ出来た嫁
仏飯は自動で炊いた無洗米
ちよぼちよぼの隣でやったり貰ったり

枚方市 森本節子

世も末か振り込め詐欺のこわい組織
留守番であつても娘の家はよい
手造りの友の赤飯格別の味
雛人形ひとつで部屋は若返り
思い切りシンプルライフにして正解

枚方市 荘司弘之

コンビニが出来て弁当手を抜かれ
寒い日もGパン破いてはいてはる
野良猫のように群がるスモーカー
ボール待つあのイチローのタイミンゲ
朝早く卵焼いてるいいにおい

阪南市 森村美花

散歩する道に嬉しい春を見る

薬より温泉が効く私です

ひと言はいつも逆らうあなた流

炊きたてのお米食べれる今日の幸

愛ちゃんのなんと可愛いあのポーズ

藤井寺市 高田美代子

この先はキミ次第だと手を放す

無駄だとは思わないから言うておく

冬ごもりの熊よそろそろ起きなさい

泥舟で逃げて行くのは善人か

達人は急かす慌てず身構えず

藤井寺市 太田扶美代

振り返る悲しい癖がなおらない

セーターを編んでいる間に恋が逃げ

春風は時に訃報を連れてくる

僕だけの銀河でタバコ吸っている

道連れはやんちゃ冒険させられる

藤井寺市 中島志洋

酒の力借りてはじめを付けにゆく

良心も少し酔うてる花の下

才媛も男の嘘についころり

訳聞けばそれほどない悩みごと

食欲だけの余生で味気ない

藤井寺市 鴨谷瑠美子

達筆な人と同じ筆を買う

こっそりと逃げたい時でない梯子

ふたありで見た虹だから秘めておく

厚化粧しても内気は変らない

オクターブ下げて意地悪言うてはる

藤井寺市 楠昭子

満面の笑顔に罨が伏せてある

どん底を黙って耐えて来た妻よ

農ひと筋嘘も野心もない野良着

忘れてるふりして生きる老いの知恵

女三人お喋り満足して別れ

箕面市 出口セツ子

ぬるま湯の中で居眠りしてる脳

古稀すぎてもまだ翔んでいる友楽し

どん底で見ると人間よく見える

冒険も恋もしようと誘う風

夢無限フトンの中も大宇宙

守口市 井上桂作

失敗を思えば思慮のない私

大脳に生きる意欲をもち続け

丸い月形かえてはご見参

物あふれ働きバチも遊びぐせ

おてんばも和服を召しても静か

守口市 石森利昭

百薬の長が少々効き過ぎる
もう半分つけてくれよと銚子出す
揉め事を水に流すと言う勝者
赤飯が出て誕生日思い出す
熱弁を聞いている眉に唾つけて

八尾市 宮崎シマ子

自分では気がついてない絡み酒
絡み酒あいつの口へガムテープ
絡み酒らしいねそつと抜け出そう
絡み酒夫でなくてよかったね
西の窓あけると月が笑ってる

八尾市 吉村一風

たつぷりと七草粥に春もらう
寒いのに妻立ち話まだ続き
うまいこと酒で本音をしゃべらされ
酔うとすぐ父は白黒つけたがり
いい年して医者にしつかり叱られる

八尾市 長谷川春蘭

しつかりと余生見つめる目の手術
浄土まで見える期待で目の手術
手術中白い時間と雨の音
術後良好何見ても美しい
点滴が死ぬな死ぬなと落ちてている

八尾市 内海幸生

フリースは膨れた妻に似て可笑し
筆順を問わねばすごい達筆で
潔癖性生きているから出る埃
寝転んで書いた手紙と字が喋る
補聴器を外し夢二と対峙する

八尾市 山本宏至

子供には迷惑なだけ親の夢
身のほどを弁えぬ夢たんと持つ
くやしさが生きる元気のもとになり
用心で厚着をしたら風邪をひき
眠たくてテレビ消したら目がさめる

八尾市 井尻民

三度さんどおしゃれに食事してひとり
笑いたいけれども笑えないつらさ
採りたての素顔が並ぶ道の駅
ざんげ聞かされた仏が笑い出し
申告の済んだ順から春が来る

八尾市 生嶋ますみ

米を研ぐ死ぬまで米を研ぐこの手
キッチン窓から鬼は外の豆
親の願いしらん顔しているニート
花にまで相性がありまた枯らす
薬より効いてるらしいチョコレート

八尾市 篠原 いつふみ

リハビリの一步に明日が見えてくる
告白も別れ話も観覧車

九官鳥ブスを覚えて嫌われる

取れかけたボタンで糸にしがみつく

鬼は外隣で鬼が寝ています

八尾市 村上 ミツ子

ほつたらかしのペランダの梅咲きはじめ

言いにくいことをずばりと親友は言う

丸もうけのいのち大事にしなければ

振り込め詐欺の電話うちにはかからない

ふりだしに戻ると心白くなる

八尾市 高杉 千歩

捨てる気で着たのにまたも洗濯機

続けざま割るはこぼすや三りんぼ

そして今趣味が重荷の絵具皿

朝寝坊日記に詫びて三月尽

楽しく生きたいから病院を変える

八尾市 宮西 弥生

まだ迷う年齢でときどき派手に跳ぶ

一歩ずつゆずって丸い絵が画ける

よろこびへ一願不動撫でまわす

まだ少し他人に役立つ口手足

ポケットの昔むかしがしゃべり過ぎ

八尾市 神原 まさと

切符買う手順を脳に忘れられ
どうなった脳から脳へ問合せ

酒煙草止めても川柳追いつけず

お守りに万円硬貨ぶらさげる

頑張つて見ても老人白内障

大阪府 澤田 和重

お見舞のぶつきらぼうが温かい

僕の運貧乏神に支配され

ノーと言う勇氣ないのが悔やまれる

頂点の椅子でお詫びも芸の内

独身にけじめをつけた披露宴

大阪府 初山 隆盛

チョコレートハートを甘くノックする

春うらら仁王も花に浮かれ出す

こつそりと妻のへそくり足してみる

ふところ聖書と銃をちらつかす

善行を積みば行けそう弥陀の下

大阪府 桑田 ゆきの

歯科の椅子軽音楽で癒される

磴のぼる気遣いくれる手が温い

病む床へジャンケン勝たせ笑わせ

母さんはキッチンドリッカー鼻歌で

へそくりを隠したスーツクリーニング

大阪府 野田 栄呼

いやな事時間が軽くしてくれる
暇な人羨む方が幸せか

大家族家事大半をこなす喜寿
延々とらちのあかない拉致事件
着る人でずい分違う同じ服

大阪府 米澤 俣子

許すたびひとは段々丸くなる
分の悪い時は何にも喋らない
きのう今日弱気が先に顔を出す
ここだけは抑えておさえてと腹の虫
のんびりとしているようで抜け目ない

神戸市 山口 美穂

明治生れ我慢と辛抱で生きた母
母送るちらほらの梅寒椿
遺影の母泣きなさんなど笑いかけ
もう少し泣かせて涙枯れるまで
泣き虫のわたしを犬にみつめられ

神戸市 池田 善守

日めくりの時の早さを教えられ
吾が人生あの一言が分かれ道
年老いて神かくしごとと多くなり
いい加減力かげんがむずかしい
幸せのものさし十人十色なり

神戸市 木村 貴代子

スーパーの目玉集めてリッチな膳
冷え症と肩こり供に老いの坂
キオスクの達人瞬時に釣り渡す
一億が中流だったのは昔
笑顔 笑顔 脹れっ面は凶の相

神戸市 山口 光久

まだ生きる力欲しくて辞書を引く
働くことだけが取り得の蟻である
古里の風がまさかにフォロウする
いよいよの時は神さま仏さま
妻にだけ大威張りする空三元氣

神戸市 伊勢田 毅

時間切れ一言居士の出番なし
年金に浸って曜日間違える
負け犬の子を標的にパンフくる
花粉症来るなら来いと策を立て
マニュアルで甘言電話さばく妻

芦屋市 黒田 能子

口火切り責任重くなってる
弁当の匂い残っているカバン
弁当を空っぽにして子が帰る
騒がしいテレビの側で昼寝する
ウォーキング リズムの狂う信号機

尼崎市 春城 武庫坊

吐く息の白さ生きてる証なり

チャッチャッチャ昔の妻は細かった

大正二桁身ゆすれば骨が音

寒くても影はとことんついて来る

山道を歩む無心になれるまで

尼崎市 春城 年代

うす氷して零度以下を体感す

なんの風邪とわからぬままに風邪治る

戦時下より荒んだ人のいる巷

婚礼を控え老婆も顔を剃る

忙しい日々は看護師のほほ上気して

尼崎市 田辺 鹿太

入念に靴を磨いて何処へ行く

午前二時命の音がするしじま

蟹の目が穏やかな日は時化ている

待つよりも待たせる方が気が重い

抒情歌に泣けてくるのも歳のせい

尼崎市 長浜 美籠

迷うまい掌に馴染み出す九谷焼

束縛も愛の延長だと悟る

軌道修正しながら歩む折り返し

無防備な寝息を聞いている安堵

久方の友と向き合うジンファイーズ

尼崎市 軸丸 勝巳

大合併日毎に変る日本地図

合併の故郷市となり過疎進む

合併に意見も添えて新住所

合併の市名歴史が消えてゆく

ウエディング孫の招待飽きず読む

尼崎市 林 昭三

遠縁のご祝儀姉と談合す

遅くても普通電車に座つてる

相棒と呼んでる彼も気が弱い

中二階信じた梯子外される

保育器の中 足番号と初対面

尼崎市 松下 比ろ志

初詣で新年歩く土ふまず

お神酒飲むひやりと神が喉通る

バックカスにも酒税値上げは効いてくる

門灯に温もりが出る寒い夜

子が巣立ちぼっかり穴の開いた春

伊丹市 山崎 君子

出迎える鬼は可愛い嗟峨の面

為せば成る淋しくひびくひとり言

宅急便なずながくれた春の音

お赤飯里のアズキは粒揃い

百均にはじめて買って傘二本

川西市 米原雪子

手を掛けず口贅沢に馴れてゆく

辛勝の瞬間繰り返すテレビ

惜敗の悔しさ核で威すよう

オープン戦待ち切れないでキャンプまで

春日差し眠気誘われ本ポトリ

川西市 西内朋月

鱈酒を飲むと浮んでくる友よ

アリバイに駅弁を買う百貨店

弁当が半額になる午後八時

一割ほどの胃袋をいとおしむ

真夜中に屋根裏の梁はせている

三田市 久保田千代

この人の何がここまで怒らせる

霜の張り具合で揉めている夫婦

選択を誤ったのが運命か

投降も自決も出来ず今を生く

平凡に暮してますと年賀状

三田市 北野哲男

指一本もう千円と言う頼み

妻というつつかい棒が邪魔な頃

冷や飯もお茶漬けという手で凌ぐ

偽造ではない小銭でとぶつちやける

仏像を逃がさぬように外に鍵

西宮市 門谷たず子

幸せでした領くように仏の灯

風花の舞う日に逝った母の下駄

思い出をあたためあえる友がいる

のどの渴きこころの渴きかも知れず

人恋し淋しさに振る胸の鈴

西宮市 西口いわゑ

無駄という楽しい時間あってよし

たこやきを食べてる顔のしあわせな

轟音を立ててわたしの流れ星

熱爛も冷やもまたよしよき仲間

わたくし色で生きるつもり如初鏡

西宮市 山本義子

花だより近くの森は詩人なり

春の雲はすっぽり乗ってみることだ

携帯電話 手品のタネがピピピ鳴る

来し方は迷うて揺れてまだ未完

恋の手品すばとお見せ申します

西宮市 亀岡哲子

名も家も知らないけれどお友達

春のささやき小さな音を探す旅

はよ起きな夢が消えます雪溶ける

シャルウィダンス指の先まで若やいで

スタンバイ春のポーズで幕上がる

西宮市 秋元 てる

安定の底抜けたよな世に生きる
ラッパ水仙銃弾尽きたよう倒れ
朝鏡年齢だけは不足なし
一矢報い気が済んだらしまた炬燵
マイペースなどと我儘通すこと

西宮市 菊池 トミエ

しんしんと雪降る夜の百度石
福は内百粒撒いてそれ拾う
失った家族を探し印度洋
裏切らぬ球根植えて春を待つ
梅咲いてほのかに香る坪庭に

西宮市 井上 松煙

天災の頼りにされる自衛隊
川柳と自家菜園で満ち足りる
エレベーター プザーが鳴つてあらいやだ
車座の酒が仲間にあみかける
阿呆となり胃袋に楽させてやる

西宮市 牧 潤 富喜子

義理欠いて歯医者のだアを押ししている
ふと不安息子が煙草止めている
整理した後からたまる空ぶくろ
立春の鱷の腹のほろ苦さ
花街の裏に小さな橋がある

西宮市 坪井 孝一

運命だと素直になれず年過ぎる
花を買う男性みんないい人だ
アツプルパイ食べて初恋呼んでみる
最初はグー奇麗なひとで次もグー
お父さんノーネクタイが良く似合う

西宮市 緒方 美津子

これ以上被災地泣かすなよ水柱
入学児防災頭巾必需品
わたくしの元気な秘密つまみ食い
定年を待ちわびていたバスポート
ああ夫婦同じ歩幅で老いられぬ

姫路市 古川 奮水

余つてる年賀ハガキでクイズ出す
河川敷鳥待ち受ける声がある
雰囲気がよくて本音の議題出す
ペランダの居心地知った鳩の群れ
西高東低子等たくましく球を蹴る

奈良市 天正 千梢

厄年といえは毎日厄日です
かやぶきで民話を聞いて癒される
親切の押し売りだよと子に言われ
一の字を書いて占いで占ってもらい
黄色い口ばしで一人前の事を言い

奈良市 米田恭昌

祝杯にまたまた断酒日延べする

魔女の着るトップレス眼が開けられぬ

雑学に長けた男のクイズ好き

十八番とりで歌った上機嫌

老人パワー見せる白髪の新ユーフェイス(二度の暁)

奈良県 渡辺富子

桜餅ほんのり香り母を恋う

燃え尽きた男花見へ誘い出す

ハイヒール恋のけじめをつけに来る

境界線少しほかして会うふたり

残業も出張もカラいい気だね

生駒市 飛永ふりこ

春一番身振りしてるわらびの芽

仮面裏ピエロの涙人知れず

忘れたいことほどちゃんと覚えてる

黙ってる間合の底にある重さ

道草のおかげですぐに立ち直る

香芝市 大内朝子

ふる里の匂いを思う春霞

ごめんなさい言うきつかけを掴む風

赤い糸不思議な縁を結び合う

ストレスの頓服薬だ青い空

あるがまま生きて合うひと合わぬ人

大和郡山市 坊農柳弘

陽春の彩りを選ぶ絵の具皿

自惚れを諭すもう一人の自分

沙羅双樹今母のこと父のこと

生きたくて虚飾の首を晒らして

座禅組むその空間に弥陀の笑み

和歌山市 福本英子

人恋うてちらつく雪に独り酌む

二羽連れの目白に妬ける庭の鶉

整列の足音近くなる怖さ

当らなくても良いのに予報どおり雨

あと少し春一番を待つ鼻炎

和歌山市 牛尾緑良

指切りは冬から春へ向かつてる

未知数という希望をいつも抱いている

ローソクの白に輝く雪の白

自転車でひとり占めする春の風

肩凝りの話際限なく続く

和歌山市 桜井千秀

一時停止すれば納まる胸騒ぎ

確実な明日のドラマへ種仕掛け

気まぐれな天使の罫に堕ちてみる

日々好日コマーションから流行語

罪ひとつ認めて神に跪く

和歌山市 玉置当代

立春を待ってましたと露の臺
ブランクを抜けるとベンが走りだす
孫という宝物にも励まされ
ソプラノで吼えてしまった更年期
信用をしすぎて踏んだ落とし穴

和歌山市 榎原公子

年金の枠はみ出してから悪寒
三食をさつちり取っている無職
パソコンもケータイもなく被害なく
ゆっくりと構えて損得に鈍い
眉描いて今日の相手は手強いぞ

和歌山市 古久保和子

ふんわりと笑っていよう春だから
目覚しを止めた記憶が今朝もない
夫婦茶碗のひびから伸びる低気圧
路地に住む人間の数猫の数
コタツと言う甲羅で動き鈍くなる

和歌山市 楠見章子

はるいちが私も草も生き返す
とりあえず嬉しい話抽斗に
坂のぼる元気は別にとつてあり
ファインダー子供の笑顔残さねば
色褪せた傘にやさしい春の雨

和歌山市 武本碧

袖の染み母の形見の息遣い
台風的眼が振り回すマスメディア
輪の中のポテトチップが騒がしい
一徹を動かす梶子が見当らぬ
そして春浮世の風も温み出す

和歌山市 田中みね

在宅介護母しあわせの十余年
孫 曾孫 子に看取られて逝く旅路
朝起きて主婦になりきる割烹着
限界へその肩凝りを持って余す
最後の手段マッサージ機をゲットする

和歌山市 堀畑靖子

一番と誇れるものはないけれど
おとうちゃんだけは信じていた指輪
ゴミ出しを買ってくださるダンナ様
おばあちゃん なんてなんでに責められる
あちこちで日本女性が目覚しい

和歌山市 山口三千子

虎の子を破産宣告されていた
後足で砂かけられた事を知る
夫には内緒ねむれぬ夜が続く
最初から計画的と友は言う
振り向けばネギを背負った鴨だった

和歌山市 福井桂香

海南省 谷口義男

花粉症グッズそして儲ける人もいる
シヨートステイ左右玉手箱開けた人ばかり
本当は私もハウル十八歳かもね
たたかいの日々に明かりが見えてくる
リハビリに花の館を拾い読み

和歌山市 宮本三喜夫

孫からの進学決まる知らせあり
卒業し信じた道を進みます
今年こそこれ仕上げたい夢書く
気にしない生かされているこの世です
可笑しいね連鎖反応事故続き

和歌山市 松尾和香

ペアルック恋の芽ばえを知らされる
修羅越えてそれからひとり空の下
ひとり旅産地名物食べ歩き
白銀の伊吹迎れば亡夫の影
飲んで食べ温泉入り良く喋る

海南省 三宅保州

何歳になっても春はやって来る
本人も観念をしたモニタージュ
バス停が消えて路頭に迷います
ひと回り大きな名刺邪魔になる
力んだら落ちるほかない綱渡り

健康の余得退屈知らぬ老い
心酔の出来る政治家姿消す
弁護士が知恵貸し黒も白にする
声掛けてくれたが思い出せぬ顔
食べるだけ食べれば下戸は席外す

海南省 堂上泰女

男性のフェロモンに酔う韓ドラよ
待ってました振り込め詐欺を懲らしめる
碧空はもう歌つてる春のうた
ヴァイオリン聞きつつ明日の構図練る
丸かじりしたい女孫のほつべたよ

和歌山県 中後清史

謙譲の美德がほしい都市砂漠
年の功だろろう話にそつがない
オレオレの電話がわが家にもかかる
おっとどっこい大股になる水溜り
欲望を捨てれば木偶坊になる

鳥取市 岸本宏章

ふるさとが市になる先ずはおめでとう
鑑定には出せぬ家宝の壺がある
チラシには残り僅かと書いてある
勲章もメダルも欲しい歳になり
大変なことだ都心に雪が降る

鳥取市 岸 本 孝 子

マネキンが彩り競い春を待つ
犬掻きの人生それも悔いはない
借金のできぬ身になり怪我もない
過疎に住みきらめく星は日本一
欲捨てたなどと軽々言うでない

鳥取市 近 藤 佳 子

盆梅の白敷きつめて一月尽
雪しんしん地下の筍目をさます
爽やかな友のコールのあたたかさ
長い物に巻かれたくない野武士の血
粗塩で揉む間引き菜も乙なもの

鳥取市 土 橋 睦 子

春風に首覗かせる土竜の子
残り火は私のためにする化粧
罪深い私を許す仏さま
熱爛にオットットまで出すお客
医学書にみなあてはまる要注意

鳥取市 土 橋 はるお

お隣のペット礼儀を弁える
陽の沈む頃は酒屋で冴え返る
ペットにも冷暖房費嵩みだし
化粧して出ても夫が妬きもせず
もう誰のものでもなくてせぬ化粧

鳥取市 富 山 檳榔樹

肅肅と辻袂合わせ妻が舞う
うつり気のどこかで甘い風の乱
淋しくて涙を隠す蛇の目傘
山頂のオゾンで旨いにぎり飯
写経する心にネジを巻いている

鳥取市 加 藤 茶 人

縁側で集めて楽しだんご虫
今日何を食おう やもめのひとり言
禿げている割にやたらと髭が濃い
尾に羽根がはえて話している自慢
ダメージはないねお笑い見て笑い

鳥取市 録 沢 風 花

中越の雪よ今年は控え目に
大津波自然の怖さ思い知る
孤独とは言わず気儘なひとりぼち
確かだと思つたのに物忘れ
寒月に平和な夜を感謝する

鳥取市 裕 寛 子

なんでもないことよ まつすぐ歩くこと
雪かきなどするなど言われしたくなる
雪道をこらんで恥をかかぬよう
ふくらんだ蓄吹雪に黙りこむ
合併に吞まれて未だ水面下

鳥取市 福田登美

思い切り笑って見たい福は内
郵便受け溢れるほどの春の音
挨拶が上手に出来るランドセル
病院へ明るい顔を見せにいく
看護師が素敵に変わる更衣室

鳥取市 西川和子

温い手があるから一歩ずつ耐える
鍼灸に少し目覚めた血の流れ
綻びを繕う針はまだ捨てぬ
先を行く人は影まで冴えている
化粧塩鯛も祭に踊り出す

鳥取市 美田旋風

大風呂敷広げてみせるケチン坊
蝶が舞うわが家の庭は恋の園
傘寿への老々介護きつい坂
修理より新品買えという日本
日本語は喋るが読み書きできぬ子ら

鳥取市 奥谷彩子

氷柱とけ春の化粧をする花芽
いい笑顔ふれてほぐれる失語症
捻子巻いて生きる活力錆びさせぬ
伴走する妻の心がまだ読めぬ
ふる里に心休まる老母が待つ

鳥取市 夏目一粹

不揃いでいいではないかわが家族
毎日を家族ドラマに支えられ
もう少し金が貯まると丸くなる
歳かさね負けたからとて気にならぬ
得だけで生きれないから面白い

鳥取市 福西茶子

縦長に映す鏡よ試着室
泣きたくて死にたくてまた酒を飲む
体調はよさそう妻の声冴えた
子も孫もみな連凧に乗ったまま
裏庭も春が来たらし路の臺

鳥取市 上田俊路

ルンルンとかなった夢に酔い痴れる
ふるさとへ帰る未練を断ち切って
里帰りは各駅停車雪景色
限りある命ゆったり生きるのみ
日曜日はバジャマ着たままおじいさん

鳥取市 中村金祥

ビッグバンそれから長いまっしぐら
平成維新 昔人間ではおれぬ
朽ちた船過去の栄華は振り向かぬ
老い二人大きな家を持て余す
振り込めへ偽のお札を送ったら

鳥取市 山本 益子

花粉症罹った兆しハックション

メールへの電源切つてほつとする

草餅の良過ぎる色に春を買う

釈迦祭り天下指す身に甘茶かけ

ふと思う過去の人生仄かバラ

鳥取市 徳田 ひろこ

年金に染み込んでいる労働歌

舫い船切り離される時がくる

病院の花一輪も力なり

わたくしにエールをくれてるベツト

主流から離れて泳ぐ自由形

鳥取市 近藤 春恵

生活を守る両手が荒れている

年寄せて子供を杖として生きる

子供への虐待神も絶句する

美容院出ればキラキラ風薫る

来客へ申し訳ない犬が吠え

鳥取市 武田 帆雀

御身が第一 野大の群れを出る

自動ドア閉店客に疲れ切る

安来節首を回してご苦労さん

スクラムをガッチリ組んだ縄電車

三方に結納 壁に鶴の軸

鳥取市 永原 昌鼓

願かけた神が笑つたおめでとぅ

黙つても生き様語る顔の皺

幸せの価値観変えた大津波

後戻りできない道だ踏みしめる

便利さの隙間で不幸産むメール

鳥取市 倉益 一瑤

子育てのポイントぎゅつと抱きしめる

春風よ吹け子らは今とぶ兆し

眉キリリ女いくさの準備中

その昔母の着物を食べました

パトロンはじいじヨッシャと頼もしい

鳥取市 吉田 孔美子

凱旋門一度観ようも適わずに

顔だけがやけに大きい絵のことは

さかずきを五十並べた祖父もいた

検診後さかずき見ることも法度

脳病めど指にさかずき遊ばせる

鳥取市 西村 黙光

生き恥をさらし傘寿の峰辿る

ペンの先 老化現象さらけ出す

パソコンに歳を取つたと教えられ

老いのつけ時たま狂う羅針盤

歳取つたとけらけら笑う広辞苑

鳥取市 植田一京

鳥取市 林露杖

螺子巻いてみても戻らぬ物忘れ
淡雪に豆ふつくらと炊きあがる
花開く予感よ春の宵ぬくし

この世とはレッスンドおりゆかぬとこ
誘惑に勝つてさつぱり元氣出ず

踏まれても消える白雪明日がある
高笑い優しい時が流れてる

鳥取市 宮脇道子

幸福の貯金目減りで不安積む
ウインドーに首を突き出す老姿

笑皺増して幸福抱っこする

家中の予定を仕切るカレンダー
何事もいい方にとり生きていく

来年も日記はきつと書いている
信用を武器にたたかう小商い

壮年に独身という貴族増え

鳥取市 有沢せつ子

古里の土はいつでも温かい
悪友と呼んでくれるか笑い合い

ほんやりと平均寿命を生きている
嘘だろうと言えぬ自分に嘘がある

ほのぼのと老いに忘れず朝がくる

鳥取市 田村邦昭

正月のずばら歩行の脚重く
老いふたり炬燵に嵌り日脚伸ぶ

見た視ない言つた言わない惚け二人
凍てる夜は頭寒足熱早寝する

寒月にそつと囁く老いの愚痴

嘘は言わぬと一流の嘘を言う
手の内をみんな読まれている平和

人並みに思慮分別も癖もある
良い夢を見させてくれるのもベット

そこはかと民話の匂うおばーちゃん

万両も千両の実も鳥に遣る
瞬きをしただけなのにもう弥生

水を飲むだけでも太る冬ごもり
新酒の上がり杜氏の腕は冴えている

福袋の梯子してきた年女

倉吉市 野口節子

背なを押すエールに選手燃え上がる
丹精に応え葉ばかり花咲かぬ

膝元を離れぬ辞書が綻びる
焼き上げた鯛にうつつすら化粧塩

五十年苦楽知つてのお針箱

倉吉市 山本玲子

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 最上和枝

倉吉市 山中康子

数かずの関所をくぐりミス日本
蛇口から海まで届くかたり草
見る側もはらはらしてる皿まわし
向かい風夫に浴びせて風邪ひいた
無になって可愛い婆を演じたい

倉吉市 松本よしえ

大津波今のいままで観光地
和服着た祖母を見直す誕生日
太陽に力を月に安らぎを
枯野原 春の変身見てほしい
冬の野に何を探すか鳶ひとり

倉吉市 米田幸子

お互いに騙し騙され共白髪
真相は玉虫色に暈される
鼻ぐすり効いてくるのを待っている
ニアミスで若い命の芽が摘まれ
古惚けた戸棚は隅へ追いやられ

倉吉市 猪川由美子

愛子さまの成長早し法急げ
暗証番号 誕生日にはご用心
謹慎後すぐまた癖の口滑り
さあーてさて球団揃い幕が開く
ストレスは初物食って吹っ飛ばす

米子市 岡日枝子

音のない部屋でいつもの独り飯
いつものようにテレビだけが喋っている
のつべらばうな裏の顔を知っている
舵おろす静かな入江探してる
傷口の深さをどこまでも隠す

米子市 林瑞枝

いち面菜の花蛇もわたしも殻を脱ぐ
夕映えて胸にこんこん涌く祈り
流行をゲストのお洒落見て学ぶ
生きてゆくアイディア積んである茶の間
哲学の顔して風は風に乗る

米子市 白根ふみ

花びらがこぼれる頃はつがい去る
届かないところで孫が伸びてゆく
肩書きが消えて気楽と侘しさと
いい話解約金のこと言わぬ
あからさま言ったらもつと住みにくい

米子市 門脇晶子

ゆっくりと回りはじめた親子独楽
春をさがして歩こう手袋ぬぎすてて
知人また逝き大山の寒さかな
ジーパンの嫁がしっかりものを言う
しっかりものが仲間におつてたのしい

米子市 澤田千春

思いやりを受けて顔中ありがとう

呼ばれたらハイと答えるさわやかさ

雑草と声かけ合って生きてきた

嫌な話粗塩ふって清めよう

歳を忘れ挑戦したくなる怖さ

米子市 青戸田鶴

どこまでもとぶタンポポの綿毛たち

さざん花が散りおさめた風の朝

幸せな写真はみんな箱に入れ

ころばないようゆつくりと階段を

やわらかい言葉で傷をつけ合って

米子市 永井美津子

川原には昔と同じ風が吹く

現実の不条理並べ夫の通夜

一生を独りにされて墓を守る

冷えて行く夫の手摩る足摩る

返り来ぬ夫と知りつつ慕る思慕

米子市 野坂なみ

限り無い皇統燦と愛子さま

さわやかな絵巻き展げる内親王

さわやかな嘘許してね四月馬鹿

兎のころへ童話の苗木植えておく

駅までは楽しいリズムひびかせる

米子市 中井ゆき

一葉がいつも財布に二三人

天命が分らないから日向ぼこ

おぼろ月私の肩も丸くなる

ねむられぬ枕の中に誰かいる

終章はメルヘン馬車にのってゆく

米子市 木村春枝

美しい皿が料理を引き立てる

五線譜におたまじゃくしの踊る春

にっこりがなかなか出来ぬ古鏡

億の金見た事ないが聞き慣れた

ファッションは寒さ知らない若い風

鳥取県 深田俱久

子の快癒願ひ親爺のたばこ断ち

とつとつと話す言葉の芯太い

息づかい親爺そっくり真正直

娘の名 愛か藍かで迷つてる

真実がほほえむ日まではい回る

鳥取県 山宮愛恵

いい人のまんまで逝つたうちの人

もてなしの一品里の味じまん

梅一輪去年の日記出してみる

通販で紅とマニキュア買ってみた

イオン水たつぷり飲ますスイトピー

鳥取県 鳥羽直市

冒険をしながら視野を広くする
生きている蟹に睨まれ食べにくい
停車場もホテルとなつて客を呼ぶ
散歩するたび珍しい風に遇う
不思議だなつぎつぎ今を忘れてる

鳥取県 鳥羽玲子

生きもののように眼鏡の度がすすむ
過疎の駅誰も乗らないけどとまり
ホツとする駅のホームの立ちうどん
穴ぼこにはまった運に身をゆだね
折角の小春日散歩遠まわり

鳥取県 石谷美恵子

指切りをした球根と春を待つ
よく笑う嫁が我が家の天下とり
淋しさを逃がれるところは本の中
年金は汗に応えるだけくれぬ
正座する妻の敬語へ畏まり

鳥取県 平尾菜美

傘さして欲しい地球が叫んでる
しなやかな仮面で交わす鉢合わせ
気心を包み頑張るのし袋
私心ない税に淡い風が吹く
黒子にも包む義理ある母の笑み

鳥取県 佐伯やえ

余命表春の畑につるしとく
三寒四温 大脳のネジ巻きなおす
残雪がちよつと詩人にしてくれる
二千五年省略せずに生きていく
紅梅一輪理法院正誉義立居士(父法要)

鳥取県 山下節子

親展も同じ料金普通便
肩書がとれて天下の声を聞く
歩きよい靴が旅路を弾ませる
写メールで会話単身赴任です
まっしぐら津波が鳥を呑み込んだ

鳥取県 盛田夢路

神様のいたずらたまに受けている
縁の下の石もしっかり腹括る
日溜りに人の心が解けた午後
如来さま今朝も手のひら暖かい
指切りにはにかむ爪が頬染める

鳥取県 竹信照彦

旧曆に合わせて雪が降っている
積る雪今日も外出禁止令
除雪車の雪が閉ざした車庫の前
孫の撒く豆に当って災とする
友が逝く僕の憧れポックリ死

鳥取県 谷口次男

池で鳴く音痴蛙も音楽家

トンネルが俺のお城というモグラ

親切に隅々映す三面鏡

戦地の子福を信じて弾よける

風を受け人の心が揺れる春

鳥取県 太田幸枝

まだ女夜の化粧も忘れない

彼を待つ時計の針が進まない

レコードの針は青春走馬灯

さりげなく母がのろけている平和

親馬鹿が出世払いを信じてる

鳥取県 澤裕子

重圧に耐えて応えてサクラサク

コーヒーが脳のもつれをときほぐす

指きりの温もりくれる孫がいる

目に見えぬ効果に挫折くり返す

母からのエール宅急便でくる

鳥取県 蔵本悦子

大津波初夢なんか見ておれぬ

目的があるから後は振り向かぬ

雪かきでニセ札作る暇がない

寒気団仮設の屋根に降りて来る

怒鳴られて二倍やる気が湧いて来た

鳥取県 下田茂登子

問題はレベルの差からきた不仲

ケンカする相手が欲しい嘘本当

苦しみは私に知恵をくれました

見栄張って病気を隠す芸もあり

黒幕の腹はなかなか読み取れぬ

鳥取県 奥田保子

まだ六十路夢を追っても良いでしょう

自信持ち好きに行動できたなら

お迎えを考えだすとボケが来る

どうしてと言いたいニュース多すぎる

参観日孫の意外な面をみる

鳥取県 国森武子

これでよいのかもしれない目をつむる

私は何もいわずにのみこもう

子は孫を育てる責任者だから

まじめすぎ面白くない息子かな

私は息子を信じ期待する

鳥取県 山本正光

他人様が読んでよめる字まだ書ける

楽隠居できる訳などさらさない

日本人横綱いなのは不思議

あとで酒でるといふ会だけは出る

日本は目出度い老いの多数国

鳥取県 吉田 弘子

偏差値へ背伸びしたがる志望校

天災は七十五日死語にする

今年またあつてはならぬ事故続く

九十九折今わたくしはどのあたり

挑戦者の背に辛抱が貼つてある

鳥取県 森川 あらた

嫌いな物は死ぬまで口にしたくない

足音を聞き分け尻尾ふるベツト

とりあえず化粧してから行く散歩

わたしより人気ある女みんな敵

悲しみが深いと落ちてこぬ涙

松江市 三島 崧丘

古稀の春 未完の夢を見つづける

世の中を震撼させている阿修羅

遠来の客連れまわす国自慢

朝寝したツケが真夜中まで祟り

感涙に悲喜こもごもの味を知る

松江市 川本 晔

階段をのぼると月が顔を出す

踊り場でインブツトするある予感

いいことだけを覚えようかと言うこだま

ときどきはうそぶいてみる屋根瓦

洗うとき いつもつぶやく欠けた皿

松江市 佐野木 みえ

目覚めればバラの香りの中にいる

試着室 今年の色を選んでいる

一言が多くて誰か傷ついている

ライバルが私の胸に住みついた

ライバルときょうはコーヒ飲んでる

松江市 松本 知恵子

鬼は外 父さんの声いまひとつ

お雛さま飾りゆったりするゆとり

それからのこと海鳥と話してる

菜園のだいこんの葉も一品に

善悪は問わずに軽い自動ドア

松江市 銭山 昌枝

家計簿へいきなり津波押し寄せる

干渉しないのは無関心なのだろう

腹立っているのに笑顔してしまふ

四十のわが家の兎まだ惑う

庭の切り株りんごいちじくさくらんぼ

松江市 安食 友子

今生の別れにキーもわなないた

相席で味もそくさ逃げてった

漆黒の闇でつと笑む観音よ

きよろきよると啄む鳥もリズムック

あんた方人を貶して晴れますか

松江市 小川 注湖

出雲市 吉岡 きみえ

絵馬の数神は未来を聞き分ける
トンネル工事未来を開く予感する
腹八分言葉も八分よいようだ
おじいちゃんおばあちゃんいて僕がいる
家族守る勇氣は何時も持っている

出雲市 石倉 美佐子

さよならは何時か来るだろ万染の桜
初桜 子守唄など聞かせましょ
戦い済んで童に還る風の神
チンパイ夫の足におまじない
私の守り刀も錆びている

出雲市 富田 蘭水

ストレスを減らす笑いを日課にす
ポランティア見えぬ宝を積んでいる
立読みで暦の運勢味読する
鬼は外それでも一つ鬼を飼う
きつと成る寒肥をしかと埋めておく

出雲市 園山 多賀子

川柳をこよなく愛し俱会一処
沸点に佇って女は仮面脱ぐ
齒に衣を着せると言葉重くなる
忍耐を誇示してポトリ寒椿
二重封私の本音洩れぬよう

充電を忘れた朝の生たまご
冬ごもりやぐら炬燵の力こぶ
三寒四温 四温の中で抱く希望
春になりや酒もうまかる花も咲く
行間に嘘八百の鬼が棲む

出雲市 伊藤 玲子

裏わざの上手いカラスに嗤われる
番鳥淋しいわたし唆す
淋しかった椅子が優しいことを言う
本堂の椿悟った顔をする
まだ続く長い旅路に要る笑い

出雲市 小玉 満江

さがし物一日一度はする私
人間のように口ポット格闘技
新札を偽札じゃないかと撫でて見る
機内から一つ見おろす雪の富士
荒行を終えて凜凜しく若い僧

出雲市 岡 あきら

向かい風少し力を抜いていく
労りの言葉にはっと立止まる
改憲へお好きなようにマツカーサー
改憲へ九条じつとしておれぬ
愚痴聞いてあげても力にはなれず

出雲市 多久和 敬子

あなたにも言えない事が二つ三つ
豆まきが足らぬか鬼が居座って
夫婦です鬼になつたり笑つたり
句のヒントさがして歩く散歩道
風邪の床夫の優しさありがとう

出雲市 岸 桂子

海のない街に港の絵を送る
花を切るためらい傷をおいながら
肩の力を抜けば越せるか水たまり
我ままを捨てねば橋は渡れない
花が咲くかすかな音も生んで咲く

出雲市 佐藤 治代

わたくしの未来を染める色探す
赤い傘似合うつもりで差している
淋しくて愛想笑いが止められぬ
何だかんだ言いつつ借りが返せない
空腹を埋める大判焼き二つ

出雲市 小豆澤 歌子

朝の庭今日の幸せ吸い込もう
小出ししてまさかの力溜めている
どの色に染めてみよるか白い布
孫描くピカソのようなクレヨン画
虹の橋逢いたい人のいる向こう

出雲市 久谷 まこと

台本を早のみこみでよくとちる
アドリブの利いたセリフでうけがいい
冬日向いびつになつた雪達磨
無農薬色も形も不揃いで
無農薬形悪いが味は良い

出雲市 城 多喜

早逝の母に詫びたい事ばかり
手探りで暗さの中を這い上る
百ワットの笑顔が欲しい闇の中
絵手紙の中の花びら散りたがる
笑っちゃう鏡の中のにらめっこ

出雲市 小白金 房子

五人囃子 祝う雛壇春の歌
マネキンの装い素敵な春を着る
天満宮祈りを吊す絵馬の音
娘の便り春の息吹をつれてくる
青菜つむ手に早春の雪払う

出雲市 青山 久子

人間の海が恐いと言う魚
マグマ噴く地球に足をつけている
友の皺わたしの皺と同じほど
よく食べてよく寝て日々が温かい
重いドア押してくれたは茶髪の子

雲南市 毛利 幸

うれしさを袋に入れて持ち歩く
二度拝み三度拜んで気がひける
思い切り初日をぐっと胸に抱く
うれしくて歩幅ぐんぐん長くなる
おめでたい松は緑で勝負する

島根県 多々納 テル子

風雪を眺めて温い鍋囲む
今年こそ昔を整理する筆筭
抜け出して頭を冷やす喫茶店
神様もお疲れでしょう小正月
一軒家木刀じつと構えてる

島根県 榊原 秀子

三月に来るといふ娘の日を数え
松の雪払う亡夫がしたように
赤い実をみんな盗みにきた鶉
独居老人の会誘われる晴れた朝
湯豆腐が浮く間をじつと見てる箸

島根県 伊藤 寿美

風凧いでふと振り返るひとりぼち
年金の池に金魚を飼い馴らす
庭仕事の後の愉しみへッセ読む
新札を透かせば見える十三夜
妹からプンタンが来る春隣

島根県 持田 多輝子

各省のトップお辞儀がうまくなる
道草をした想い出の学校道
ざわざわとエゴがひしめく暮れの町
是非かを決めかねて出す委任状
絵手紙のブームに華やぐ老いの春

岡山市 井上 柳五郎

疎まれるわけは知らない不愛想
生きているだけで儲けとうそぶいて
わが生涯 名場面どこさまらない
何時までも老骨元氣邪魔かいな
ふるさとは活断層のと真ん中

倉敷市 小野 克枝

欲無限 番茶で足りる幸もあり
結び目をときにゆるめて回り道
日めくりを仏の父と共に繰る
もう一人の私を探す海へ来る
終点で笑う人生すべり台

倉敷市 井上 富子

形崩れしてもスーツの意地がある
愛児みるように痴夫を看る妻女
ポケットの中で怒っている拳
友達も出来た明るい電話口
ああそうと責任のない馬の耳

美作市 小林 妻子

マニフェストあぶくのように廢れるか

国会中継言葉ばかりを裏返す

鼻濁音毎月聴いて馴れました

選挙戦いつも家族が揺れてくる

長男という責任がつきまとう

岡山県 国 米 きくゑ

夢無限傘寿の女バラを抱く

母の膝無限の愛がこぼれでる

胎動の力母への気概増す

年金を杖にゆつくりゆつくりと

さからわず流れにそつてゆく余生

岡山県 大石 あすなろ

組板と四季のコントを練り上げる

少子化ですくなくなつたマタニティー

球根を土にもどして春を待つ

ブレイキをほど良くきかせ老いの坂

惚けぬため盛りだくさんのスケジュール

岡山県 山本 玉恵

幸せな孤独の中の涙壺

愛紡ぐ糸が素直になつて来ぬ

一か八かそつとひらいた玉手箱

想い出を一杯溜めて月に逢う

百点でない妻だからいとおしい

岡山県 福嶋 智恵子

カラフルな酉の絵手紙夢もらう

友が逝く身近にあつた医療ミス

叩いても撫でてでも右脳シヤンとせず

食卓の誰か待つてるシクラメン

旧暦の正月らしく郷の雪

竹原市 小島 蘭 幸

桜が咲いたら句碑囲んで飲まんかな

義理チョコのお札は妻に任せとく

酒になる水で珈琲が美味い

植樹祭森には青い鳥が棲む

まだ嫁かぬ長女とお雛さま飾る

竹原市 岩本 笑子

の字書く心まあるくなるように

そして夫婦夕餉の膳が広くなり

古里へ帰る国道2号線

五センチの雪へあわてた朝の靴

トランプに遊んでもらう日曜日

竹原市 森井 菁居

才能を鼻にかけると敵が増え

天に運任せてからのマイペース

難題の処理にワイフがいてくれる

足元に用心しろと書いてある

温厚な性で時々損をする

竹原市 時 広 一 路

歳よりも若い気持で朝を出る
一合でいいと疲れが言っている
人が人殺す地球の泣き所
古い地図昔の話しか知らぬ
良い日悪い日運さまざまな顔で来る

竹原市 正 畑 半 寛

三十六度火の玉酒に魅せられる
私を突き抜けていく連太鼓
露天風呂葉っぱも虫もいい気分
イザナギの神もキンキラキンがすき
ありがとう雨よ相合傘で行く

竹原市 石 原 淑 子

春風が頬つべにキッスして通る
はにかみ屋紅ほんのりと藪椿
はいはいと受けて流して夕暮れる
目から鱗 全身耳に聴く披露
捜しものかくれんぼして困らせる

広島県 藤 解 静 風

国民の目線で皇位継承論
風邪の診断しながら蒲団剥ぐ政治
言い訳の台詞を悔やむ自己嫌悪
うす味に慣れた頃には下り坂
樹を切ってまた木を植えておく絆

広島県 福 島 万 年

腰掛けて立読みできるよい本屋
千羽鶴 千人針にする勿れ
口ずさむもの軍歌より他になし
古里は幻ずつと憧れる
ぼっくりのお礼参りはできないよ

宇部市 平 田 実 男

極楽へ行ける人生つまらない
お望みの彩に染まったのはおとこ
地下足袋を履くと自然に腰が伸び
同僚の打率下ったのが嬉し
IQは高いが世間にはうとい

美祿市 安 平 次 弘 道

高齢化に少子化だとして死ねもせず
パズルならわたしの胸にありますわ
マフラーを外せば春が飛んで来た
闇に目がなれると闇も怖くなし
眼を開けて見れば春の陽すぐそこに

熊本市 永 田 俊 子

薄氷を踏む危うさの十七歳
嫌な世だサボテンのトゲ尖り出す
タクシーが寄ってくる私の足どり
ケセラセラ活断層の上に住み
梅凜と浮き世の塵をよせつけず

熊本県 岩切康子

気にばかりしていて頭働かず

これからは世話にならない身を保つ

寒参りセロファン巻いて花を差す

不言実行つづけて快感欲が出る

感覚の違いで語尾が高くなる

熊本県 高野宵草

お正月のツケに苦しむダイエツト

ねたむ憎む私の鬼に豆を撒く

順調な生活嫉んだ病魔来る

怠惰心ネジ巻く妻が居てくれた

お守りが多すぎたのか交通禍

唐津市 坂本峰朗

逝った友酔わせてくれぬコップ酒

自画像のほほにしみ出る羞恥心

まあいいかへそくりで妻若返る

百円じゃとても出来ぬと買い過ぎる

眉につば付けて組織の話聞く

唐津市 久保正剣

追い抜いていいです老妻とマイペース

ダイヤ婚蓼食う虫が庇い合う

何てこと暗証番号まで盗む

梅の下古い喜劇を捨てに行く

また億の税がふつ飛ぶ発射台

唐津市 山口高明

宰相は打ち出の小槌持つてはる

御笑納下されななんて札の束

犯人を捕らえて見れば聖職者

東京はひと旗あげの晴れ舞台

名声があがると増える御親戚

唐津市 宗水笑

振り込め詐欺性善説がうろたえる

少子化に農具は納屋で錆びている

よくもまあ続く保険のコマーシャル

印鑑に貫禄負けの低金利

かかり医を決めて安堵の日向ぼこ

唐津市 井上勝視

路郎師を仰ぐ唯ただ雲の上

語彙不足塔の踊り場さえ見えぬ

パン食に慣れぬ同居は孤独なり

多機能の電化は老いに不親切

身辺整理捨てることから始めます

唐津市 市丸晴翠

サクラサク家計簿祝金に泣く

偽造かなへそくり出して調べ合う

監視カメラ花盗人も裁かれる

副作用止める薬も買わされる

バブル期のつけ次世代へ玉手箱

唐津市 樋口輝夫

東かがわ市 原賢

大卒と聞いてあきれられる誤字脱字
理にかなう反論だから黙っとく
身のほどを知らずに跳んだ水溜り
割れ鍋もとじ蓋も錆び五十年
柔らかい話にあった落し穴

東かがわ市 池内かおり

寒あやめ咲いてる所がポチの墓
金婚のコツ忍耐でござります
よく動く五体に礼を言つて寝る
牛乳を嘔んで飲めとは無理なこと
ほなさいなら大阪弁があつたかい

東かがわ市 清川玲子

新刊を開くたびごと胸おどる
いい出会い固い蕾も開き出す
震災が思い出全部消していく
束にして思い出を焼く冬の章
声高のうがいに風邪もにげてゆく

東かがわ市 成重放任

スピーチの長さに腹の虫が鳴き
寒い朝布団が僕をはなさない
お買ひものメモを片手に旦那さま
生活の灯りがともる三宅島
逢うたびにまた来てよねと義母の言う

身の丈を悟り明日の夢を追う
理不尽がだんだん見えてくる本音
心まで売らぬと紫煙ふつと吐く
天職の土に捧げた母の皺
春の芽をしっかりと抱いている大地

東かがわ市 伊勢八重子

立ち話無駄でなかった処世術
子よりも夢中になって風上げる
今年から診察券がまた増える
手をつなぎ心の根雪溶けてゆき
腕相撲負けてよろこぶ父の顔

東かがわ市 川崎ひかり

理不尽を赦してしまふ血の絆
三文を取るか朝寝を楽しむか
無で生まれ無になりかえる土の中
大それた事を涼しい顔で言う
来るはずの電話がこない日の焦り

東かがわ市 神保坊太郎

信じなさい信じちゃ駄目と同じ口
ピカソの絵考えすぎぬ方がよい
ふらふらと九十の道へ迷い込む
子の鬼も居るだろう五色豆を撒く
通の舌に鼓うたせた腕の冴え

松山市 高橋 宏 臣

反古にして許すことあり季は巡る

へそくりのお札時々風を入れ

北風は饒舌冬を連れて来る

遠吠えて自負の尻尾を逆立てる

人前で律儀演じる二枚舌

松山市 丹 下 美津子

寒さに負けた結果てき面血糖値

若い血が競う箱根の山燃える

春そこに雲に濡れたふきのとう

ちぐはぐな服にネクタイ妻の留守

聞かぬも花言わぬも花の思いやり

松山市 古手川 光

振り込めとシナリオ変えて攻めてくる

結果責任無い神さまは聞き流し

路面電車スローライフの音がする

限りなく脱税に近い節税

少子化へ葬儀屋さんもサバイバル

松山市 宮 尾 み の り

アサリから金正日という匂い

道の駅中国産が偽装する

したたかなおばちゃんに会う道の駅

声高に言う正直を持て余す

風船は多彩イベント盛り上げる

大洲市 中 居 善 信

包帯をやさしく巻いていいナース

外面はいい人ですと言われている

長男が嫁を取らないのは誤算

側に居るだけで落ちつくいい女

伝説になってしまった千枚田

西予市 黒 田 茂 代

ふんわりといる春風のようなひと

自然発火しそうな胸を抱いている

若い気を春の鏡がたしなめる

花活けるしあわせ 想うひとがいて

母もまた遥かなひととなる月日

高知市 北 川 竹 萌

二分ずつ伸びる日脚に励まされ

九十路を堪え忍びつつ年重ね

庭蘇鉄 十八年目 雪の景

家回り大雪の景カメラ撮り

ガラス越し庭の紅梅祖父惚ぶ

高知市 小 川 て る み

被災地へあげたい土佐の青い空

南国の雪も解けずに丸三日

南海地震のネジが巻かれている不安

人当りよくて油断をしてしまう

ママシ酒飲んでちつとも変らない

高知県 赤川 菊野

戸を叩く風が粉雪つれてくる
勝算があつてゆつくり紅を引く
豊かさが大地の恩に気づかない
目標があるから今を耐えられる
抽出しでもずむずしてゐるパスポート

砂川市 大橋 政良

ハガキ絵にメダカ一匹はねている
無い尻尾掴まれそうで喋れない
意表突きすんなり策にのつてやる
物忘れ少しはみ出て来たようだ
この椅子を去る日男の夢終る

弘前市 福士 慕情

思い出を閉じ込めているラムネ玉
ベストセラー良書ばかりと限らない
正直に言えばいったで叱られる
湯上りのいっぱいビールが切れている
青空へ鼻唄が出る物干し場

弘前市 相馬 銀波

離せないマスクに今日も手を洗う
目標は時間をさいて木を植える
この先も笑う元気で虹を追う
明日からは古希 夢をまとめている日記
除排雪家族の汗という絆

弘前市 今 愁女

魔の大雪日々格闘の春二月
天気図にだるまばかりが続く日々
白雪が人のいのちも押し潰す
雪にすっぽり埋れた地蔵寒かろう
早う来い芽立ちの春がなつかしい

弘前市 櫻庭 順風

色あせた紙 日石人杜辞令
東京紙に見つけた旧友の訃報記事
どか雪にも雪掻きよくぞ稼ぎます
どか雪で歓喜しているツアー客
凸凹の雪を決死に漕ぐ歩道

弘前市 高橋 岳水

生と死のプランは神の手の中に
安らぎがほしくて花の種子を蒔く
遅々として進まぬ平和への歩み
全快に近い薬を苦く飲む
約束を果した夜の酔い心地

弘前市 岡本 花匠

卒業を祝つて祖母のさくら餅
梅干しジャム健康願う母の味
さくらエビ様変わりして膳に乗り
ものぐさの男を批評若葉萌え
ひこばえと出逢い人生見極める

弘前市 須郷井蛙

さいたま市 八田敏

伐採に泥水海を消してゆく
東京の家賃 地方の十倍も
写真判定激しく騒ぐ競馬場
小学校女の教師ばかりいる
合併で激しく揺れる市町村

黒石市 相馬一花

おだてても駄目よ魂胆見えている
刺のある女性にもろいのは紳士
姑より怖い花粉が飛散する
ブライドが邪魔ではけない網タイツ
ストレスと酒が織り成す依存症

十和田市 阿部進

飛び出せば走る車がかみつくぞ
どの子らもほめて育てるいい先生
金メダルかんで見せてる表彰台
居酒屋がちよつとお寄りという匂い
振ったこと忘れ振られたことおぼえ

青森県 小寺花峯

月暦蠅も飛び交う春うらら
古傷へ触ると腹も曇り出す
行間をはみ出る筆は直らない
貧乏神がいて笑い分かち合う
一筆啓上 亡父よ毎日呑んでます

シニアハウス我が家見おろし完成す
受験生よりもストレス溜める親
十年日記まさかが続く九年目
豪雪があわれ被災地埋めつくす
主居らぬ仏壇造花で間に合わせ

佐倉市 岡井やすお

新人は叱られ褒められ伸びてゆく
胸上げは良いが 一気はご用心
入学式諸子に洋々たる前途
初心胸に哲学の道独りゆく
日曜は家族円満花の下

東京都 岸野あやめ

潔い覚悟で咲いている桜
東京の水にも馴れた二度の冬
すつきりが違うママさん女将さん
平服でどうぞに欺されたらあかん
合図など要らぬ肝胆照らす仲

東京都 後藤早智

家族にも酷暑の付けがきて立春
物言えぬ目が訴える医療ミス
手に余る重みが消えた身体抱く
言い分は受身で聞いている加療
回復期やつと本音が洩れてくる

東京都 清原悦子

いち抜けてからの話がまとまらず
風向きがそろそろ変わる酒の酔い
終点で木の葉の切符差し上げる
真っ直ぐに生きても心削られる
人間に戻してくれた澄んだ空

武蔵野市 亀井円女

頑な花心は蝶をよせつけぬ
いいお方話し上手で聞き上手
妥協にヨイシヨは死んでも出来ぬ損な質
顔の皺笑い上戸のせいなのさ
枯れ木立 春を信じるいじらしさ

八王子市 播本充子

寝転んで見れば大差のない器量
コレクション長続した事がない
シャボン玉吹いてペットを踊らせる
スタッフが揃い足取り軽くなる
後ろから見られたくない胡蝶蘭

横浜市 菊地政勝

好奇心抱いて鮮度を失わず
余るほどあるから人に騙される
乱立のビルが下町情緒消し
繁栄に行きつく果ての都市砂漠
人生がバラ色だとは考えぬ

(小野句多留氏の句は58頁に掲載しています)

第16回時の川柳交歓川柳大会

日時 5月7日(土) 開会12時20分

会場 兵庫県民会館9Fホール

会費 2000円(記念品・発表誌呈)

昼食は各自(地下に食堂あり)

兼題 「青」岡田 俊介選

(各題2句) 「横顔」恒弘 衛山選

締切12時 「待つ」西口いわゑ選

欠席投句拝辞 「都会」坂根 寛哉選

席題なし 「樹(木)」赤井 花城選

「向く」中田たつお選

「雑詠」小松原爽介選

特別課題 「髭」井床 芦蘭選

講演 平山 繁夫

賞 知事賞・市長賞ほか

懇親宴 5000円(当日受付・先着60名)

◎当日 時の川柳作家賞ほか表彰式実施

主催 時の川柳社

後援 兵庫県・神戸市・神戸市教育委員会他

第6回井笠川柳会笠岡大会

(第16回薬大会)

とき 5月21日(土) 開場9時 締切11時

開会13時 閉会16時

ところ 笠岡市保健センター(ギャラクシーホール)

☎0865-62-5700

笠岡駅より④バス伏越下車 歩4分

題と選者 小松原爽介 共選

第一部 「自慢」 濱野 奇童 共選

(当日投句・2句投句) 小島 蘭幸

特別課題 当日発表 高木 勇三(1句)

第二部 「逆転」 泉 比呂史 共選

(事前投句・2句並記) 梶川雄次郎

西出 楓楽

お話し 小松原爽介(時の川柳社主幹)

会費 2000円(昼食・発表誌呈)

事前投句 用紙自由(4月30日必着)

住所・氏名・柳号(ふりがな)・TEL・所属

柳社明記 欠席投句 1000円

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡507-68

井笠川柳会 ☎0865-63-5858

賞品・賞状 多数(石碑贈呈2名)

句碑除幕式 5月21日(土)11時 古城山公園

主催 井笠川柳会 後援 岡山県他

川柳塔の

川柳讃歌

④

木津川

計

古川柳の名句に「母の名は親仁の腕にしなびて居」があります。最愛の女性に「○○命」と彫って誓った親父の青春があったのです。

わたくしのハートに指紋つけた人

山本 希久子

彼は希久子さんを独占したく、彼女のハートに指紋を刻印したのです。愛は惜しみなく奪い、奪った痕跡を残して彼は余人の介入を拒んだのです。拒まれても希久子さんはうれしかった筈です。

こぼさないで下さい愛をさし上げる

城 多喜

だからわたしは一杯の愛をあなたに注ぎます。全部受け入れて下さい。わたしは汲めども尽きぬ泉ですもの。

恋するふたりの幸せです。逢いたくて逢いたくて、約束をしたその日が待ち遠しく、やっと今日が来て、来る来ないのときめきと不安に揺れます。それが人間らしさなのです。

来る来ない待つ間の揺れが美しい

野口 節子

あつという間に到来したケータイ文化時代ですね。こんな時代になって私たちは「待つ」ことをしなくなりました。相手の動静が刻々分るとなりますと、すれ違いメロドラマはつくられようありません。「君待てども」や「赤坂の夜は更けて」といった、待ったり案じたり歌も廃絶されたのです。

節子さん、「待つ間の揺れ」もさりながら、不便を不便と思わなかつた時代の人間らしさも美しかったと思ひましよう。

おんなから女に戻るまでの修羅

小野 克枝

僕は女性を表わすときは「ひと」を用い、男性には「人」と区別して使います。ですが「おんな」と「女」の違いとなると難しいですね。女に戻るのですから女の一生は、女がおんなへの行き戻りなんです。察するに、愛憎のほむらを燃やした女人としての性から、性別記号としての女に昇華したのです。修羅から恬淡の境地へであります。それもまた苦難の「女の一生」、杉村春子の名せりふを思い出します。「誰が選んでくれたのでもない。自分で選んで歩き出した道ですもの」。

女の修羅は結局、男と女の修羅だったので、美しい出会いがあつても、麗わしい別れは少いのです。次はそんな情景でしようか。

金で済む話が金で揉めている

中島 志洋

難儀な事態に「通り」があります。金で済む話と金で済まない話です。前者の難儀はまだ解決が可能です。であつて金で揉める。金で済まない話なら一生の苦悩ですので、いざ払うとなると人間の強欲です。そんな欲を捨て去り、きっぱり、さっぱりと清貧に生きることはできないものでしょうか。

歳をとることに輝く樹になろう

正畑 半覚

夏目漱石は「董ほどな小さき人に生まれた」と詠んでいたのです。それほどに人間が小さければ、強欲も背信もとるに足りない些末なものでありましよう。かくの如く小さなものを願う人もおれば、半覚さんのように大きな樹を目指す人もいます。ですが、ただの大樹ではありません。明日は檜になろうとして希望を失わぬあすなるように半覚さんは「輝く樹」が目標なのです。豊かな教養人で謙虚な、そんな輝きの樹である筈です。

（立命館大学教授・「上方芸能」誌代表）

自選集

橋 高 薫 風

春の雲動かずまるで飛行船
落花には歎喜落胆相半ば
遊行上人吟遊詩人雲はるか
犬を飼いたくしきりになつかしい幼児
横綱は魔法を持っているらしい

石 川 侃 流 洞

山の温泉のもてなし地酒とポタン鍋
温いから握ってみてよ私の手
テスト百点財布の紐がゆるくなる
伝い歩き出来て油断のならぬ孫
やっと春元氣出て来た頬被り

板 尾 岳 人

哲学の道を歩いて人を恋う
あれ以来わたしを照らすお月様
駄々っ子のようにサクラは少し散る
逢いに行く道でサクラを揺すらねば
サクラ観て錦市場で亡母に会う

奥 田 み つ 子

裸木の見栄も銜いもない姿
友や良し春を誘っている受話器
ひとすじの道 転んでも転んでも
ハーモニカ遠く聞こえて兄の忌よ
プラス思考プラス志向と呪文かけ

河 井 庸 佑

平凡な明け暮れ感謝する余生
解決の糸口掴む逆思考
野に下る気付かぬものが見えてくる
背伸びなどするでなかつた愚を覚る
失敗を明日に活かす匙加減

川 島 諷 云 児

裏のうら底のそこまで知る他人
八十五年生きて得たもの捨てたもの
井の中が性に合ってる痩せ蛙
人間は過去を引摺り歩いてる
氣紛れな愛では咲かぬ胡蝶蘭

木 村 あ き ら

楮山の道に桜が真つ盛り
暫くは死ぬまいビール美味いから (90翁)
淋しくはないか月さん一人旅
弘法の遺跡に棲んでいる誇り (四国霊場)
四国路にサヌキウドンのある誇り

工藤吟笑

目覚めたが起きても用のない身体
充電はしたがエンジンかららない

逆境も時の流れにして耐える

老人会ガイドのマイクだけ頼り(94翁)

山裾の家がカスミの中に浮き

黒川紫香

春待つ日窓の明かりに救われる

病床で食べる希望を告げている

久し振り来た友達に歳を聞く

元氣だと勇氣をつける見舞客

一日を食べる楽しみ夢で見る

小西雄々

一徹に火を吹く山も暮れいそぐ

ほのぼのと雪溶け水に春の音

組み直す老後のプラン笑われる

しゃれこうべお前も一人さみしいか

指切りを神様見ても信じない

小林由多香

玉子酒わたしの風邪の妙薬だ

初対面 何かを探る目に出会う

十字架の屋根讚美歌が聞こえそう

笑ったら負けのにらめっこに弱い

二次会へ行くにはちよつと明るすぎ

斉藤 焔

文科大臣表彰以下同文の席にいる

ガリガリと鬻ったことのある辞書だ

父の顔にっこり描く子の絵筆

ストレスがしつとり抜けて行く足湯

搾乳の手から早春ほとばしる

田中正坊

ちりめんの町で出会った雪景色(丹後の旅 2句)

ふるびたる商家におもう少年期

五分咲きの梅林を見る人まばら

生きていく事が一番むずかしい

つぎつぎと手帳を埋める予定表

玉置 重人

補聴器はオフです風をやりすぎず

無欲な男だアキレス腱がない

表紙絵の百寿に元氣いただきぬ

無い袖も振らねばならぬ資本主義

雑踏が好き雑音が聞こえない

恒松 町紅

神社寺まだまだ出番ある八十路

宮奉仕すんだらやんだ牡丹雪

長生きをしてねと老いの知恵買われ

老い二人では食べきれぬクール便

跡を継ぐ話店主の愚痴が出る

遠山可住

暖房がもつたいのうて早う寝る
磨くのはお肌でなくて鍋ですよ
浪費とは言わぬが高級化粧品
しばらく見んおもたら検査入院中
散歩やと思たら徘徊してはった

土橋 螢

過去未来真ん中へんの春の色
お寺から地獄へつづく白い道
惜しまれて散ったさくらは花びらに
帰る道忘れた鶴が舞いおりる
片栗の芽生えは花が先に咲く

仁部 四郎

しなかつたはずの油断を検診日
検診日上司の方がよく憶え
とりあえず妻へ電話の検診日
日めくりで勝つて甲と検診日
大恩のドクター偲ぶ検診日

野村 太茂津

言い出せば一步も退かぬ祖父の背
孫の目が祖父の欠伸を不思議がる
約束は白寿で孫のお年玉
タイに棲む津波被災の友憶う
元特攻を怒らせるなよ北よ

波多野 五楽庵

一夜の雪の重さを表現しきれない
忘れたい人が住んでる雨の街
弔いのトランペットか四十雀
泣かないで別れて欲しい冬の指
神様のシナリオでした妻の鬱

芳地 狸村

お馴染みの顔がならんだえびすさん
えびす餅胸にとびこむお正月
福餅に気合が入るえびすさん
福餅をまいてえびすの顔なじみ
福餅に押すな押すなのえびすさん

宮口 笛生

よくのんで食べて正月肥えました
薄化粧の雪へうれしく登校す
大寒に負けず紅梅咲き始め
朝からもおいしく盗人酒してる
暖房の部屋から雪の庭眺め

森下 愛論

愛ひとつ美を重ねゆく赤い薔薇
幸せな愛を煮詰める赤い薔薇
触れ合いの絵皿ににじむ赤い薔薇
虚を刻む花野に咲いた赤い薔薇
想念を崩して咲くや赤い薔薇

八木千代
困っちゃうな花粉症からプロポーズ
眠らせた芋も輝きだす季節

坂道のこれから残照のページ
何回も転んで道と仲良くなる
檜山の坂でもマーチ奏でたい

八十田 洞庵

皆が寄り違った楽譜かなでてる
完璧を避け凡俗の中に居る

逢いたくて墨が濃くなるまだ白紙
木枯らしは男の美学凜として
長旅の疲れか背なが丸くなる

両川 洋々

これ月よ泣きに来た訳聞くでない
人さらい国が核まで持っている
還暦の脳が誤作動して困る
恋するとすぐに雪おんなが溶ける
まだ使う堪忍袋縫い直す

阿 萬 萬 的

僕の頑固支えてくれる妻がいる
本心をもらすと運が逃げていた
しょうもない夢ばかり追う歳となり
高望みするから梯子外される
ほけ防止だんねとまずい句をひねる

川柳塔

(つづき)

横浜市 小野 句多留

北方の領土の水溶けぬうつ
前立線肥大手術に春のうつ

欲しいものないといったら叱る医者

ホイホイと転がる癖のあるお金

抜け道でNHKが座礁する

原稿募集

— 思い出の歌(曲) —

六月号掲載の同人の原稿を募ります。

「歌は世につれ世は歌につれ」と言われるように、人生においても忘れられない歌や曲を持つておられることと思います。歌や曲にまつわる思い出を題材にしたエッセーのご応募をお待ちしています。

締切り 4月15日 本社事務所宛

本文 400字詰原稿用紙1枚半、2枚(600字、800字)タイトルは別につけて下さい。

ただし原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

水煙抄

奥田みつ子選

河内長野市 坂上淳司

少年の日の高鳴りに出会う古希

古希間近しゃぎる若気を捻じ伏せる

道草を仰山食べた自負がある

目を細め出藍祝う歳となる

芋蔓の時代を耐えた意地がある

飽食に亡母の水田ふと想う

羽曳野市 森下一知

路地住まい昔かたぎが肩を寄せ

子の声が消えて駄菓子屋畳まれる

有り余る素質に欲しい向こう意気

向こうむく父は背中です許してる

アルバムの亡母を囲んで掘り炬燵

無記名にすると本音がてんこ盛り

札幌市 三浦強一

暖炉の火ちよろちよる童話甦る

懐を知ってか雨の日曜日

娘さん下さいと言う玉の汗

娘の心盗んだ奴と酒を酌む

芸道は厳し親子でも他人

堂々の車中化粧にうろたえる

神戸市 両川無限

育児書にない発見をして楽し

人間の欲をくすぐるコマーシャル

気が付けば子は正面を向いてない

優しさは人の迷いを深くする

句読点打ったところから出る弱味

まぐれでも勝てば自信が湧いてくる

岐阜市 平野あずま

書に倦んで夢路さ迷う春炬燵

諺で巧みに論ず年の功

本当は仲良くしたい喧嘩独楽

答案は白紙の夢を今も見る

積ん読の一冊携げて日向はこ

三田市 堀 正和

お隣の庭から春がやってくる
めくるめく春抱いている雪柳
雨音が詩人にさせる春の午後
落第の夢まだみてる古希の春
と金への夢は捨てない古希の春

枚方市 二宮 紫風

合格へ手ごたえ確かな子の瞳
鬼払いして黙々とかぶり寿し
ねこ柳芽吹いて入園もう間近
春一番吹いておしゃれがしなくなり
青空に願いをこめて福を吸う

大阪府 神野 千恵子

節分に鬼はにんまり外へ逃げ
縁側の陽だまりにいて亡母想う
ちぎれ雲お伽の国へ引き込まれ
DNA人のコード化始まりぬ
携帯で芽ばえた恋に足がない

堺市 大久保 伸子

好いことがつづいて少し気味わるい
今日という日は一度だよ何をする
ホカ弁を渡して私ディナーショー
ときめきを思い出させる桃の花
目ざすもの持つ少年の目の光

日高市 根岸 方子

久方のネクタイ行方ついで尋ね
飛べない日写経で心塗り変える
後悔のポーズまたかと見過され
いいことも無いが夢ならたんとあり
誕生日好きな赤着て旅の人

八尾市 松葉 君江

八起きめの波が人生塗りかえる
人情がうすれ命が軽くなる
助かった命は街のボランティア
のんびりと笑ってすまます物忘れ
甘やかし恥の文化を消してゆく

長岡京市 山田 葉子

ふるさとの色は心に描いてある
飛べずとも羽はひろげてみることに
いちにつさん続かなかったダイエツト
祝い箸もとのふたりになりました
塩加減合わないうちに子は巣立ち

箕面市 寺井 柳童

新御堂はさんで箕面片時雨
さざんかの垣低くして幼稚園
百均に小さな幸せ老いの足
焼いもを頬張る老母に幼な顔
球場へ誘う小春日オープン戦

高知県 桑名 孝雄

受験子の居ない春です平和です
雄心勃勃々老いにも春がやって来た
ベンチウオーマー裏が覗きたいチャンス
しんがりを仰せつかった将の将
平均寿命そう簡単でないを知る

大洲市 花岡 順子

親と子で力加減を知っている
ふところが空っぽになる子の巢立ち
無器用な子が突然に親離れ
口下手の気持ち真っ直ぐ伝わらぬ
嘸みついただけで油が切れちゃった

神戸市 山田 婦美子

苦の中に楽を信じて荷を背負う
年齢に似合った顔で生きている
挫折感味わい生きる価値を知る
さりげなく吐いた言葉に縛られる
少々の嘘もまじっている絆

和歌山県 森下 順子

ハンサムな主治医をちよつと意識する
雑談で小さなうつつは飛んでゆく
言葉にもならない淡い恋心
過ぎてからチャンスだったと臍をかむ
淋しさがつのる一人で食べる鍋

今治市 塩路 よしみ

ひびき合う言葉に愛は満ちてくる
咲き誇る花にも悩みあつたらか
悲喜劇をよそに地球は自転する
静と動リズムの中の花吹雪
シナリオは弥陀の掌にある我が余生

藤井寺市 若松 雅枝

まだまだと卒寿が知恵を貸してくれ
乗り越えた日々語り合う春の風
偶の風邪いいな家族がいてくれる
裸婦像が恥ずかしそうな春の雪
それとなく軽いジョークで聞いてみる

大阪市 升成 好

酒二合あれば天下はすぐとれる
有頂天一人称で酔っている
酒飲みの愚痴にはグチでご返杯
迷い癖また切札を腐らせる
ライバルにたつた一歩が届かない

鳥取市 横田 春名

不機嫌が声のトーンに乗ってくる
諦めは玉虫色に塗っておく
ワntenポ待てばよいのに先走る
法話聞く姑の目差し温かい
野薊を今も好きかと彼は問う

奈良県 江波 正純

寒風に梅のつぼみが命研ぐ
夜静かテレビを先に寝かしつけ
体中ネジは緩んだまま動き
計算を知らぬ女で救われる
常識の縁を歩いてよくこける

和歌山市 柏原 夕胡

ギザギザのところが愛を見失う
揺れながら君への想い縫うている
寄り道が好きでふらふらしています
直線でない人生でよしとする
結論がまだ見えてこぬ迷い道

泉佐野市 稲葉 洋

今一度夢に夢みる夫婦舟
渡れない虹の懸け橋だった夢
原因を聞かないままで出た結果
意のままにならず舌打ちだけが冴え
理想論裏から見れば無理がある

八尾市 脇 俊子

来し方をカーナビのごと走りた
疑心暗鬼 人の心に来る津波
ひと言が急所を刺して縫うてくる
落のとう春一番に恋してる
この頃は阿吽の呼吸噛み合わぬ

日立市 加藤 権悟

原点にもどる肩書きみんな捨て
桜さくら日本の貌で咲くさくら
含羞の貌でつくしんぼの背伸び
初出社スーツ華やぐ春の駅
蒼天にひばりいよいよ点になる

草加市 飯土井 健翁

明治には根性という宝あり
言い訳をするから軽くあしらわれ
惜しまない汗を宝として余生
覇気だけが頼りとなった九十五
簡単な話の中にある温み

大阪市 三浦 千津子

拘泥りが解けた心に陽が伸びる
三寒四温 雪便りやら花だより
受け止める言葉へ発車のベルが鳴る
同居してまた新しく織るドラマ
善人を演じ愁いを抱いている

和歌山市 喜田 准一

事務的な口調で徐々に距離を置き
反論の資料揃えて待つゆとり
冷飯も食うて人間幅が出来
風向きが変わり覗かす裏の顔
控え目に見えるが弱さかも知れぬ

北九州市 岡田幸生

手の届く所に喜寿の杯がある
身の程を知れと財布に諭される
鶴と鶴匠そんな夫婦で仲がよい
終の日の話もときにして夫婦
封じ手にして胸底にあるないしよ

高知県 百田幸

知らぬ間に息子が継いでいる父の癖
一病とうまく付き合い傘寿すぎ
仮面脱ぎ対話が出来る夫がいる
良心も邪心も共に住んでいる
捨てきれぬ欲生さ甲斐にする女

高知県 近森功

あしたへの命につなぐ酒二合
残り火を火種に綴る五七五
炬燵番テレビ番して日が落ちる
誕生の孫は素足で立ち上がり
寒椿化粧なおしの雪を着る

今治市 渡邊伊津志

教会の鐘聞く人の音で鳴る
合併をされた市政の端に住み (H17・18合併)
この辺は市政が届く花を植え
市政よし旗日にみんな旗を出し
催しも多彩市政にある余裕

今治市 野村清美

竹とんぼ飛んでわかった里の風
膝元のふだを取られたかるた取り
惚け防止オセロで絞る知恵袋
お手玉を孫と競うて勝名乗り
折り鶴へ息ふき込めば飛ぶ構え

広島県 馬場利子

陽気にふる舞う古里の山や川
夕焼ける明日のヒント置いてゆく
香を焚く母の笑顔が見えて来る
掻きすてたつもり恥がついて来る
くるくると生きた轍の木の根っこ

倉敷市 撰喜子

男子校マドンナ寮のおばあちゃん
音立てて戸を開ける子の不満知る
正月の朝も鴉の賑やかさ
城を背に写る夫が殿に見え
冬耕に這い出す蛙埋めもどす

岡山県 矢谷富士野

卒業の花束チョッピリ恋もそえ
閻魔様亡夫元気でおりますか
急ぐまい亡夫に虫がついたとて
脱皮したままのズボンがぬいである
八人がただでしゃぶった皺の乳

出雲市 荒木英子

足入れて猫が飛び出す置き炬燵
紅梅は凍てつく風に春を待つ
落書を消す人もなくなまこ堀
いろいろと恥をかきつつ七十路坂
ひな祭りばんぼりつけて娘を偲び

鳥取市 山岡紀子

朝のコーヒー魔法のように気合入れ
時間給七百円の皿洗う
自分だけ汗をかいてるお節介
集落をやさしく回る福祉バス
ストレスが通り過ぎてる生き上手

米子市 猪森スミエ

大皿小皿小突きあつてる大家族
ほのぼのとさせる話を手土産に
皇室のいいお話に明けた春
お茶すすりぎくしゃく解けた喉ほとけ
螺子を巻く時計この家と同年

鳥取県 平木公子

降り込んだ雪に読書の時もらい
お荷物の雪も降らねば水不足
身辺を整理するには欲がある
八合目歩幅あわせて夫婦坂
路のとう苦味に命覚まされる

鳥取県 毎田信雄

判官鼻眞今も昔も変らない
立派とは言えないまでも人並に
SOSしきりに出している地球
棚上げをするにも上げる棚がない
誕生日また巡りきた九十回

和歌山市 根田よしこ

みな無口井戸の蛇口も凍る朝
読み書きや算盤手抜くゆとりとは
背広着た野球選手に惚れなおす
子ずめがフルート聴きに來てくれる
鬼は外アンパンマンが豆をまく

和歌山市 寒川武

刺のある言葉が脳を離れない
大吉の出た日は少し期待する
早起きをするため犬を飼っている
肩の凝りほぐしてくれた無駄話
スベアのない妻は大事にしています

奈良市 乾春雄

衝動買いの母が子に言う無駄遣い
終章は見えぬお陰で生きられる
夕暮れて村は墨絵の中に寝る
ひとり旅より侘びし禁煙車
気まぐれな舌が会議をかき回す

奈良市 矢野良一

金釘の文字懐かしい友の文
孫同居論吉羽根生え飛んでゆく
銀恋を歌えばもどる青春期
フルムーン思い出辿る船の旅
はりつめた五体ほぐしに露天風呂

橿原市 藤永実千代

名案が出ると分かれれば待つている
主婦業の無い一日を持って余す
覚悟決めいざ組板の鯉になる
病床の妻は夫の食案じ
病室は美容にグルメ旅話

神戸市 木村忠義

いつまでも心美人は若く見え
大切にしまった物が見つからぬ
控えめにしゃべる失言せぬように
イエスノーはつきり言つて嫌われる
ゲートボールに視線を向けてそば通る

神戸市 田中章子

太陽のもとで喧嘩のやり直し
上見れば初めの一步踏み出せぬ
たかねばの話は横に置いておく
揚げ雲雀初音聞いた日書いておく
音をあげる前にも一度トライする

相生市 村木信子

あいまいな返事と微温湯に浸る
失った時を惜しむかてのひらよ
浮き雲と孤独分けあう日向ぼこ
佗助の一期一会へ点てるお茶
へつついは亡姑の居場所よ火吹き竹

伊丹市 延寿庵野鶴

山門を出ると渦巻く欲の風
托僧の念仏響く京の路地
藍染めの藍が織りなす息遣い
命とややっぱり生きる息遣い
白いページ淡い夢かく呱呱の声

三田市 石原歳子

溢れてるたまごは昔貴重品
相槌を打つてのどかな昼下がり
風邪気味のからだに沁みるたまご酒
柔らかな草芽に春の息吹みる
家事をする幸かみしめる病み上がり

三田市 辻開子

六十路なり苦しみ捨てて前を向き
記念の日微笑みくれる孫を待ち
ピカピカの一年生がくぐる門
友と行く方向音痴の旅も好き
バレンタイン高級チョコは妻の口

大阪市 伏見 雅明

いつからか沸騰点が低くなり
銀やんま捕った感激子は知らず
盛り上がる氣勢を挫く終電車
空き腹に石焼芋の笛の音
心中に小さな鬼を飼いならす

大阪市 尾崎 黄紅

初夢に亡き戦友と酌み交わす
字余りに字足らず作句五十年
五十余年の表札よありがとう
好きを嫌いと拗ねている拗ねている
本当を嘘に上手な亡母でした

大阪市 吉田 富美

盆栽の凜と咲く梅品があり
甘酒の旗はためいて梅三分
もうそこへ来てる憲法曲り角
やぶ椿落ちても色香失わず
下萌ゆる野仏の貌あたたかい

大阪市 中井 萌

母が逝き実家の敷居高くなり
子を諭す口調そのまま親ゆずり
たまにある夫が偉く見える日が
きつちりと春には春の花が咲く
たまに来て孝行シール貼っていく

泉佐野市 備後 三代子

聞いてない言ってもいない好きの字は
義理チョコを指折り数え買うわたし
遠会釈曖昧なまま返しおく
悲しい日なのに夜食の箸動く
かみ合わぬ会話ながらもひと日暮れ

柏原市 伴 洋子

言葉飾る出来もせぬこと言っている
雑念を払えば見えてくる明日
男女のけじめ外せばオンナ闊歩する
一病を持って優しさ脆さ知る
遠来の客へ封切る取って置き

河内長野市 木太久 正一

教会の人の輪に入り半世紀
百歳へ夢がふくらむ誕生日
補い合い二人三脚いい夫婦
難聴の妻は無心にキルト縫う
大作のキルトに挑む妻一途

岸和田市 堤 檀代

ねばならぬ捨てれば楽になってきた
身内にはつらい介護の認知症
いい湯だな あとは美味しい膳が待つ
サッカードときめきもらいありがとう
がんばらなあかんと自分に言いきかし

岸和田市 森元 ふみよ

お見合いで母さんはしゃぎ父慄然
侘びしさの芽をもぎ取って旅に出る
枯木にも新芽育てる強さ見る
たゆみなく心眼磨く寒修行
自由の身束縛されぬ尊厳死

岸和田市 坂口 英雄

愚痴と愚痴言い合っている日向ぼこ
列島の南は桜 北吹雪
福は内 杉の花粉は鬼は外
待つていた電話家じゅう春にする
悪い本読むとだんだん目がさえる

堺市 羽田野 洋介

福来いと努力もせずに神頼み
進んでると孫にほめられ緩む頬
着飾っても隠しきれない言葉尻
見え透いたついそこまでの言い逃れ
気まぐれな風に尋ねる迷い道

堺市 河盛 龍三

初めての手術決意の朝清し
病院の暇をまぎらす窓の鳥
病院で退屈好むコツ習い
諦めて病院の暇楽しもう
手術して聞で感じる眼の重さ

吹田市 二宮 栄子

厄年の嫁御に神のはしごする
雨の日の心を癒す児の電話
ポランティア違った自分見えて来る
歳重ねだんだん派手が着たくなる
再検査言われたとたん遺書のこと

高槻市 佐甲 昭二

母さんの機転でつなぐ家族の輪
気まぐれに道草食って拾う運
子の嘘を見抜いた母の悲しい目
青信号渡つてからの遠い道
亡父の喝 今も宝にして生きる

豊中市 源田 啓生

越後にはなお鞭のごと深い雪
兄と酌む酒に亡父母いつも来る
老眼にどの娘も眩しい顔ばかり
寒風にバレンタインのチョコがある
句誌届く裏表紙から開く癖

富田林市 古田 千華

奈良町に響く音あり声がある
ほんわかと生きて今年も段階り
手と足が少し大き目夢二の絵
男女共仁義ない世となり候
それぞれの栄枯盛衰知る枯木

寝屋川市 岡本 勲

相合傘斜めにさして濡れている
逃げぬようちゃんと携帯持たされる
ジャンボくじ当らなくても夢を買う
生かされて夢膨ます古希の春
さわやかな風をもらいにふる里へ

羽曳野市 永田 章 司

ふと洩らす本音がこもるひとり言
震災忌祈りのこもる灯がともる
早いより安いが良いの定年後
客布団干して淋しさしのび寄る
暦には自然と生きた人の知恵

羽曳野市 福田 悦 子

年一度嘘八百のエイプリル
遠い日の自分にもどるランドセル
もう一度食べたい亡母のにぎり飯
どの道を歩いて見ても花に酔い
春はここ大阪城と通り抜け

羽曳野市 吉 村 久仁雄

爪切ってあしたの気合入れ直す
胸の火に油をそそぐコップ酒
実力が運にいじわるばかりされ
禁酒する未練がちよこで番茶飲む
鬼の目が涙にくれる花粉症

藤井寺市 鈴木 いさお

妻の欠伸に誘われました春の午後
何かある優し過ぎるぞ今朝の妻
妻もまた河内のおんな茶粥炊く
妻だけは解るはずだという過信
同居したい息子と別居したい嫁

八尾市 西川 義 明

妻病んで家事の重みを知るこの手
回復の兆しお酒が欲しくなる
感謝することしか出来ぬ恩返し
春風が笑い袋を置いてゆく
義理人情だけは大きなポケットに

八尾市 田 邊 浩 三

ライバルに送った塩が命取り
オイだけで通じる歳になりました
ランドセル飾りは鈴と守り札
髪型に気付かぬ亭主お酌なし
のんびりと秘湯に浸かり古希祝う

京都市 清 水 英 旺

二セ札の論吉の顔は済まなそう
論吉翁は透かしの影を連れている
重装備のスキ間にもぐるスギ花粉
義理チョコすら縁切れた日の所在なさ
TVに三日あけずの旬の人

佐渡市 高野 不二

記事になる億は驚くほどでなし
年金の元は取つて古希祝
体重計今日は省略するデイナー
物知りにされ広辞苑はなさない
新住所村が市内になつただけ

横浜市 川島 良子

真つ白な唇を染めてボクの春
油断したひと言運命を変え
美辞麗句作り笑いがよく似合う
忍と忍切れると怖い夫婦仲
仏頂面に効く効く孫という薬

横浜市 巖田 かず枝

旅楽し丈夫な足と胃があれば
熱さまし恋の病に処方する
流行に遅れないよう風邪を引く
赤い糸息子に代わり手繰りたい
仲が良いならば喧嘩はせぬものを

横浜市 金森 徳三

毎日が日曜だけど日曜日
休肝日忘れたふりに妻も乗る
歳一つ分だけ寒さ身にこたえ
白い眼に追われさまよう煙の輪
孫育ち会話がずれて茶が苦い

横浜市 長島 亜希子

中絶の投句再開初春に期す
新札も見慣れありがたみが薄れ
食欲が戻りいつもの妻になる
ラストワン食べたいけれど手を出せず
鬼はいぬ福は内だけ繰り返す

東京都 小川 賀世子

煩惱をはずめ羊を数えてる
検診日大事にするね眼に詫びる
時刻表と地図で桜を追つかける
女五人午後の茶店を梯子する
久し振り近況聞いてまた聞かず

東京都 井上 つよし

生かされて生きると悟る麻酔明け
雪道に片手袋が泣いている
義理チョコを心待ちする十四日
百薬の長が凶器にする車
稽古事亀の歩みに道遠し

昭島市 野口 忠

被災地に神の化身かポランティア
成長は目に見え老いは身に感ず
親憶うほどには行かぬ墓参り
夫婦仲よいほど友の顔薄れ
妻はまた自惚れ鏡そつと見る

八尾市 平川 幸枝

人情で話せば伏せる目が温い
淹れた茶に独りじめした冬の朝
年賀状美しい時間をもらう
しみじみとひと日ひと日を新暦

倉吉市 前田 喜美子

ごはんだよ声で呼び合う幸もある
受験生孫もはち巻きしめ直す
風の子がマフラー巻いてマスクする
おめでとう表裏一体長寿国

堺市 藤井 一二三

枝に葉に安らぐ春を見つけたり
春まぢか伸びる日脚を見逃さず
無事に山越えたよろこび夜が白む
山越えて旅人となる国訛り

藤井寺市 俣野 登志子

八割がた聞き手に回る長電話
苛立つてる私を笑う影法師
買言葉全部呑んだら胃が痛い
髪染めた誰か誘って下さいな

京都市 三宅 満子

雪ダルマ作る人ない豪雪地
青春切符に合わせて春が動き出す
湯タンポを占領してる猫と寝る
大根煮る湯気で退散風邪の神

高槻市 大崎 侑子

不足なく見えてた人の愚痴を聞く
傍目には不足に見えて満ち足りる
手弁当開いて大工少し照れ
貧しさは物より愛の不足故

和歌山市 土屋 起世子

うす味になれた二人にゆず香る
子の受験ポストを拝む癖がつき
よく合った歩調二人で山登る
母の背を曲がったとおり撫でて

島根県 武島 ちよえ

生きているお陰で四季と巡り会う
考えがまとまりかねる春霞
記憶力昨日の事が出て来ない
押し返す力あの頃あったのに

尼崎市 河津 正治

節くれた指に新札馴染めない
口下手だが人間味には長けている
鎮魂の灯りに咽ぶ震度七
余生とて翔びたい夢の喜寿の春

滋賀県 萩原 藻根

手作りの甘酒 老母と丸い午後
人の世の上澄み液が消えてゆく
神いずこ平成の鬼住み易し
辿り着く頂上にある落とし穴

新刊へ心おどらせ繰るページ

主義主張バイタリティーのある古木

駄々こねる介護やさしい片えくぼ

ノックした扉チャンスの波に乗り

鯖読んだ歳でいただく豆の数

二回目は肩の力をちよつと抜き

足して2で割ればと思ふ子の育ち

老い支度せよと試練の松葉杖

風の窓土星の声に耳清ませ

配合はひみつ私の愛の色

方舟の準備をせよと神の声

挨拶も泣く泣くして花粉症

成り行きで座って知った深い椅子

待ち伏せも使った恋の少年期

足元に用心し過ぎ頭打つ

天才と言われ育てて普通の子

人情劇身につまされてついほろり

こっそりと出かけこっそり知らん顔

内緒話こっそり聞いてにんまりと

長雨に雨読そろそろ飽きてきた

犬山市 吉田 幸子

犬山市 金子 美千代

愛知県 河合 ますみ

八尾市 寺川 はじむ

倉吉市 酒井 芙美子

枯山水花を咲かせた銀世界

冬晴れのきれいな空気吸いに行く

ふるさとの友のパワーに助けられ

読み返す友の便りの温かさ

猛犬の小屋まで付けて売る住まい

へそくりが今か今かと待つ出番

えっさっさ何はなくてもえっさっさ

招き猫借金取りを招き入れ

妻を脱ぎ親を脱ぎ捨てクラス会

頑張れと言わず背を押すポンと押す

お供えは私の好きなチョコケーキ

大好きへ犬の切手で便りくる

人間に吠える地球のサスペンス

被災者のなんて悲しいうつろな目

いささかの募金すませる気休めに

ほっこりと心機一転させ孕寿

シソーの支点を欲が変えている

真夜中の雨真夜中の音で降る

まだ選っています命の色見本

廃屋の冬にも茂る冬の草

松江市 山根 邦代

河内長野市 大西 文次

藤井寺市 増井 ヨシ枝

和歌山県 木村 徑子

和歌山県 辻内 次根

シドニー 坂 上のり子

少子化へ自給自足の国造り
歳歳と言わず淡淡生きている
おにぎりや日本のこころかも知れぬ
米洗いかすかな米の寝息聴く

シドニー 三 谷 たん吉

真摯とは偽善議員の合言葉
月からは地獄と見るかこの地球
コンピューター性能あがり偽造増え
コンピューターこなせぬは先ず白だ

メルボルン 藤 原 ポン吉

ホリエモン富士の高嶺に手が届く
節分で厄を払えば安あがり
妻が撒く豆がものいう夫婦愛
精巧な偽札どこか妻みたい

唐津市 岩 崎 實

新しき風は峠を越えて吹く
掛軸を取替え心機一転し
無理するな無理をするなど支え合い
行先を決めかねている老夫婦

東かがわ市 向 山 治 延

ランドセル背負うて曾孫春を待つ
旧友と話はずむ縄のれん
米寿来て二人で歩む老いの坂
四国路は鈴の音高く春遍路

宇部市 高 山 清 子

撒き餌かも知れぬ粗品を配られる
大噴火私もしたい時がある
カラオケで意気合い老いの恋芽生え
まだ生きたい腹八分目とうす味で

府中市 藤 岡 ヒデコ

うっとり時を忘れて見る踊り
スピードが落ちて雑用山と積み
玄関を開けない日でも腹は減る
感覚の相違か味気ないテレビ

府中市 岩 本 雅 代

蠟梅の匂いが招く春陽受け
水温み背伸びして見る昼の月
春よ来い乾杯したくなる仲間
老いの胸躍らせて見たJリーグ

松江市 松 浦 登 志 子

居眠りはいつもおんなじページにて
好奇心冒険心を持ったイヴ
吹き替えのないドラマから受信する
美しい言葉に飢えて猿の顔

出雲市 川 島 和 歌 子

豆撒いて八十路を祝う春の雪
拜まれてお義理で買ったネックレス
義理をたて花輪を贈る開店日
物忘れ呆ける歳には早すぎる

出雲市 加藤 スズコ

節目を目指し気骨支える老いの杖
福の豆 八十四の年女

必要と言われて弾む鼻めがね
呆けてはならぬ亡夫に再会する日まで

雲南市 菅 田 かつ子

山や川越えてゆとりのある笑顔

ミニを着た写真わたしも若かった

こんなときやはり夫の知恵頼る

雪道も趣味の会なら何のその

安来市 原 煩惱児

朝霧が晴れる緞帳あく如く

米をみる勘は達者な大きな掌

故郷は過疎夕焼けが美しい

チャイルドシートでオーライなどと助手気分

島根県 福 間 博 利

やき鳥に誘われました罪な足

もうちよつとこの醍醐味よ朝の床

さがしもの一度さがしたとこにあり

考えてみれば一日何もせず

鳥取市 山 口 千代子

合掌をすれば心の垢が消え

いい湯だな仏のように浮いた顔

寒椿 健気に雪の中で紅

身も縮む被災の空を雪が舞う

鳥取市 鈴木 一 弘

笹舟は流れと風に逆らわず
元気ならそれでいいんだ遠い人

失敗もみやげ話になる帰国
貧乏神寒い財布が春を待つ

鳥取市 岡 田 信 恵

元旦を祝う笑顔が和を広げ

凜としたいまの思いを大切に

今年こそ歩幅を広げ歩みたい

子に甘い親が子の道まよわせる

鳥取市 谷 岡 清 子

シナリオの想いばかりで喜寿の坂

建前と本音が迷うほほかむり

幸せの明日を信じる今日の修羅

耳遠き夫と生きてく術さがす

鳥取市 河 田 のり代

肩もみのバイトで孫の福笑い

孫見れば足腰急に痛みだす

胸に住むあの面影は初恋か

肩に掛け若く見せたい服選ぶ

鳥取市 近 藤 秋 星

暦の上だけでもうれし立春は

寄り道をせず真つ直ぐに来てよ春

何歳になってもほのか初恋は

寒がりへ鬼より怖い寒波来る

皇室と平民結ぶ赤い糸

めだかいる環境だから鳥が来る
肩先が触れただけでも縁になる
またしてはる道路工事の年度末

境港市 遠藤 那珂子

一葉さん すかし覗いていいですか

自分史を体にきざむそれがシワ

この川の水は昨日と違う水
人間が恐いと知った人科俺

境港市 中井 虎尾

スーパードメモ持つ男目立ちます

新しい噂に嘘が見えかくれ

七十五まだ二本足真つ直ぐで
一言が無言劇生む老いの意地

米子市 小塩 智加恵

コーヒーが私の心andraける

大声で笑って腹がすいてくる

身内には笑って事がすまされる
鶯の声がきこえる外仕事

鳥取県 山岡 久枝

脅しには負けぬ根性親ゆずり

くよくよと悩まず人の知恵借りる
木の声が聞こえ斧振る手が鈍る

米の字に農家の苦勞子を論ず

鳥取県 岡村 孝明

今年こそメールパソコン挑みたい

長電話なべの底まで保障せぬ
ほのほのと暮すバランスとっている
につこりと笑う孫へは夢がある

鳥取県 橋谷 静江

ココアから朝のエンジンかかります

過ちの消せぬ想いを胸にだく

喉ばかり乾くコタツの物思い
年収もサラリと話す申告書

和歌山県 坂部 かずみ

合戦の血へ桜咲く根来寺

愛憎の果てで乾いた喉仏

母さんに言われたことだから守る
手荷物検査悪いことでもしましたか

和歌山県 山田 侃太

居酒屋の隅に独りの席がある

宿題をやる気アニメにしてやられ

いい笑顔している妻がいて平和
寄る歳にあちこち故障できてくる

和歌山県 村中 悦男

露地野菜調べてみれば輸入物

腹六分薬飲まずに医者いらす
子供たち遊ぶ道具もIT化

古道ではふと出会いそう弥生人

生駒市 小西 稔

椿植え色無き庭の様変える

身の程を知って相応風を読む

騙された振りをするのも思いやり

お世辞でもやっぱ嬉し褒め言葉

尼崎市 小池 幸子

尼崎市 古川 正子

寒波来て暖かそうにマフラー巻く

軽いねと受けた言葉に縛られる

銀杏の木新芽ふくらみ雪が降る

シクラメンガラス容器で春を呼ぶ

篠山市 谷田 多美子

風花が亡夫の声でオイと呼ぶ

リフォームにおまけの余生たしかめる

キッチンに遊ばれているオール電化

五臓六腑今日も感謝で生かされる

三田市 阪本 藤朗

ITは悪巧みにも腕を貸し

六年間無事終えましたランドセル

鈍行の窓は春の絵見せながら

宝石店声掛けられて回れ右

宝塚市 丸山 孔一

同窓会ひそかな恋を打ち明ける

無愛想な娘も母のレシピ読む

耳遠くなって相槌好い加減

無人駅風も無料で通り抜け

過疎の里軽トラ神輿が野辺を行く

目線追いこれなど如何売り上手

糠床を二回混ぜると妻は旅

川柳がわが家の秘密徐々に剥ぎ

三田市 福田 好文

西宮市 片山 忠

何時からか笑わぬ妻にする重石

壺だけは押えて亭主泳がせる

貧乏と病気は親の敵です

度を越した苦勞したから忘れたたい

西脇市 七反田 順子

宿根の花が身近に寄ってくる

主婦の座を降りて行きたい時もあり

過疎の村火の見槽がでんとして

誕生日雪の降る日と教えられ

兵庫県 黒崎 美紗子

節分の鬼笑ってる園児の絵

拉致核と煮ても焼いても食えぬ国

ひやかしのつもりすんなりまけてくれ

久しぶり心開いて話す友

兵庫県 安達 厚

雪だるま子等が作れば母に似る

週三日医者通いして生きてます

医者はしご看護師さんを比べてる

美人講師話半分しか聞かず

兵庫県 丸山 一之

ユーマアのあるお多福につかまつた

長電話用件忘れ叱られた

ほのぼのと足湯で弾む国訛り

お若いとうれしい嘘で顔とむ

兵庫県 岩本 美緒子

くじ運は弱いかわたし運は良い

春は名のみカイロマスクを買い入れる

防犯の備え外灯つけたまま

幾春秋つづく画帖と春を恋う

兵庫県 永井 かほる

野菜皆強い日ざしと叫んでる

片杖とたよる妹先に黄泉

亡妹の思い出ひたる一周忌

美しい墓地公園に安堵感

大阪府 吉内 タカ子

寒風に負けずろう梅凜と咲く

失敗も話し合えます傘の中

四季に合う暮らしが出来る幸おもう

春ですよ旅のチラシが多くなり

大阪府 中村 れんげ

徒長枝に可愛いつぼみ二つ三つ

ありし日に庭のリフォーム亡夫と揉め

餓鬼大将叱ったあの子今校長

あの謎はタンスに入れてしまつとこ

大阪府 池上 清治

合格の孫伴ってかに食べに

税金を平気で食べる大阪府

捨てられぬ小学校のべんと箱

孫も来て元旦だけの大家族

大阪府 吉川 弘泰

二匹目の泥鰌を追うも夢はずれ

皺の手を握り合つての見舞客

もうかるか いやもうからんと愚痴を言い

予防薬飲んででもくしゃみ花粉症

大阪府 平井 露芳

七輪買い練炭買うてどうする気

細々と生きているのに肥えて来る

燃やすにも気遣いをするどんど焼き

耐震で建てないかんわ墓でさえ

大阪府 寺井 弘子

負け犬を口惜しがらせる玉の輿

振り込めに乗らぬ気概の電話番

茶柱が立つて離婚の決意する

二世帯の暮し拒否する妻と嫁

池田市 多田 契子

声のない介護施設の白いビル

信心で笑いの日々をくれますか

力ではテロ無くならぬ神の手に

えべつさん耳が年々遠くなり

泉大津市 助川和美

姑に聞こえるように鬼は外
増税の津波が来ても逃げられず
忙しい口癖の妻長電話
どんぶらこ桃ではなくてお金です

門真市 矢阪英雄

定年を迎えた成果妻の腕
花東が大きく咲いて古稀うれし
そばのように細く長く鴨の鍋
定年の人をはげましあては酒

河内長野市 内海綾乃

柿の実を少し残して雀の餌
ごみ出しは父の役目と決めてます
参観日化粧こいめのお母さん
三宅島我が家に帰りお目出とう

岸和田市 中岡香代

九条の方針を曲げ横車
不況風価格破壊の風が吹き
へそくりを父に内緒でくれる母
口下手が酒の力で雄弁家

岸和田市 林力子

まん丸い地球を壊す核の傘
所により雨と責任転嫁する
癌告知苦しみ抜いて妻の嘘
錆ついた右脳を磨く辞書を繰る

堺市 奥時雄

入社する前は社長も慈父に見え
絨毯につんのめりそう社長室
昇進の辞令で社長好きになり
若社長話を終わるまで聞かず

堺市 荻野像山

長い髭わざわが残す髭剃り機
ベルト穴足らなくなつた三が日
マイベースあては何でも良いお酒
週刊誌思わせぶりの袋とじ

高槻市 富田美義

お宝の九条ルビを変える気か
職決まり子別れ春の応援歌
出世した方からあいさつ新年度
欠席のハガキの理由うらが読め

高槻市 佐藤茂

とつとつと気骨のにじむ語りぐち
煽られて小心者が啖呵きる
少子化で国の宝が激減す
花粉症より涙出る母の文

高槻市 安田忠子

目覚めれば毎日違う痛い場所
全身に陽射しを受けて美妻子読む
楽しみをどんどん増やし友増える
酔い心地誰も知らない迷い道

寝屋川市 中川 恵香

忙しい時こそそっと夢をみる
山はるか遠くへ行つてみたい春
風花が哀しい北の便りとは
姉の孫抱いて子の無い苦楽知る

東大阪市 米田 水昇

やせたいと言つてはお菓子食べたはる
まわり道したけど着いて今平和
偽札でも笑うたはるのえべっさん
鬼は外やさしい鬼は行かないで

東大阪市 今岡 貞人

原点に戻れば明日の彩がある
幸せは汗に誇りを持てるとき
旅立ちを暦で決める老い二人
何事もなくて御飯のいい匂い

枚方市 小川 良吉

監督は鬼と言われて評価され
鬼軍曹戦後還暦なつかしむ
厄を気にチャンス見のがし悔いのこす
魁皇はチャンスに女神ほほ笑まず

藤井寺市 吉田 喜代子

北風に亡母の柏汁思い出し
明日葉が迎えてくれた三宅島
福は内心の鬼と豆を撒く
春風に口もだんだん軽くなる

藤井寺市 伊藤 アヤ子

お帰りとお茶一杯で温まり
陽なたではつくしが出たという便り
雪まつりかまくらで呑む雪見酒
節分の母さん鬼は良く笑う

藤井寺市 西村 栄一

木枯しに今夜は鍋にしましようか
強風は苦手三十五キロです
古すぎる頭と茶髪もめている
なんでもええ噂されてるうちが花

八尾市 田中 トシエ

白梅を見ながらネコと日向ぼこ
捨てる神拾う神あり再利用
正直が取り柄で青い鳥逃し
大風呂敷広げるたびに目立つ穴

八尾市 中島 春江

冬さなか蠟梅の香に立ちどまり
駄作でも自分をうたう一行詩
集団登校道草したいランドセル
老人会子供は知らぬわらべ唄

八尾市 赤木 妙子

欲しいのは出しても減らぬ知恵袋
クマさんも眠れたらしい年の暮れ
目が合えば言葉はいらぬ羊雲
合図して内なるマゲマ封じ込め

八尾市 笹倉 ひろし

景気付けに知恵を絞って福袋
残り福えびすにせがむ赤い糸
人生の余命をかけて初みくじ
闇夜から突然届く請求書

大阪府 若月 祐作

この願ひ届かないのか風の音
つくり笑顔聞いている方は苦笑い
日溜りに菊を手折って古い二人
家のことみんな知ってる古時計

大阪府 畑中 節子

無駄遣いおしゃれ心に誘われて
気負い立つ畑の雑草春を告げ
畑仕事ばあちゃんの友いつも飴
冬晴れに蠟梅香る新春の風

大阪府 小栢 こずえ

足あとでけがれるの嫌雪の庭
事故を見て無事と感謝の雪の道
温泉にはいらずしゃべるクラス会
乗せてもらい運転よりも肩こらせ

大阪府 高木 道子

ほんまもん諭吉をなんで溺れさす
お豆煮る練炭悪魔に指図され
天気図は縦縞春は遠からじ
早春の光埃をのぞいてる

犬山市 関本 かつ子

一本の針に座布団みんな上げ
批評家の顔で出て来る美術館
神仏の程良く混ざる国に住み
大漁も遠く鯛の量り売り

尾張旭市 三浦 きぬ

聞き役は自慢すること持たぬから
ヨンさまに中年女性青春し
身贖な話もたまに聞く我慢
フラミンゴも今年の干支と知りました

静岡市 中西 雅

何回も約束をする白手袋
枯葉舞うタンゴかワルツかろやかに
陽の香りたつぷり吸った掛けぶとん
誕生日君はあの日の若いまま

高岡市 青井 はつえ

平凡な男の妻でいる平和
説明書サツと読んだら棚の上
テレビならジーと見ている他人の顔
九十歳入れる保険できそうな

横浜市 布山 嘉信

弱い鬼同居をさせて福は内
孫笑う一足早い春が来る
晩学へ拒絶反応脳と指
生きている証と悩み受けて立つ

■句集紹介

木本朱夏句集

『転生』

波多野 五楽庵

私の手元に、かつて朱夏さんの作品を評した寺尾俊平さんの一文が残っている。

俊平さんは「伝統川柳の本流を行く作家そのものであり、しかも未成熟な魅力を持っている。そしてその作品には何かを掴もうとする気迫が漲っている」とあった。勿論、時代の趨勢はあるものの、俊平さんの言う未成熟とは心象作品に窮りがない事である、と気がついた。

靴ばかり買つて淋しい生まれつき

思いきり顔を洗つてあれは 夢

鬼も蛇も帰つておいで淋しいよ

こぼれ萩 わたしに何が出来たらう

朱夏さん自身の韻律には、抒情の移りがあり、物語性がある。これは既に成熟した語原

が読む人を引きつけて行くからであろう。しかも作品には饒舌さがない。

作品の内部の饒舌さを見せつけられると、その作家の裏側まで見えて来そうではないやにるが、朱夏さんにはそれがいいから引きつけられるのである。

沖に出たなら傍観者にならう

海の青ひとつぶ耳にぶら下げる

朱夏さんのロマンと感性はこの「青いひとつぶ」に代表されるのではないか、と思うくらい具象的な切り口を見せてくれる。

ひまわりの丈おとうとを思うなり

夫婦茶碗に三角波が立っている

時刻表閉じると海は消えていた

逆さまに貼った切手で秋が着く

これらの作品はかつて「かもしか賞」の風炎賞に輝いた作品で、ある選者に変貌する作者と評価された。

まさしく朱夏さんは俊平さんの評したように未成熟から成熟へと変貌を続けて来たのである。

転生のあさきゆめ見し観覧車

朱夏さんは暇をみては一人の旅人になってしまう。その旅から得るものは旅人の心であった。時には鋭い切り口を身に付け、ある時は例えようもない淋しさを持ち帰る。その旅は句の転生を支えてくれたのだろう。

身の内の鬼立ち上がる曼珠沙華

指狐コンと啼かせて忘れよう

能面の裏に三つの寒穴

振り出しに戻つてみれば枯野なり

春を待つ眉をきれいに整える

辞典を幾冊か持ち出して朱夏さんの句集の名である「転生」を尋ねてみた。転生は仏教語であり、輪廻転生の「迷いの世界を転々とすること」とある。

朱夏さんの作品の中にも心の迷いが綴られていた。その迷いの中に入る事は出来ないが、句集「転生」は伝統川柳のこれから歩んで行かねばならぬ将来を語っている。伝統と現代川柳の織りなす情緒が、明日の川柳の行方である事を教えてくれた。

愛染帖

波多野五楽庵選

藤井寺市 鴨谷瑠美子

茜足すさみしがりのやの空だから
戸惑えば時々神の手を借りる

松江市 川本 畔

楚々として落書きしたくなる壁だ
太陽をみてから泡は消えました

鳥取県 土橋 螢

寒紅をさす外出の身嗜み
違つ道教えた地藏さんヤーイ

大阪市 前 たもつ

程々のくらしで夕陽美しい
一步譲り仲よく夫婦しています

尼崎市 長浜 美籠

ときめいています木洩れ日とわたし
情熱を懐ふかく冬の章

和歌山県 三宅 保州

人差し指で人を殺めていますせんか
節のない天井板に落ち着かぬ

天国の方が友だち多くなる
指名手配僕によく似た顔がある

弘前市 高瀬 霜石

眼鏡外して意外な私見て貰う
疑問符のままの別れがきこえない

和歌山県 桜井 千秀

陽が沈むころに芽生える死生観
五感みな揃つて春彩の音符

富田林市 池 森子

ポトポトと冬の音して椿落つ
てのひらで揉み消している嘘一つ

大和高田市 鍛原 千里

胸の谷間の蝶が目覚める日の匂い
心電図に解説されていた秘密

和歌山県 木本 朱夏

帳尻を合わせた嘘を見抜けない
二十一世紀覗きゆつくり近く積り

海南市 谷口 義男

藪椿 女と同じ血が流れ

藤井寺市 太田扶美代

告白は十七文字があればよい
ひたむきに生きて仏と懇ろに

和歌山県 榎原 公子

年寄りを探しに来ないかくれんぼ
人差し指のしびれに耐えている真冬

高槻市 乙倉 武史

釘一本打てばすんなり済む話

弘前市 高橋 岳水

雪国の無口に熱いものがある

富田林市 中井 アキ

有為転変何れひとりの笛の音

西宮市 門谷たず子

未知数の明日を動かすタクト振る

和歌山県 武本 碧

無意識なタブー私を責めないで

出雲市 園山多賀子

引き際の今更飾ることもなし

奈良市 米田 恭昌

私の中に居座る寒気団

大洲市 花岡 順子

止まり木の隅で乾かす涙壺

羽曳野市 森下 一知

春風に男結びも緩みだし

枚方市 海老池 洋

影ときどき縁切り寺へ駈けたがる

四條畷市 吉岡 修

淡雪の傘が重たいプロジェクト

弘前市 相馬 銀波

七十路の紅に拘りすこしある

西宮市 牧瀬暁喜子

蝶結びきれいことでは済まされぬ

米子市 白根 ふみ

しみじみと歳おもうなり春の風邪

八尾市 高杉 千歩

溜息をついたところで目が覚める

和歌山県 辻内 次根

芝居ならこころが幕の下ろしどき

橿原市 安土 理恵

竹原市 正畑 半寛
向き合つて海も私も動かない

東京都 清原 悦子
旅先の土が優しくしてくれる

八王子市 播本 充子
雨あがり明るい嘘を考へる

和歌山市 梶見 章子
眉の形変えてみました春つらら

大阪市 小泉ひさ乃
句読点はつきりさせて吹つ切れる

西予市 黒田 茂代
冬の星みたいに勸を研ぎすます

和泉市 西岡 洛酔
今日生きるために黄昏紅を引く

倉吉市 山中 康子
言い負けて普段通りの顔でいる

鳥取市 岸本 宏章
自分だけ不幸と思うしあわせ

富田林市 大橋 鐘造
しっかりと影を挿んで放さない

西宮市 片山 忠
都合良く弱者を装う癖がある

池田市 栗田 久子
古稀の春はたちの春もあつたけど

京都市 都倉 求芽
消えやらぬ想いがカーテンの裏に

大阪市 小谷 集一
運命か路傍の石のままにいる

大洲市 中居 善信
辻褄をきつちり合わず共犯者

日上市 加藤 権悟
深いさくら吹雪を見ていたり

弘前市 宮崎ヒサ子
ときめいて冬の雷はぐらかす

唐津市 仁部 四郎
一丁目一番一号老舗跡

唐津市 井上 勝視
悔やまない運命素直に生きてゆく

唐津市 樋口 輝夫
妥協癖ついた男の丸い背な

奈良市 渡辺 富子
迷路抜けやつとほんのり見える明日

尼崎市 春城 年代
雪もよいケチな話は忘れよう

尼崎市 村上ミツ子
更地になつたお墓に春の光射す

八尾市 塩路よしみ
明と暗いつもこつそりすれ違ふ

今治市 塩路よしみ
相槌を打つてすんなり輪にとける

松江市 安食 友子
老優のラストシーンは枯淡です

倉敷市 井上 富子
これからは私が背負う屋台骨

和歌山市 福本 英子
心まで凍らせたりはせぬ絆

生駒市 飛水ふりこ
相槌は打つが同意はしていない

西宮市 西口いわゑ
それからは記憶にないと言えはいい

鳥取市 田村 邦昭
しがらみを捨てて来る勇気をうらまれる

鳥取市 夏目 一粋
追いかけて来る齢ならつかまろう

和歌山市 柏原 夕胡
この辺で淑女の仮面脱いでみる

鳥取市 岸本 孝子
蟹ツアー行つたつもり蟹を買い

高知市 小川てるみ
以下同文されたくはない自負がある

鳥取市 武田 帆雀
エレベーター屋上までの多生の縁

黒石市 相馬 一花
ブライドを捨てて晴耕雨読する

弘前市 岡本 花匠
消雪剤撒いて春呼ぶ北焼行

三田市 坂本 藤朗
雲たつて春はのんびり動きます

和歌山市 玉置 当代
もつたいないを食べて養う皮下脂肪

吹田市 岩屋 美明
橋のない川を渡つて来た桜

寝屋川市 江口 度
おしゃべりな風にカーテンかけ替える

東京都 後藤 早智
冬の花ひっそり違ふ色を持ち

弘前市 櫻庭 順風
年金をじわりじわりと齧る税

鳥取市 福田 登美
残り火をひそかに煽る春の詩

女房の知恵袋にも穴がある
松江市 三島 崧丘

血圧計心の揺れも提えられ
鳥取市 録沢 風花

福は内その対極に居るわたし
堺市 山本 半鏡

身に余る言葉いただき眠れない
鳥取県 佐伯 やえ

句読点やたらと多くなる余生
奈良市 乾 春雄

幸せな夫婦と見せる演技力
唐津市 市丸 晴翠

涙して我が師の恩を歌い切る
堺市 志田 千代

これ以上喋れば僕の首が飛ぶ
鳥取市 美田 旋風

いい夢を見ようほのぼのしていよう
鳥取市 土橋はるお

友逝つて眠利たよる日々となり
武蔵野市 亀井 円女

石橋を叩いて春はまだ来ない
和泉市 横山 捷也

身の内にまだ割り切れぬ愛と憎
和歌山市 山口三千子

吾が道を行く一徹の耳が無い
和歌山県 中後 清史

この道を行く外はない傘寿
鳥取市 上田 俊路

昭和史の語尾きない冬夜半
大阪市 星野さらり

一歩引く位置で見かけた親離れ
兵庫県 中上千代子

在りし日の母を偲んで目刺し焼く
高槻市 左右田泰雄

ど忘れという調法な処世術
寝屋川市 坂上 高栄

アングルを替え風向きを読みなおす
松原市 玉置 重人

言い訳が上手になつて老いてゆく
東京都 岸野あやめ

なけなしの一本の歯が疼き春
河内長野市 坂上 淳司

てのひらで豆腐切るのも母の朝
和歌山市 古久保和子

見てくれは悪いが人を裏切らぬ
八尾市 西川 義明

終電に酒吞童子が眠りこけ
大阪市 伏見 雅明

九条はまだゆずれない自尊心
美祿市 安平次弘道

弱者への予算あつさり削られる
羽曳野市 酒井 一壺

世間では通用しない自信作
藤井寺市 中島 志洋

同い年なのに妻だけ若つくり
東大阪市 北村 賢子

テーブルを挟んで弾まない紅茶
京都府 丹後屋 肇

標札はローマ字にする新世帯
熊本県 高野 宵草

四月には四月の風が吹くはずや
大阪市 井丸 昌紀

花咲けばきつと行こうね車椅子
大阪市 板東 倫子

記載漏れするほど銭があり余り
唐津市 山口 高明

驚沢な春だな筍湧いて出る
豊中市 水野 黒兎

春だもの老いに似合いの花と歌
泉佐野市 稲葉 洋

何かあるライバルの手が温かい
三田市 堀 正和

騒ぐ子に戻つてほしい水枕
大阪府 澤田 和重

真夜中の電話にからだ震えだす
三田市 石原 歳子

数え歌十でどうとう本願寺
倉吉市 松本よしえ

コート着て老いをかくしている日々よ
米子市 青戸 田鶴

露天風呂 仏のような顔ばかり
奈良市 矢野 良一

雪解けの川から春のメッセージ
岸和田市 雪本 珠子

悪女にもなれる才女へ魅了され
宇部市 平田 実男

ひと言がなかなか言えぬ酒あおる
鳥取県 谷口 次男

捻子を巻くチャンス逃した古時計
倉敷市 小野 克枝

誹風柳多留二四篇研究 77

小栗 清吾・山田昭夫

伊吹和男・大野秀二

橋本秀信・粕谷長生

清 博美・佐藤 要人

610 気のぬけた物ハひるまの四ツ手也

狸声

小栗 四つ手籠籠は、日が落ちてから、吉原へ向けて四枚肩でも奮発して飛ぶように突っ走らせるのがいいのである。まっ昼間、野暮用でとろとろ行くのは気の抜けたものであると、遊び人の弁。

ひる見れハ地をあるいてく四ツ手かこ

安八礼5

日のおたる内ハ淋しい四ツ手籠 宝11礼2
なお、もう少しひねってみると、勤番侍が昼遊びに出かけるのをからかった句ともとれるが、それは読み過ぎか。

はくちうの四ツ手こじりを式出シ 一三36

橋本 賛 四ツ手は日暮れて後、一刻も早く酒代をはずんで快速で行くのが身上、それが

急ぐでもない昼間にのんびり行くのはまったく様にならない。

清・佐藤 賛。

611 女房にかみなり門て出ツくわし 露舟

小栗 句意は文字通り。これから雷門を入り、隨身門から馬道を真っ直ぐ吉原へと企んでいたところへ、バツタリと女房に出くわした。さて、女房の格気が雷の如く轟くか。それともうまくこまかせるか。

雷を這入り稲妻形りにぬけ

二六4

橋本 賛 これを帰途と解したらどうだろう。

山田 賛 往還いづれの場合でもおもしろい。

伊吹 賛 女房に出くわしやすい時間帯は行きが多いと思うが。

清 作った句だから、細かい穿鑿は無用でしよう。「女房の格気が雷の如く」をいいたいだけ。
佐藤 賛。

612 廻り灯籠ハおいらだと素見物 川長

小栗 吉原・玉菊灯籠の句。玉菊灯籠は、『東都盛事記』六月晦日の項に

今夜より吉原仲の町両側の茶屋にて、家毎に揃の燈籠を出す。(略)廊中灯籠の始りは、角町中万字屋の名妓玉菊といへるが三回忌の追薦にとて、享保十三年の七月に、島の切子とうろうを出しける
とある。

句意は、玉菊灯籠に出かけた素見が廊中をぐるぐる回って歩いて、「回り灯籠とはおいらのことだ」と言っているという意。

灯籠にたかるハ里の油むし

五四23

舟頭をとうろふのあぶら虫

二四32

清・佐藤 賛。

613 女竹から男竹へうつるいそかしさ 百喜

小栗 女竹はイネ科のタケササ類。稈は高さ三〜六メートル、径一〜三センチメートルに

なり、節間は長く枝は節に五〜七本ずつつく。
〔日〕「男竹」は「日国」にないが、「雄竹」と同義で、真竹や孟宗など大柄な竹をいうのであろう。

句意は、柳雨「年中行事」の頭注「煤掃から門松」をいたたく。女竹は、おそらく煤竹に多く使われたものと思われ、門松の竹は孟宗竹など太い竹が使われる。師走の十三日の煤掃が終わると、次は門松の準備で忙しい年の暮れである。

盆と暮女竹男竹の世話しなさ 一三四四
四たびめの竹ハめでたく黒くなり 拾八二
清・佐藤 贊。

614 今戸で八人間ノ鬼をかまへ入れ 夢中

橋本 今戸は山谷堀にかかる今戸橋の北詰から、法源寺あたりまでの隅田川沿いの地域（現、台東区今戸一、二丁目）で、江戸時代、瓦や鉢、壺、人形を作る今戸焼の集落があった。『江戸近在地名物名産集』（種おろし七篇）に「浅草今戸 火鉢、ほうろくを作る今戸焼といふ瓦師多シ」とある。

今戸で鬼瓦を焼くことを詠んだ句。地獄では鬼が人間を釜に入れて煮めると言うが、ここ今戸では人間が鬼を窯に入れて焼いている。

る。釜と窯の同音をきかせ、鬼を矮小化した。門松のなぐれ今戸で鬼をやき 二二二
定紋の今戸へしれるい、暮し 三三二
鬼ハ外福ハ内とハ今戸なり 三三三

清・佐藤 贊。

615 浮き草よりも質草ハよくながれ 川長

橋本 浮草は浮き草の根が水中に垂れて固定しないことから、人の世の定めのないことの例え。浮きが憂きに懸かる。（日国）

「浮草の流れの身」と、遊女などが流転の境遇を嘆くが、こちららの貧乏暮らしはもつとひどい。なけなしの質草は請け出すことができず、いつも流れているわい。

質草を浮草にする三ヶの月 四九三

八月目に流れて女房くやむ也 三六三

熊手でも行ぬハ質の弓ながし 三六二

清・佐藤 贊。

616 する度にとなりへしれるけちな根太 夢中

橋本 根太は床板を支える横木。

多言を要しない句。貧乏長屋の両隣は、そのたびに震度？。

根太の落るほどせいを出す若世帯 末三九

清・佐藤 贊。

617 宿はづれさるのせなかですいつける 丸龍

橋本 宿外れは宿場町の外。さるは扉や雨戸の戸締まりをするために、上下、あるいは左右にすべらせ、周囲の材の穴に差し込む木。（日国）

宿場の中を通過して宿場の外に出たので、まず一服とたばこに火をつけたという句と思うが、「さるの背中」が判らない。「さる」にはいろいろな意味が辞書に出ているが、主題句に適合するものが見出せない。そこで語釈の例を取って、苦しまぎれの駄洒落を。諸兄の明解を待つ。

我慢していた愛煙家が、宿外れの家の閉まつている戸の陰で（風を避け）、火をつけると解した。戸締まりの外側なので、背中とこじつける。

宿はつれ順礼ふしもちたらくや 一五二〇

戸の猿は手長を防ぐ為に付ケ 一五三三

小栗 状況は礎稿の通りであるが、「さる」は庚申塚だと思っ。

庚申に包をしょハせ野雪隠 三五三〇

佐藤 小栗説に賛。庚申塚のかけで吸い付けの意と思つ。

首香のむ

政岡日枝子選

春の駅で一人の汽車に乗りかえた
 わたくしの生涯にある誤字の数
 人間を大きく見せる服を着る
 進ませせておく春を知らせる時計
 みんな孤独でみんなが夢を放さない
 わたくしの息を込めてる繻をつく
 ほろ苦い話もしよう露の臺
 カレンダーどの部屋見ても桜咲く
 着る当てのない一着を愉しめり
 復活へ花も私も切り戻す
 悲しさはよろこびよりもよくひびく
 屑籠でくすくす笑う声がある
 猫のように残そう足の跡
 淋しい日やたら約束したくなる
 対峙する雪椿から切せつと
 好きだから素顔も自我も見せてない
 青信号渡りきるまで待つてね
 てのひらで穏やかに化粧水
 朗らかなになって鏡が若返る

米子市 野坂 なみ
 八尾市 井尻 民
 倉吉市 野口 節子
 八尾市 村上ミツ子
 米子市 青戸 田鶴
 西宮市 牧瀬富喜子
 藤井寺市 高田美代子
 大阪市 津守 柳伸
 藤井寺市 太田扶美代
 和歌山市 古久保和子
 米子市 中井 ゆき
 羽曳野市 吉川 寿美
 米子市 林 瑞枝
 大和高田市 鍛原 千里
 米子市 白根 ふみ
 鳥取市 福西 茶子
 和歌山市 福本 英子
 松江市 川本 畔
 高知市 小川てるみ

人の字の突つ支い棒がはずれそう
 リンゴバイ余罪を突いてみることに
 わつはつはつストレスを吐く春の天
 ひとりでもできる笑顔を持ち歩く
 いつまでも父の帽子が掛けてある
 消えかけた火に思いきり息をかけ
 空っぽになった菓箱の水浸し
 輪の中にいるのに居場所定まらず
 ライバルが転ぶ祭りの日としよう
 ふとところにガンを持つてるよとカルテ
 丁寧に生きよう愛が瘦せてゆく
 この道と決めたのは誰わたしです
 母もこんなだったかと老いてゆく
 場の空気読んで笑いを引つ込める
 独り住むまだまだ旗は振らないと
 おとほげが上手になった母が居る
 相槌を打つてわたしも火の中に
 あの人が喋れば風が動き出す
 妬みでる暇に努力をなさいませ
 鏡掛け醜い心カバーする
 私の夢を尋ねて五十年
 誕生日褒美のしわが一つ増え
 おや隅で咲いていたんだね水仙
 帰る道忘れるほどにはなつてない
 振り返つては諦める曲り角

八尾市 宮崎シマ子
 尼崎市 長浜 美龍
 香芝市 大内 朝子
 西宮市 門谷たず子
 米子市 澤田 千春
 東京都 後藤 早智
 鳥取市 徳田ひろこ
 三田市 久保田千代
 和歌山市 楠見 章子
 大洲市 花岡 順子
 富田林市 中井 アキ
 西宮市 西口いわゑ
 尼崎市 春城 年代
 豊中市 安藤寿美子
 八尾市 生嶋ますみ
 西脇市 七反田順子
 和歌山市 柏原 夕胡
 大阪市 神夏磯典子
 八王子市 播本 充子
 出雲市 園山多賀子
 倉吉市 米田 幸子
 富田林市 片岡智恵子
 羽曳野市 徳山みつこ
 大阪市 古今堂蕉子
 熊本市 永田 俊子

種詩いた後は信じる他はなし
春が来て女人の話長くなる

豊かさの中で言葉が瘦せてくる

ふところの虫一匹が謀叛する

大手術坂きたい灰汁は抜け切らず

ティーカップ遣らずの雨が降り続く

春よ来い余りに冬が悲しすぎ

放哉の碑に燦燦と陽が当たる

説法を聞いて仏が近くなる

しっかりとこのころの核を掴んでる

度忘れのままで越せぬ曲り角

鏡よ鏡なんてうぬはれすぎた魔女

リベンジを握り拳の中に秘め

野望などなくて気軽に参加する

お愛想のジョークやつぱり浮いてくる

雑魚ながら希望と青い空が好き

コンサートちよつぱり貰いました青春

振り出しに幾度戻つて今がある

脇役の顔で押ししてる首根っこ

胸の内隠して軽くありがたう

寂しくて温もりのある方に行く

ストレスも愚痴も忘れる給料日

ひっそりとみやこわすれば過疎が好き

若い日の苦労が下地になった皺

年越しの鬼の面こそいとおしき

藤井寺市 鴨谷瑠美子

八尾市 田中トシエ

大阪市 川久保睦子

大阪府 米澤 徹子

堺市 西村りつえ

和歌山市 武本 碧

大阪市 板東 倫子

鳥取県 佐伯 やえ

鳥取市 黒田 能子

芦屋市 飛永ふりこ

生駒市 山本 玉恵

岡山県 山本 玉恵

東大阪市 安永 春

堺市 志田 千代

堺市 矢倉 五月

寝屋川市 森 茜

鳥取市 永原 昌鼓

大阪市 星野きらり

和歌山市 桜井 千秀

倉敷市 井上 富子

米子市 小塩智加恵

東京都 清原 悦子

鳥取市 山岡 紀子

今治市 塩路よしみ

神戸市 山田婦美子

堺市 山本 半鏡

よく笑う貴女ほんとに幸せか
紅梅のつぼみ少女のように見え

なにもせずいちにち無事にすみました

春の風こころの鍵がゆるみだす

何こばみ床の水仙背を向ける

忌は巡る亡夫はどこまでいったやら

天国でも法螺吹いてるのお母さん

割引に満買御礼冷凍庫

団欒に母が一番良く笑う

坂道も命小出しで生きる老い

子や孫に元気芝居で安堵さす

ねこやなき春を奏てる四分音符

俺が貰った義理チョコを妻千食べ

孫の買うチョコはパパなしおしにゆく

酉年にまねる早起き守つてる

いびき背に聞いてヨソ様夢に見る

東大阪市 北村 賢子

大阪市 吉内タカ子

三田市 辻 開子

岸和田市 土橋 房枝

寝屋川市 坂上 高栄

今治市 野村 清美

鳥取市 小栢こずえ

大阪府 吉田孔美子

豊中市 石谷美恵子

和歌山市 田中 みね

鳥取市 土橋 睦子

鳥取市 録沢 風花

大阪市 本間清津子

大阪市 小泉ひさ乃

鳥取県 石谷美恵子

豊中市 櫻谷 郁子

和歌山市 田中 みね

松江市 兼本 政子

鳥取市 吉田孔美子

大阪府 小栢こずえ

今治市 野村 清美

鳥取市 小栢こずえ

大阪府 吉田孔美子

豊中市 石谷美恵子

和歌山市 田中 みね

松江市 兼本 政子

鳥取市 吉田孔美子

大阪府 小栢こずえ

今治市 野村 清美

鳥取市 小栢こずえ

大阪府 吉田孔美子

豊中市 石谷美恵子

和歌山市 田中 みね

松江市 兼本 政子

鳥取市 吉田孔美子

大阪府 小栢こずえ

春を待つ心が鮮やかに浮かび上がってきます。

壺

石森 利昭選



澆壺に打たれる老師赤い肌
 蛸壺にまた潜り込む昼下り
 野の花と素焼きの壺は名コンビ
 少しずつ夫婦の壺が分りだす
 先代からの壺が家風を知っている
 お茶壺が土下座をさせた頃もあり
 奸計の壺とは知らぬ蛸の修羅
 壺少しずらした妻の灸熱し
 骨壺を墓に納めた日の孤独
 白磁の壺に春爛漫を喋らせる
 楽しさを詰めては覗く壺の中
 酒壺の蓋開けに来る御節介
 澆壺がおいででおいでをして困る
 こんなにも軽い骨壺亡父を抱く
 銘のある壺は野の花寄せつけず
 人間の驕りを壺に仕舞い込む
 国宝とそっくり我家の塩の壺
 桃の花入ると壺も若返る
 血圧のはなし塩壺にも聞かす
 白磁の壺凍と美人の佇まい
 曇つばも時代の波に流される
 骨壺の中から洩れる愚痴一つ

浩三 尚士 歳子 圭一郎 よしみ 勝視 正剣 像山 郁子 寿美 伊津志 淳司 みつこ かおり (志) 千代 洛醉 倫子 あずき 宏章 俣子 千里 柳弘

信楽の野積みの壺に雪積る
 思う壺悟られまいと顔を撫で
 ガラス越し茶釜ひとつに目を凝らす
 花一輪ひっそり壺に咲く茶室
 旅に出て夫婦で焼いた壺に花
 心得た壺で話を外らさない
 鑑識に化粧された割れた壺
 母の愛詰めた壺から発芽する
 床の間に飾ると高い壺に見え
 壺焼きのさざえが嘆く身の不幸
 憤慨の顔して蛸は壺を出る
 鑑定で晒しの刑にあった壺
 躍動の澆壺にして濁りなし
 傘立てにした古備前の壺がある
 壺焼きのの字で抜けてくるサザエ
 住
 投入れの蝨梅素焼きの壺映える
 壺ひとつ部屋の空気を引きしめる
 人の世の行きつく果ては壺一つ
 陶芸で作った壺を持って余す
 あとひとつ内緒の壺のあるウフフ
 人
 澆壺へ諸行無常と流れ落ち
 地
 こだわりが壺をわらせた匠の眼
 天
 来客の話明かさぬ床の壺
 軸
 こけ狼の壺に左膳は夢を追う

章久 (備) 洋 (岩) 康子 愛論 准佑 美一 富子 (渡) 度 輝夫 (備) 雄 時雄 保州 正雄 重人 哲男 朝子 (安) 泰子 修 恭昌 鶴田遠野

だぶだぶのスーツではしゃぐ人園児
 保育所へパンツスーツが駆けてゆく
 新調のスーツ歩幅を広くする
 さあ行こう弾ける色のスーツ着て
 就職の夢へスーツを見て回る
 やる気満々男が燃えているスーツ
 まだ青きスーツ姿に夢託す
 初めてのスーツ大人の匂いする
 新調のスーツ内定待っている
 お財布にやさしいスーツ買いました
 採用の通知で借りるスーツ代
 喋らねば一分の隙も無いスーツ
 スーツ美人負け組などと言わせない
 背広着る僕に尻尾が生えてくる
 新調のスーツ鎖の音がする
 出席と書く日新調のスーツ
 夫より詐欺師バリッとしたスーツ
 初背広親馬鹿母のへそくりで
 鉤裂きのスーツ惜しいが普段着に
 行き先をいつも聞かれているスーツ
 フルムーンスーツケースが夢語る
 あつらえたスーツに合った顔をする

清史 充子 正雄 孔一 朝子 美紗子 (備) 節子 幸生 恭昌 照子 ミツ子 照子 かつみ あずき 霜石 幸生 扶美代 水笑 東吉 圭一郎 英旺 度

スー ツ

国森 武子選



就職の孫を大人にするスーツ

このスーツ合うまで減量やり遂げる
単赴任スーツの胸に子の写真
あずま

ライブドアスーツ社会を変えていく (四) 章子
お下りのスーツ着ても処女である
あやめ

謝りに行く時やはり要るスーツ
次根

スーツ着て漁師の顔は別人に
次男

お見合いの度にスーツをかうのかい
慕情

新スーツダンスで眠るフリーター
はるお

スーパリーに寄ったスーツの無表情
注湖

不況風スーツの下に着る鎧
恭昌

移り香の匂うスーツは嘘を言う
彩子

今日かぎり自由の身ですスーツ脱ぐ
雄々

古希の坂赤いスーツを着てのぼる
茶子

千円のスーツで今日も燃えている
半覚

壇上で赤いスーツが吠えている
美明

年金を貯めて喜寿にはスーツ買う
充子

新調のスーツに誰も気付かない
蝨

着古したスーツよ愚痴を聞かせたな (備) 洋士

悦男

あずま

あやめ

次根

次男

慕情

はるお

注湖

恭昌

彩子

雄々

茶子

半覚

美明

充子

蝨

(備) 洋士

軽 い

都倉 求芽選



人柄が良すぎて軽く見られてる

軽やかに主役を包むかすみ草
活恵

傷は軽いが転んだことが恥ずかしい
春雄

死ぬ話も生きる話も軽くない
弥生

一歩ずつゆずって軽い背の重荷
彌生

肩書を外して上着軽くする
彌生

軽いジヨーク決してあんたを許さない
彌生

人住まぬ生家の屋根は軽く見え
たもつ

気軽うに支えてくれる夫は無し
郁子

燃え尽きた男の軽い屍よ
可住

植山の旅は身軽になつて行く
可住

これが母さん 軽い小さい骨拾う
重人

良心がときどき軽いめまいする
重人

軽いねと思わせ実は研いでます
重人

軽く押すだけでよくなることもある
重人

一善に軽い会釈が味方する
重人

軽いはずだったあの日の愛の傷
重人

女也

活恵

春雄

彌生

彌生

たもつ

郁子

可住

重人

重人

重人

重人

重人

重人

重人

重人

重人

初歩教室

題一立派

三宅保州

中八を防ごう

川柳を作るうえで最も守らなければならぬことは「五・七・五の十七音字」ですが、案外これが守られていません。特に、中八音字の句がしばしば見受けられます。十七音字は川柳の数少ない約束事で、但し上五はやむを得ぬときは上六以上でもよいという緩和が認められているなかで、リズムを守る中七と下五は是非守りたいものです。しかも字余りの殆どは、助詞を一字省いたり、五・七・五を入れ替えたり表現を変えたりとの推敲をすることにより防げる場合が多いものです。

安易に字余りの句を作らないで、中七・下五音字にする習慣を初歩のうちにしっかりと身につけるように心掛けましょう。

【添削・批評句】

原 立派だとヨイシヨされるいやな役 俊 子
中六音字。「ヨイシヨをされて厭になる」

原 御立派と皮肉たつぷりいやな奴 正和

「いやな奴」は言い過ぎ「浴びせられ」に

原 誰もみな立派な形したクラス会 雅明

原 同窓会二十年後はみな立派 秋星

原 どの友も立派に見えるクラス会 いさお

同窓会の句は既に同想句が多く残念です。

原 親は子に立派になれと願つてる アヤ子

原 行いが立派な子にと願う親 光枝

原 重すぎる立派な親に子の期待 弘子

三句とも親心を詠んだ「そうですわね」的な句。そこからを詠む工夫をしましょう。

原 お相手が立派過ぎ私断るよ 綾乃

添 お付き合い御立派すぎてお断り

原 市役所は建物立派で中身なく 勝久

中八。「建物はとても立派な役所だが」

原 健康で立派にみえて知が足りぬ 洋子

「知が足りぬ」はきつすぎませんか。

原 草ばかり立派に伸びて春最中 ヨシ枝

添 草ばかり立派に伸びた一等地

原 親安堵立派に誓詞読むふたり 美紗子

「親安堵」熟語的に縮めるとリズムが悪い。

原 司会して立派な家を建てたはる 水昇

ちよつと表現を変えて風刺を効かせ。

添 みのもんだ立派なことを言うてはる

原 席ゆる青年立派褒め世相 信子

詰込みすぎ「若者が席を譲ってくれました」

原 有難う立派に咲いた庭の梅 稔

「梅」が動く「鶯が来そう立派に咲いた梅」

原 今迄つても立派な母と言われない 宏子

視点を変え「私にはとても立派な母でした」

原 子の絵画立派な才におどろかせ 利子

文法上は「驚かされる」なので表現変えて。

添 ビカソ張りの才能見える子どもの絵

原 親よりも立派な表札並んでる 益子

投句三句とも中八です。中七の習慣を。

原 公的年金欠かしたことはありません 像山

原 飲兵衛も立派税金払つてる 像山

二句併せ納税に焦点を絞りませんか。

添 無理しても税金だけは払います

原 立派だと思えた識者が痴漢する 好文

中八。「捕まえた痴漢立派な紳士風」

原 平凡に生きる努力を惜しまない かずみ

具体性がほしい。趣味、仕事、年齢などで。

原 立派だと言われて見たい人知れず 信雄

「人知れず」に一工夫を。見たいはみたい。

原 結婚式立派でしたと式を誉め ミネ代

「式」が重なるので、風刺を強めて。

添 ご立派な挙式もすべて親がかり

原 剪定のミスも立派に梅一輪 寿々女

添 剪定のミスにも咲いてくれました

原 まかせとけ老いの立派な米作り 清

添 老いたりといえども負けぬ米作り

原 立派な子(父)さん見てね時流れ れんげ
 添 亡き夫に見てもらいたい立派な子
 原 朽ち幹に立派に咲いた盆梅展 タカ子
 添 盆梅の木も持ち主も立派なり
 原 嘘がばれ立派なひげが踊り出す 典子
 添 嘘なのか立派な髭が揺れている
 原 特売を立派に飾り街散歩 ミヨノ
 添 特売で立派に飾り街へ出る
 原 初舞台立派に詩吟孫九歳 貞月
 省略整理して「杞憂なり孫の立派な初舞台」
 原 きつぱりと過去を再生紙は立派 好
 添 再生紙お前立派に立ち直り
 原 嘘をつくそれは立派な犯罪者 節子
 添 嘘をつくことも立派な罪である
 原 落選のポスターやけに立派すぎ 道子
 添 ポスターは立派でしたが落ちました
 原 最後には長老が説き場を納め はじむ
 添 長老の貫禄その場説き納め
 原 お支度も立派仲間やたら褒め 政子
 添 それにしても仲間やたら褒めちぎり
 原 物騒な世相互立派な家が 美恵子
 主観的に「豪邸でないから狙われぬ我が家」
 原 豪宅の裏を二面記事あばく 孝明
 添 豪邸の裏を暴いたスキヤンダル
 原 御立派な家が我が家を落ちこませ 雅代
 添 御立派な家の隣が我が家です

原 お隣りの庭の立派さ癒しくれ 開子
 添 お隣の立派な庭に癒される
 原 立派な木小さな我家陰をする こずえ
 添 お隣の大樹の陰に住んでます
 原 立派でも祝辞書かぬ丸暗記 幸
 添 丸暗記の祝辞書き立派でも
 【少し工夫すれば佳くなる句】
 原 立派ではないが私の金字塔 イセ
 具体的「皆勤賞が金字塔」とかに
 原 ひと言の愚痴もこぼさぬのが立派 准一
 「こぼさぬ母だった」的に対象がほしい。
 原 立派たと言われ退けなくなりました 夕胡
 「仮面を外せない」的な暗喩も佳いのでは
 原 ふるさとに立派な家がある余裕 千代子
 「家を遊ばせる」で穿ちの味わいが出ます。
 原 ベンツには到底乗れぬ怖いから 順子
 添 盗られるからベンツ買うのはやめました
 原 胸立派ユニクロのし合いません 千華
 添 ユニクロのしでも小さすぎる胸
 原 豪邸に住んで警備に守らせる のり子
 「警備も高くつき」で風刺が効きます。
 原 立派なこと言って自分が窮屈に 満子
 「自分を狭くする」でまとまりが出ます。
 原 災いに人の強さを見せられる 映子
 「負けるものかと仮設の灯」とか具体的に。
 立派な手持っているのに活かされぬ 那珂子

死に際も立派だったと言われたい 孔一
 十連覇もう楽したくないですか 亜希子
 外見につられて買った土産物 婦美子
 百歳の誕生ケーキドンと据え つよし
 お父さん私立派に生きてます 徑子
 親友が立派になって近寄れぬ 忠子
 愚作でも立派な額が引き立てる 智加恵
 創業の立派な貌が額にある 英旺
 【佳句】
 短所など一行もない偉人伝 武
 立派な門できて母屋が倒れそう 喜子
 斬られ役立派に死んで賞をとる 起世子
 自慢した立派な施設また破綻 藤朗
 年金に老人ホーム立派すぎ 正和
 合併で立派な庁舎支所となる 時雄
 戦死の子女は立派と言って泣き 章司
 一盗塁ごとに善意の車椅子 昇
 【今月の推せん句】
 栄誉賞見事イチロー打ち返し 坂上淳司
 返上でなく打ち返しが良い。見つけもよし。
 捨てられた鉢に立派な花が咲き 中井萌
 鉢や花を擬人法として読むと味わい深い句。
 【私の句】
 ファインプレーに見せぬ守備範囲の広さ
 (紙面の都合で、添削、批評等不十分でお詫びします)

秀句鑑賞

同人吟 遠山可住

—3月号から

天井の海老ほど厚着して暮らす

池内 かおり

言われてみると天井にしても弁当にしても天ぷらの衣は海老ほど厚いものはちよつと見当りません。そして見馴れているせい、この厚さで海老が海老らしく立派になります。少し年老いた私と、海老の衣にフツと笑いが生れた。作者の感性が光ります。

回り道した分人がよく見える

藤解 静風

回り道、脇道……この句想は今までもありましたが、人間を長くやつているといういろの経験が五体にしみ込んでいます。

畳の上で転んだことは内緒です

西出 楓楽

私ももうそんな年。段差のない畳で、というのがこの句のミソ。私の胸に畳んで内緒、内緒、しらん顔して他人の転んだ話を聞いています。

もう少し生きねば帳尻が合わぬ

神夏磯 典子

若い時から給料天引きという術で納められた税金、保険、何処かで誰かが甘い汁を吸っていた話も耳にする。平均年齢、いや、それではまだ私の勘定は合いません。うん、食養生、体操、がんばらなくちゃ。

寄りかからないでわたしは頼らない

鴨谷 瑠美子

昔から頼りにされるのは男。寄りかかるのは女と相場が決っていたんだが、濡れ落葉に代表される老いの男性像が定着、と思いきやおとどっこい、そうはいきませんよ。今更寄りかかれては私の立つ瀬がおへん、かわき女性の外へ向って翔んで行きます。

あかあかと無事が炎えるる茜空

都倉 求芽

無事が炎える。一日の感謝がこんなに美しく表現出来る川柳って、すばらしい事です。塾へ通って空を見ない子供や、夕映えに足を止めない一部の若者達に、この感動が還って来たら、きつと明るい明日が還って来るでしょう。

変声期嘘も上手になりました

平田 実男

声変わりという成長期の一つの節、大人の世界を「嘘」の一字で表現したあたり、作者の感性躍如と言うところです。

川柳雑誌社、篠山支部に入門したのが昭和三十年。昨秋句報六百号を発行して丁度五十年の歴史を積み重ねて来た。思えば遠く来たものです。紆余曲折を重ねながらも、文化の火は決して消えないものだという自信と誇りを持つことが出来たのはありがたい事です。

五十年前の農村は食料増産一筋の時代。周りには趣味という世界は存在しませんでした。ふと、川柳との出会い、そこに山があったから山に登った、思いです。そして川雑の大先輩の句を読むにつれ、すっかり目から鱗が落ちる思い——それは感動の世界でした。

私の川柳は多読の専作です。その多読も年と共に危うい状態です。ここに二千句に及ぶ同人の力作。じっくり味わいながら、初心に返っての感動を味あわせていただきました。

私の鑑賞文は「うまい！」で言い尽せます。たくさんさんの秀句と一緒に鑑賞したいのですが、私の思いを私の言葉で、という個性句。そして底に流れる「笑い」を大切にさせていただきます。

母が居る以外なんにもない田舎

大川 桃花

飽食の時代になると田舎の魅力はきれいな空と空気だけ。それでも母が達者なうちは子供を連れて時どき訪れもするもの、過疎がすすむふる里もだんだん遠くなりませう。「なんにもない」が胸に滲みます。

負けながら人は大きくなつていく

加島 由一

人生は勝つために生きる。誰もがそう折つていけるんだがみんなが勝者ばかりとはいかない。人間の大きさは勝者よりも敗者かも知れない。そんな人生の深さを教えてくれる斬新な着想が光ります。

世間からけむたがられるほどまとも

安 達 忠 央

何処にもそんな人が居るんだなあと、妙に安心させてくれる句。きつと昔の優等生だったのでしょうか。

悪友に会つて元気をもろてくる

中川 楓

昔は戦友という生死を共にした奴がいてくれた。いまは横道で出会つた悪友という名の心友がいる。一番頼りになる心おきない男の世界である。一緒に泣いてもくれるし、どなりつけてもくれる。「もろてくる」がいい。

責任を果たしたように菊くずれ

西口 いわゑ

花の散り様はいろいろあつて面白い。一枚一枚風に舞う花びらもあれば椿のようにポトリと専もろとも落ちるものもある。菊の花は散りもせず、落ちるでもなく、手でさわるとポサツとくずれる。「くずれる」がピタツと決まつて作者の目の鋭さが光る。

人並みという一線が難しい

牛尾 緑 良

考えた揚げ句考えないことに

三宅 保 州

両者、句の背景は違ふかも知れないが、深く考えないで、まあ、その辺で、というその辺の呼吸が両者とも面白い。身近かなくらしの中にその辺でこなしに行く知恵がある。若い時は若いですまされることも、いい年をしてそうはゆかない。身につまされます。

現実を迎えも来ない雨宿り

加藤 茶 人

靴を磨いてくれたのも、一本つけて夕飯を待つてくれたのも、今はなつかしい一年ほどの愛でした。雨の待合室の窓越しに天を眺めている目には、迎え傘の妻の笑顔が昨日のように浮かんで来るのでしょうか。現実を蔽いしことに作者も納得してようです。

ゆつくりと姑のレンジで豆を煮る

山下 節子

お料理には自信があつて二世帯の食事も平和です。豆だけはチンとはいかない。ゆつくりと軟かく煮るには昔の知恵を借るのが一番。気配りも美事なキツチンの知恵です。笑つたため食後きれいに歯をみがく

太田 幸 枝

笑つたため歯を磨くとは知りませんでした。きれいな歯でにつこりの笑顔が目には浮かびます。意表を突いた心遣い。いくつになつてもこんな素敵な笑顔でいてほしい。

燃える燃えろと言われても困る歳

佐藤 治 代

何処も同じ高齢化社会。地域の活性化のために高齢者の参加が多方面に要請されます。若い人に負けじと、みんな張り切つていますが、体がついて来てくれなれません。時々は見せぬと錆びる隠し芸

時々は見せぬと錆びる隠し芸

高瀬 霜 石

青信号だけです恋の交差点

鶴田 遠 野

傘寿から口ーカル線に切り換える

中塚 礎 石

空っぽの財布時どき振つてみる

下田 茂 登子

本社 三月旬会

三月七日(月)午後一時
アウイーナ大 阪

たかつガーデンから、アウイーナに戻り、三月旬会は123名の参加で開催された。

お話は城北川柳会の吉岡修氏。某家電メーカー退職後、久しぶりに訪れた会社の作業の変化ぶりを楽しく語った。

まず全作業を一人で受持つ、セル生産方式なるもの。今では国内需要の七割を占める蛍光灯、その形も耐久時間もさまざまに改善を重ね、六千時間から一万二千時間にまで進歩しているという。

防犯センサー器具から、遊び心の器具まで期待は大きい。配られたパンフの中から、川柳人の目で「灯」に関する、ステキで且つ感銘を受けたキャッチコピーをいくつか抜粋して述べ、あつという間に30分が過ぎた。

初出席は城東区の小泉敏子さん、西宮市の本田律子さん。
(扶美代記)
月間賞は太田扶美代さん(藤井寺市)に輝く。

(司会)朝子(記名)月子・義
(受付)朋月・舞夢(清記)義

席題「ほとけ」

山本 三郎選

円空のほとけと出会う旅
雪ぶとんかぶり野ほとけ眠ってる
百歳で仏に直し線を引く
ホツとしてほとけに合掌今日とじる
過去帖を開いて父や母のこと
ほとけには悪いが先に酒にする
皆忘れほとけになったお母さん
野仏の雪払いつつ遍路旅
仏さま春ですどうぞさくら餅
一合の酒でほとけになつてくる
背く子のほとけころを信じ切る
一徹を曲げぬ親父のほとけ面
仏さん味方につけて母強し
浄土から年忌指図の新仏
野ほとけと会話ははずむ里の春
お仏飯供えるための米を研ぐ
ほとけ様その後もちろんと食べてます
成仏が出来ぬのもう泣くやめ
雷親父ほとけとなった認知症
野仏の笑みに重なる亡母の顔
ほとけにも夜叉にもなつて子を育て
初節句ほとけ様にも見てもらう
団交にほとけの役も一人連れ
仏壇の鐘をならしてカルチャーへ
美しい仏になつて逝きますね
仏にも鬼にもなれず凡夫然

美 明
一 風
シマ子
れんげ
能 子
求 芽
菜 月
理 恵
俣 子
笛 生
茜
柳 弘
たもつ
東 吉
寿 子
柳 伸
文
ルイ子
律 子
洋
欣 子
一 步
ますみ
森 子
和 夫

大仏を見上げ中指真似ている
鬼がいてほとけもおつて回る独楽
心無にして仏の声を聴く座禅
ほとけ様黙ってぐちを聞いてくれ
仏にも鬼にもなれる時がある
仏にも蛇にもなりませす母の愛
住
ほとけさま春が来ました豆ご飯
野仏に一白玉と野の花と
子を諭す母は鬼にも仏にも
野ほとけの雪まだとけぬ寒もどり
児に返る姑に仏を垣間見る
人
野ほとけも歩きたかろう春の風
地
仏にも鬼にもなつて子を育て
天
ほとけさま初物ですよ路の臺
軸
神仏に願いいっぱい書いた絵馬

正 雄
重 人
七ツ子
美智子
舞 夢
なぎさ
美代子
千 代
千 洋
千 里
潤 子
希久子
さくら
泰 子
ルイ子
美 明
萬 的
ダン吉
ひさ乃
重 人
舞 夢

兼題「何」

鴨谷瑠美子選

何と言えは心通じるのだろうか
それだけはいくらかでも他人の花
人類悲し地球の何処かでする戦さ
核までも作るヒト科は何ですか
女三人何と見事な旅プラン
なんでもやろまだ帰らない胸さわぎ
何ですか早く言つてよ焦れたい

ルイ子
美 明
萬 的
ダン吉
ひさ乃
重 人
舞 夢

ジュエリーショー何にも欲しいものがない
 咳払いしてさて何の合図だろう
 何となくぶつさら棒が憎めない
 何ことも過ぎてしまえば小さいこと
 花だより何はともあれ玉子焼
 何食わぬ顔で潮時読んでいる
 金貸してからは音沙汰何もない
 財産がないから何も恐くない
 何もかもきれいにしたい手を洗う
 何しても賞める他人の無責任
 何ごととも神の試練と受け止める
 何はさておき上等の下着買う
 何事も起らず夜道送られる
 何もかも気にしなくなり軽くなる
 何もかも捨てて結んだ紅い糸
 何何とすぐに聞きたい耳がある
 三浪目何が何でもパスしたい
 何もないけどポケットに夢がある
 何気ない言葉が人を傷つける
 君といるだけで何にも欲しくない
 何ごととも酒の肴にして仲間
 何もかもとんとん拍子怖くなる
 ホワットアーユー新鮮でした初英語
 何げない仕種で痛いところ突かれ
 はみ出した答えこの子は物になる

佳

アキ 扶美代
 深雪 能子
 義子 集一
 尚士 朋月
 理恵 美恵
 寿美 文
 (伏)五月 忠子
 朝子 房子
 舞夢 集一
 三郎 たもつ
 和夫 紀乃
 淳司 英子
 一風

何となくおセンチになる春の宵
 何もかも打ち明けられてうろたえる
 人
 残すもの何も無いぞと父威張る
 地
 何よりも命の重さ教え込む
 天
 何食わぬ顔で心を盗まれる
 軸
 春のベン何もなかったふたりの名
 兼題「仰ぐ」 松原 壽子選

美代子 梓
 淳司 庸佑
 鐘造 鐘造
 梓 梓
 たもつ さくら
 楓 楓
 典子 和夫
 紀乃 賢子
 扶美代 耕治
 朱夏 希久子
 柳弘 楓楽
 正坊 美代子
 潤子

真つ青な空を仰いでいる無口
 父の樹の高さ越えたい竹とんぼ
 木の枝舎仰ぐと回る走馬灯
 なんぼ空見ててもなにも落ちてこず
 夕焼け空仰いで今日もありがとう
 平和っていいなしみじみ月仰ぐ
 お姿を仰いだ皇居前広場
 君仰ぐ香しきかな紋白蝶
 仰いでドーム応える空がない
 星条旗仰ぎ真面目になる総理
 仲良しの二人で仰ぐ虹の橋
 ホスピスの窓から仰ぐ青い空
 栄転の離陸へ仰ぐ蒼い空
 富士仰ぎ心の霧が消えている
 痛恨の一打思わず天仰ぐ
 佳
 天仰ぐ一字連いのジャンボくじ
 石段を仰いで神に試される
 空仰ぎ男は涙こぼさない
 日の丸を仰ぐ気持に嘘はない
 先輩と仰ぐ味方が寄ってくる
 人
 さだめに勝てず天を仰いでいる吐息
 地
 幸せそうに天を仰いでいる新芽
 天
 涙拭き仰げば青い天がある
 軸
 崩してはならぬ心の塔仰ぐ
 鐘造 寿美 富美子 月子 朝子 保州 典子 くらり 英子 朝子 雅文 庸佑 天笑 富美子 昭子 なぎさ 篤子 希久子 洋 賢子

兼題「慕う」

池

森子選

九条を慕う地獄を見た日から
 大空のような器で慕われる
 慕情いま凍つたままで春を待つ
 お慕いをしておりますとストーカー
 ロボットがお慕いしてるふりをする
 雲海をあのお世の人と飛ぶ慕情
 慕われの貧乏神が離れない
 天折の母の日記を読み返す
 生年月日覚えています片想い
 慕情まだ心の森で焼く恋虫
 千の思慕抱いて身を灼く恋虫
 青い思慕温めつつける校員
 激しさを慕って鬼を困む会
 千羽鶴言ううとなく折り上げる
 サイフォンの雫に慕情聞かせてる
 猫抱けば思慕つららせる冬の星
 好きですと言えずあなたについて行く
 赤いバラ遠い慕情の風に揺れ
 距離おいて慕う火種は消さずおく
 思慕一つ祭太鼓が鳴りひびく
 慕われていてと錯覚させたバラ
 佐助を一輪差して待つている
 少年のぶつきらばうが亡父を恋う
 自分史に自己陶酔の思慕ひとつ
 雪の夜はかな国母のこと
 落ち椿慕う女の形して
 慕われて薔薇はますます赤くなる

ダン吉 昭子 みつ子 昭 見清 文 ますみ 深雪 集一 鐘造 直樹 なぎさ 五月 一風 セツ子 洋 寿子 典子 利昭 アキ 柳弘 ダン吉 いわゑ たもつ

十字路のポストを慕う詩人たち
 焼香の長さよならまだ言えぬ
 近づけば傷つく青いバラの恋
 透明な気持を君が占めてゆく
 暗いのですただ一条の灯を慕う

佳

黒髪をばつさり落す思慕もある
 亡父恋の庭木一本ずつ枯れる
 白いばら慕い続けて火の彩に
 極限の思慕死んでやる死んでやる
 歳月をゆるりと解く母の思慕

人

慕って慕って大蛇になるだろう

地

慕われているとも知らぬ胡蝶蘭

天

慕うほど重なる本の一頁

軸

三月の風は慕情を掻き立てる

兼題「まさか」

春城武庫坊選

握手してまさか泥舟乗せるとは
 犯犯を説くおまわりが空き巢犯
 少女期のわが家まさかの左前
 味方から裏切り出ると思わない
 フジテレビまさかまさかを考える
 非常食まさかが来ないこと祈る
 そのまさかなんですあなた逃げないで
 まさかのために財布はいつも小銭だけ

義子 雅文 希久子 修 扶美代 いわゑ 冬葉 柳弘 典子 雅文 とし子 照子 雅明 満州 千里 利昭 集一 修 美明

地震予知余命内ではまさかまさか
 劇的なシーンまさかのめぐり合い
 人生にまさかがあつて面白い
 パトカーに道を聞かれたことがある
 核の事故もうまさかとは言えないね
 旧姓に戻りましたと古稀の女
 まさかをおとす保険屋のコマーシャル
 口下手がまさかに賭けたプロポーズ
 世界一の億万長者が逮捕とは
 ベビーシッターのまさかカメラ隠し撮り
 隠れ蓑まさかの時へ用意する
 再検査まさかまさかが駈け巡る
 まさかからまたかになる震度七
 突然のまさかの用意まだである
 雛祭り姫官女にもひげがはえ
 九回の裏に井川がサヨナラ打
 へー！まさか孫が東大受かるとは
 まさかまさか米寿と傘寿の再々婚
 真夜中に妻が打つてる五寸釘
 嘘抱いてまさかの時は貝になる
 生明立ってコロンプスのまさか
 自分史にまさかまさかがつづくなり
 妻だけがまさかの時の命綱
 毎日をまさかまさかで生きている

佳

和夫 寿子 たもつ 保州 ダン吉 五月 俣子 鐘造 シマ子 俣子 きらり 理恵 能子 蕉子 則彦 寿々子 倫子 朋月 楓楽 柳弘 天笑 光久 梓 保州 ひさ乃 富子 洋

優勝のまさかの裏にある苦勞

人

九条へまさかまさかの風が吹く

地

老いてまでもしとまさかがせめぎ合う

天

これからのうれしいまさか待っている

軸

何回もまさかに逢うた我が人生

兼題「人間」

河内 天笑選

たとと恥かいて人間強くなり

さくら

人間の脆さを包むアテランス

柳弘

人間がだんだん笑わなくなった

千代

人間に生まれたんです笑いましょ

(矢)五月

人間をあかしたときどき不眠症

耕治

人間を育てることのむづかしさ

富美

腰痛に耐えよ人間なんだから

蕉子

傷ついて悩んで深い人間味

希久子

あつさりど詫びる人間でかく見え

一風

がむしやらになって人間忘れそう

梓

東吉

朝子

比ろ志

千代

千代

柳弘

千代

五月

耕治

富美

蕉子

希久子

一風

梓

朝子

萬的

シマ子

耕治

潤子

さくら

直樹

笛生

人が好き裏切られても人が好き

ユ一モアを食べ人間の貌になる

ああ詩人花や鳥へも恋ころ

人間を見ると逃げだすランドセル

働いて食べて寝てます真人間

人間の知恵にだんだん病む地球

人間に数々恨み持つ地球

人間を計る物差し歪んで

騙されてから人間が好きになり

人間のどこを切っても生臭い

人間でよかつた牛井食べられる

人間を鼻であしらう電子音

人間に疲れて被る鬼の面

許されて許して人間を磨く

人間が居るからくぐる縄のれん

佳

人間の都合で曲がれない胡瓜

人間が好きで担いでいる御輿

へそ曲つてるので人間だとわかり

人間に生れただけで丸もうたけ

人間にだけ許された嘘をつき

百均でひよつこり人間に出会う

笑い皺人間だけの宝物

天

人間を丸出して泣いている

軸

人間は何と哀しい生きものか

朋月

たず子

文

セツ子

庸佑

欣子

萬的

求芽

潤子

美明

森子

英子

富子

鐘造

富美子

直樹

洋

富美子

楓度

俣子

アキ

千恵子

野村太茂津幸寿記念川柳大会

本年4月、野村太茂津先生が幸寿を迎えられます。

「長寿をお祝いする」とともに、長年の川柳活動に感謝し、皆様のご賛同を得て左記大会を開催することとしました。ご参加をお待ちします。

日時 4月10日(日)

開場 午前11時 開会 午後1時

会場 JA会館(丁和歌山駅前)

出句 各題2句(欠席投句拝辞)

兼題「役」とらふす川柳会 辻 スミ選

祝辞 川柳塔社主幹 河内 天笑氏

「癖」三幸川柳教室 木本 朱夏選

「天狗」番傘川柳本社 森中恵美子選

「播く」川柳塔社 西出 楓楽選

「大らか」川柳塔わかやま塔社 牛尾 緑良選

会費 2000円(軽食・発表誌呈)

お問い合わせ 牛尾緑良 電話073-462855

主催 川柳塔わかやま吟社

予告

第十一回 川柳塔まつり

平成十七年十月十日(月・祝)

秀句鑑賞

—3月号から

岸本宏章

ヒヨイヒヨイと娘が嫁に行ってもた

横山捷也

娘を嫁に出す寂しい気持ちと、親としての喜びが伝わってきます。嫁がれた娘さんはきつと大恋愛の末の、ゴールインだったんでしよ。うね。

生きている音さわやかに庭を掃く

大久保伸子

落ち着いた気分で庭を掃いている。箒の音だけが耳に伝わる贅沢なひとときこそ、騒々しい日々の中で貴重な時間だと思えます。

白髪染め嫌いですかとまた聞かれ

根岸方子

行きつけの美容院が「白髪染めしてみませんか、とてもお似合いだと思えます」などと勧めることもあるでしょう。しかし、親から貰った自然の髪が一番だと確信されているのでしよ。私も同感です。

人伝に聞いて嬉しい誉め言葉

俣野登志子

直接誉められると半分はお世辞に聞こえることもありますが、人伝の場合は真意が伝わってくるので嬉しさが倍になります。

キッチンに娘の愚痴も聞いてやり

菅田かつ子

キッチンの娘が口をバクバクさせていると何かを訴えているように思えます。暫く最期の愚痴を聞いてやるのも情けでしよ。

あと五年百歳までの道過か

飯土井健翁

九十五歳で頑張っていらつしやることに頭が下がります。百歳は通過点としてますますのご活躍をお祈りします。

軸足を変えて世渡り楽にする

大西文次

目の高さを少し変えただけでも視野が広がる必要があります。既成概念を取っ払うことも必要でしよ。

気を回しお世話したのに疎まれる

奥時雄

折角お世話をして必ず感謝されるものとは限りません。また結果が良くて当たり前と思われがちです。他人のお世話をするということは難しいものです。

筆跡に勢いが乗る新春だより

吉田幸子

力感あふれる毛筆の新春便りは受け取った方にも元気が伝わってきます。

考える事も似てきた老夫婦

若松雅枝

仲の良い夫婦は考えることも似てくるようになると思います。ほほえましいお二人の会話が聞こえてくるようです。

老化など今年の予定表にない

猪森スミエ

予定表書いてときめくカレンダー

小栢こずえ

カレンダーにぎつしり行事予定を記入しているが、どれも若返りとか健康増進のものばかりで、老化は他人様のことです。

じわじわと手抜ききの過去が攻めてくる

堀正和

手抜きをすれば必ず自分に返ってきます。問題を先送りした過去が悔やまれます。

暦はく老いの我が身をはぐように

矢谷富士野

最近暦を剥ぐのが怖くなるほど、月日の経つのが早くなったように感じます。一日一日を大事に過ごし、充実した人生にしたいものです。

第29回 全日本川柳2005年広島大会

日時 平成十七年六月十二日(日) 午前十時開場
会場 広島郵便貯金ホール(大ホール)
〒730-0800 広島市中区白鳥北町一九一

交通機関 JR広島駅から車で10分・バスで15分
TEL 〇八二(二二三) 六三六七

宿題 第一部(事前投句、四月十五日締切)

「六十」三浦 宏選 「親しい」久保田半蔵門選
「魔法」石田 一郎選 「廊下」早川 双鳥選

ジュニア部門(小・中学生)

「光る」江畑 哲男選 「魔法」鈴木 泰舟選
「廊下」奥田みつ子選

2×16cmの句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記、

投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛郵送のこと。

ジュニア部門は投句料無料
〒730-0800 大阪市北区天神橋二丁目北一ー一
ステッブイン南森町九〇五

投句先 (社)全日本川柳協会 宛
TEL 〇六(六三五二) 二二二二 FAX 〇六(六三五二) 二四三三

宿題 第二部(当日投句、十一時二十分締切)
郵便振替口座 〇〇九七〇一九一三五七七

「世界」田中八州志選 「事件」大場 可公選
「貝」高梨 宗路選

第二次選者 磯野いさむ・泉 比呂史・藤沢 岳豊
成田 孤舟・佐藤 良子

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)

表彰 (1)文部科学大臣奨励賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞
大会賞 (4)ジュニア部門は賞状とメダルを予定

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳広島大会実行委員長 定本 広文

△表彰式典・前夜祭ご案内▽

◎表彰式典 平成十七年六月十一日(日) 午後六時
(功労者・平成柳多留入賞者・大会十年連続出席者)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場に於いて

会場 リーガロイヤルホテル広島(4F・ロイヤルホール)
〒730-0800 広島市中区基町六一七八

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
TEL 〇八二(五〇二) 一一一一

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
TEL 〇八二(五〇二) 一一一一

大会・前夜祭のお問い合わせ先
〒730-0800 東広島市西条町御園字六四七七一 白井孝司方
日川協広島大会事務局 宛 TEL FAX 〇八二(四二三) 六六六六

大会・前夜祭参加費の送金先 四月十五日締切
郵便振替口座番号 〇一三七〇一三一八二八八八
(会計担当) 弘兼 秀子 TEL FAX 〇八二(七五二) 七六一一

△宿泊・観光ご案内▽

宿泊 リーガロイヤルホテル広島・広島全日空ホテル・ドリーミン広島他
宿泊料金・泊朝食付・税込み 一四、〇〇〇〜八、五〇〇円

観光 二つの世界遺産を訪ねる(安芸の宮島・平和公園半日観光)
六月十一日(日) 十二時〜十七時 六、〇〇〇円
(各自昼食を済ませてご参加下さい。)

JR広島駅「新幹線口(北口)」十一時四十五分集合
申し込み三十五名以下の場合中止または、料金変更にて実施します。

宿泊・観光の申し込みは、別紙(ハガキ)申込書に記入し、ご送付下さい。
四月十五日必着です。

四月下旬に、担当旅行社より予約の受付確認書・振込依頼書が送付されますので、確認の上、ご入金下さい。入金確認後、宿泊確認書が送付されます。

宿泊・観光の問い合わせ先

(株)ジェイティービー 広島支店 担当者・龍門 康剛
TEL 〇八二(五四二) 五〇一五 FAX 〇八二(二四一) 四九三三

第20回 国民文化祭
ふくい2005

川 柳 作品募集要項

～実りゆたかに 出会い ふれあい～

一、応募受付期間 応募受付期間 平成十七年四月一日(金)～六月三十日(木) (当日消印有効)
二、応募規定

(1) 作品 一人各題二句詠(未発表作品に限る)

(2) 応募料 一人につき一、〇〇〇円(但し、海外投稿者及び小・中・高校生は無料とします。)

(3) 応募方法 福井県実行委員会作成の「作品募集要項」をご覧ください。所定の応募用紙を使用してご応募ください。

(4) 応募先 〒919-0592 福井県坂井郡坂井町下新庄一― 第20回国民文化祭坂井町実行委員会事務局へ郵送

三、宿題・選者(事前投句) 高校生・一般の部

握手Ⅱ墨崎 洋介(福井) メガネⅡ小松原爽介(兵庫) 着るⅡ永石 珠子(長崎) 温泉Ⅱ大木俊秀(神奈川)

(事前投句) 小・中学生の部

握手Ⅱ熊谷 岳朗(岩手) メガネⅡ川路 泰山(静岡) 恐竜Ⅱ井原みつ子(愛媛)

(当日投句)

たくましいⅡ齋藤 大雄(北海道) 恐竜Ⅱ菅原孝之助(新潟) 電気Ⅱ梶川雄次郎(大阪)

第二次選者

今川乱魚(千葉) 大野風柳(新潟) 河内天笑(大阪) 西來みわ(東京) 森中恵美子(大阪)

四、賞(予定) 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・福井県知事賞・第20回国民文化祭福井県実行委員会会長賞
福井県教育委員会賞・坂井町長賞・第20回国民文化祭坂井町実行委員会会長賞・坂井町教育委員会賞・(社)全日本川柳協

会会長賞・福井県川柳作家連盟会長賞

五、発表会場 川柳大会(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)
平成十七年十月二十九日(土) 10時30分～15時40分(予定) 坂井中学校体育館

合同大会(上位賞表彰、記念講演会)

平成十七年十月三十日(日) 10時～12時 敦賀市民文化センター

入選作品は、「作品集」として発刊し、応募された方(小・中・高校生は入賞者に無料配布します)。

六、問い合わせ先と募集要項の依頼先

〒919-0592 福井県坂井郡坂井町下新庄一― 第20回国民文化祭坂井町実行委員会事務局宛

TEL 〇七七六―六七―七五〇七 FAX 〇七七六―六六一―四八三七

七、主催者

文化庁・福井県・福井県教育委員会・坂井町・坂井町教育委員会・(社)全日本川柳協会・福井県川柳作家連盟

第20回国民文化祭福井県実行委員会・第20回国民文化祭坂井町実行委員会

ろくせめ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳さんだ（前月分） 北野

哲男報

柔らかな声でやんわりいけずされ
 柔らかい頭も金で固くなる
 満月の露天風呂が好きです五七五
 ダイエットすすめる医者は太鼓腹
 初物は生神様が毒見する
 頂上で吸った酸素が日本一
 雪掻きへひと汗かいて初仕事
 偽札は使つてません初詣で
 ストープを点けて論じる温暖化
 十年の時は長くて短くて
 いい汗をかこう風邪には卵酒
 何になる卵かランドセル光る

房江 忠 雅司 一之 順子 開子 正和 朋月 藤朗 婦美子 章子 哲男

ロース川柳会（前月分） 山崎

君子報

粒選りの嫁を迎えて小さく居る
 禅寺で正座無心になった時の音
 ざくろバックリ命みなぎる粒の艶
 寒いから春を探しに散歩靴
 マイペース自分の歩幅確かめて

てる キク子 みつ子 哲子 トミエ

天然の音は切り捨てイヤホーン
 玄関前帰る靴音慎重に
 想い出を手繰る雨音聞きながら
 大粒の涙武器にはもうならぬ
 昭和生き抜き戦後六十年ようきたな
 洗いざらしのことはば愛を確かめる
 三叉路は亡母の鈴鳴る方へ行く
 となりの子笑顔にそえるごはん粒

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

鶏に感謝わすれて卵食う
 酉年の星うらないへ安堵した
 酉年に余力出さざる螺子を巻く
 風見鶏伯耆の空を見て暮す
 申去つて高く飛ばたく夢の酉
 鶏と一緒に起きたのはむかし
 こだわりの鶏卵もため放し飼ひ
 酉年へ羽撃く夢がある若さ
 東天紅鳴き声のぶ耳の奥
 酉年へ翔んでみる気の元氣もつ
 天空の星に翔びたい酉もいる

鈴枝 和代 久子 智恵子 公美枝 豊枝 弘子 静江 信雄 正光 雄々

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

少年に戻り昨日の虹探す
 探し物忘れた頃に顔を出し
 一葉を探しに古書店に入る
 電話帳振り込めサギが探すカモ
 釘を打つことだけ習う三年目
 息継ぎを習つてからの生き上手

信治 敏子 太郎 一志 和子 美弥子

汗かかぬことも習つて芸の道
 自分史に自己陶醉の一ページ
 空白のページが笑う日記帳
 恋破れ冬のページになる日記
 日記帳いつまでたつても一ページ
 一言で済むのに長い説教だ
 一言がぐさり凶器となる修羅場
 一言の重さ茶漬が冷えてくる
 ユニセフに人間愛の虹を架け
 ポケットの穴から愛が逃げていく
 地獄まで愛と落ちよう炎の女
 挫折した愛を樹海でひとり吐く

城北川柳会

吉岡

泥水をいっばい飲んでいる仮面
 オーバーに泣いて甘える孫に負け
 減らず口たたく大きな虫と住む
 思ひ出を刻みカレンダー最終日
 大晦日籤に期待が大きすぎ
 信貴山にお詣り出来て福願う
 思ひ出を封じた箱を開けたい日
 不可能を可能にさせる母の指
 一人でもやはり楽しいお正月
 前向きに花も咲かせる実も付ける
 スタートの夢を心に持っている
 山盛りのお夢を心に持っている
 答どう出ようか今日の米洗う
 太陽と笑顔で話す南窓
 山坂をいくつ越すやら子の前途

ばっは 柳弘 シマ子 克己 章久 湖風 朝子 雅文 度 雅文 とみを あや子 愛論 修報 重人 あき子 雅明 八重 容子 美代子 鈴子 あやめ 美智子 タカ子 喜美子 集一 ひさ乃 一枝 志華子

顔なじみ勢ぞろいした初句会

スタートで握り拳の人を飲む

つますいてばかり前途が気にかかる

八起き目に手を貸す妻がいとおい

愛情が山盛り亡母の宅急便

お手盛りの給与の中へ天下り

祝著妻の名前が何故にない

早鐘を打つスタートのヨイイドン

ハッピーな軒迷惑しています

スタートへ腹こしらえも怠らず

生きたとは苦勞も楽もてんこ盛り

人生の差引ゼロが難しい

一日のハッピーエンドは温い夜具

年金の暮らし考えればハッピー

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

さほどでもないのに気にするから目立つ

目立つのが私の役目ブチトマト

隅っこに居るが美人でよく目立つ

肩書きは目立つが家じゃ粗太こみ

軽さばかり目立つ男の見せた意地

薄化粧それでも私まだ目立つ

真夜中はいつも閻魔と将棋さす

二十五時前頭葉が芽えてくる

手品師の鳩も真夜中だけ眠る

真夜中の寒月仮設日く照る

この時世何でもかめへん仕事なら

かめへんねん主人晩まで帰らん

かめへんとつられて食べたぶぐの肝

正

静枝

達子

はじめ

倫子

史風

春蘭

高栄

とし子

千里

典子

順三

公一

求芽

典子

照子

義一

スミ子

尚士

きよし

千孝子

昭

高栄

佳一

祐人

祐作

かめへんで一億までなら貸してやる

旅の風呂たれも居ないしかめへんで

ワンステップ上を目指した広辞苑

ステップアップしてます古稀の登り坂

ランク下げて次のステップ考える

つますきを越えたら三歩歩いてた

ステップの合わない妻に引つ張られ

躓いた石が大きなステップに

独り芝居のステップを踏むカタツムリ

八十半ば心にメークして生きる

嘘でいいハッピーな顔して暮す

抜け道は無いでも無いと水向ける

青春のページをめくると友と会う

空くじの葉はたんとうちにある

浮草に似た人生もええやんか

いいニュースだけの新聞買いにゆく

リハーサルでしたと自分史に書く

竹原川柳会

時広 一路報

みんないい瞳だ砂あそび水あそび

すなの上じてん車こいでこけました

砂漠にチクタクチクタク刻む春

青春のかけら拾いに来た砂丘

砂の丘風を両手に抱いて立つ

砂漠化に青い地球が泣いている

砂山を二つだけ盛る母におく

砂浜へ愛を山ほど盛っておく

砂時計一分もある一年もある

砂時計ながめて宇宙のこと想う

治三郎

美義

美籠

宏章

萬的

宵草

比ろ志

活恵

晴美

とし子

あやめ

庸佑

稲子

孝一

諷云児

秀夫

半蔵門

蘭幸

幸菜

房子

菁居

敬子

正宏

半覚

寿枝

幸子

比呂子

佳句地十選 (3月号から)

穴吹 尚士

無印だけれど光っている男

かしわ手で拝みたくなる妻といる

どっこいしょ口ではのうて腰が言う

アングルを変えればあなたお人好し

初夢の妻にお酒で叱られる

山古志を思えば私福だらけ

甲斐のない化粧に時間かけている

どの神もいくさの好きな信者もつ

今はもう黙って妻を奉る

一円のままで一円光っている

感動は空の上から見た砂漠

あなたとの思い出心のアルバムに

雪が舞う清い心になれそうだ

松飾り初に雀が御挨拶

松に雪心を春にくれる

行雲流水松葉が一つ落ちている

老松に御先祖様の嘶聴く

背くらへ松竹梅の松であれ

文学を語りたくなる松並木

千代の松悩んだ末の姿なり

太極拳の形が松が伸びている

天仰く三鈴の松に棲む仏

鳥たちと共に羽はたく二〇〇五年

平和へのまごころ千羽鶴を折る

空をとびつばめのように旅したい

正坊

昭二

章久

とし子

朋月

正子

六点

樓世

玲子

三津子

慶子

千枝

史子

輝恵

栄恵

太虚

淑子

笑子

汎美

不朽

厚力

孝枝

厚枝

節夫

菜歩

風を読みたちまち空の鳥となる
 万 年
 もう飛べぬ鳥でも燃えるものを抱く
 貞 子
 鳥のように飛べたら君に逢いにゆく
 臣 子
 溺愛をされて翔べない鳥になる
 静 風
 自由謳歌鳥の地図には道が無い
 一 路

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

七人の敵にネクタイ締め直し
 好 栄
 ゆつくりとなさいとお茶を入れ替える
 伸 子
 ネクタイは男の汗を知っている
 はるみ
 国会の椅子でネクタイ睡眠中
 か つ 子
 人生のやいばを潜った自信です
 聖 子
 夢があるつぼみのままで終れない
 恵美子
 あの風を押しかえそうとした誤算
 博 利
 ネクタイの滲みに秘めたエピソード
 清 泉

岸和田川柳会 原 さよ子報

八百長が武士の情けか石で揉め
 岩 夫
 八百長を仕組んで笑うこわい顔
 香 代
 損得と八百長絡むテレビ局
 仁 緑
 五十年見合い写真もセピア色
 房 枝
 お見合いも割り勘にしてケセラセラ
 東 吉
 見合いました子より気が合う母同士
 古希迎え益々好きな黄門さん
 ふみよ
 お見合いに仮面をつけているふたり
 みよ子
 見合いぬき一足とびに世帯持つ
 あい子
 見合ひして返事の前にまた見合ひ
 幸 子
 見合ひして振られて振った顔をす
 力 子
 料理だけ美味かったと言う見合ひ
 ゆり子

忠告を無益と蹴った若かった
 一 洋
 酒入り無益な議論まだ続く
 蛙 城
 ダイエット食べては無益くり返し
 珠 子
 徹夜した作句も水の泡となる
 和 美
 孫に負け和む正月かるたとり
 植 代
 無益でもやむにやまれぬお節介
 寿 海
 今日もまた新芽に寄せる高望み
 弘 子
 こぼれ種芽を出すチャンスどつと待つ
 守

災害に耐えて芽吹いた雪椿
 笑 司
 災害地ようやく春が柳の芽
 錬 太
 仏さんの好物だった木の芽和え
 ゆ い
 いつか芽を吹くと信じて母は待つ
 さよ子
 顔ぶれの豪華さ券を申込み
 甚 一
 申込み忘れ頃にくる返事
 ダン吉
 申込み受けよう明日に賭けてみる
 狸 村
 カルチャーが泣き笑いする申込み
 呂 万
 好きですと言つて愛の芽伸ばしてる

尼崎尾浜川柳会 山田 耕治報

絵手紙の筆に情けを語らせる
 晴 美
 ネエあんた言われて今は粗大ゴミ
 五 月
 風の吹くままに委ねている余生
 朋 月
 ジンクスを無視した今日の胸さわぎ
 亀 子
 あなたからあなたに変わらぬおじいちゃん
 ま さ
 かるやかに和歌やらし書く筆はじめ
 里 江
 小春日に誘われてきた無人駅
 カズ子
 今日もまたまくら並べてあんな待つ
 信 子
 自画像に春のときめき足す絵筆
 美代子
 鯛つけて今日はあんなの門出です
 よし子

寄せ書きにあの日の友の筆の跡
 比ろ志
 一泊の贅積み上げるカニの足
 勝 巳
 天真爛漫絵筆が躍る幼稚園
 正 治
 卒寿より力ある字の年賀状
 耕 治
 あんたはんだなたでつかと聞く親父
 きよし
 悪筆にワープロ助け船となり
 折 杭
 安物の筆で充分抽象画
 孝 一
 もてなしがチロチロ燃える冬の宿
 鹿 太
 来ないバス手摺り足摺り耐えている
 江 美
 噂まだくすぶっている火消し壺
 諷云児
 紅筆が女の魔性刺激する
 美 籠

ほたる川柳同好会 水野 黒兎報

球場へ誘う小春日オーブン戦
 柳 童
 すーとだけ白い吐息があいさつし
 憲 治
 誘われたこととして行く北新地
 黒 兎
 好演技思わず涙誘われる
 雪 子
 お誘いがありそでない日は長い
 見 清
 一城の主ですべてセルフです
 桂 子
 百獣の王は死んでも王である
 久 子
 好きな道誘いに首を振る辛さ
 禄 骨
 誘惑に負けることない空財布
 信 男
 山外後五分だが白いまま
 信 男
 お誘いにあれこれ理由つけて出る
 敵 子
 ライバルの鶏冠の赤が気にかか
 直 次
 ライオンの寝顔みてきた入園券
 春 代
 お誘いを断つている冬の蝶
 契 子
 じい誘い津波の島で母探す
 長 一
 飛車守り王はガラ空き子の将棋
 い さ む

老人に勧誘ラツシユ怪我保険

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

勝

生涯を桜のように終りたい
あせらずに一歩踏み出す心掛け
躓いた石に身のほど教えられ
煩惱を打ち消す朝の陽が昇る
取り敢えず論吉透かして確かめる
何回も見直して見るハズレクジ
地固めが崩れ出しそな倦怠期
寒風の吹く被災の人の思ふ
その技が未来を築く基となる
日向ボコ心の糸を巻き戻す
人生は一方通行戻れない
寒さにも耐え紅梅の咲き誇る
久々に訪ねる故郷の様変わり
童心に久しく還る孫の守り
初笑い天衣無縫の孫の舞

三幸川柳教室

古久保和子報

孫達の元氣な声に包まれる
お元氣へお陰さんでとこ挨拶
母が振るタクトで家族元氣です
一言のヨイショ貰って出す元氣
恋をしてグレイドアップした元氣
何もない親に貰っていた元氣
母元氣尺貫法は生きています
母さんが元氣で布団陽の匂い
待ち時間耐える元氣の医者通い

義男 孝義 起世子 八重子 靖子 公子 よし子 智三 嘉平

喜寿めざし無限の視野へ空元氣
雑学の健康法を聞きかじる
周波数合わせて元氣盛り上げる
ライバルが元氣でないおと氣にかかる
筆まめで足まめ元氣ある証拠
誕生日はあちゃん困みハイチーズ
家族写真すつばんぼんが二人いる
節目節目に残すカメラのいい笑顔
SLがまだ走ってるマアラインダー
日光写真以来カメラにまだ夢中
百葉と弁解しても飲みすぎる
聴診器よりも確かな酒の味
赤ワイン過去の恋など忘れてる
母さんを泣かし続けてきたお酒
盃を交わすと和む仲もある
彼とならまた飲みたいと思う酒
癖のある酒と釣書にかけますか
災いが転じますようクリスマス
ポインセチア燃えて聖歌がよく響く
独りには眩しいイブのルミナリエ
クリスマスには馴染めない戦中派

徑子 朱夏 保州 千秀 信子

塩壺と嫁に送ろう笑い壺
一丁目一番一号また更地
慈雨不足老人福祉罅割れる
一人でも間者が居ると負けになる

勝視 四郎 正劍 虹汀

川柳塔唐津

仁部

四郎報

モンゴル勢ジンスカンのその血筋
軽く昼今夜のうたげ会費制
ヒマワリのような妻ですよく笑う
軒下に地蔵をまつる佐賀んもん
荒海を絆確かめ漕ぐ夫婦
精一杯アンテナ延ばす蝸牛

実 蜂朗 高明 水笑 晴翠 輝夫

長柳会

村上

直樹報

被災地に善意ふくらむ世界の輪
顔に似ず気性の荒いお姫様
ふくらんでパブル弾けて後遺症
貧血にシヨパンの調べ聞かされる
ふくらます妻の頬つべは不満顔
色白と思ひこんでた貧血症

直樹 ひろし 靖博 よしお たけし 史

顔が利くといつたばかりに役まわる
 ふくらんだ腹を勞う若い夫
 童顔で老人なれどサ克蘭ボ
 十倍にふくらむ噂立ち話
 年毎にふくらむ老いの支え趣味
 顔ぶれが揃えばいづも縄のれん
 ちよんばです何とまあ間の悪い顔
 何となく希望ふくらむ春立つ日
 人生の試練に耐えた母の顔
 初音待つ奮ふくらむ庭の梅
 故郷へ顔みせに行く新幹線
 構想がふくらむラジオは深夜便
 そっくりな団子鼻です父と僕
 血の通う言葉に溶けるチョコレート
 春の庭地主顔して伸びる草
 汗かいてかいて輝く顔にする
 母と手をつなぐと同じ血の温み
 親の夢背負いふくらむランドセル
 この顔でいい飾らずに生きていく

京都塔の会

都會 求芽報

明子 武男 マサ 輝子 芳野 もこ 淳司 敬二 英美 正一 正子 和子 けい子 三和子 靖子 富美子 一慧 和代 正美

うぬぼれを黙って聞いている他人
 うぬぼれは捨てるとばかり波の音
 うぬぼれの心をたたく通り雨
 うぬぼれが一番先に来て無口
 うぬぼれも味方にリズム弾み出す
 うぬぼれの重さで垂れる星条旗
 うぬぼれが感謝に変わるお付き合い
 正直でジョークウィット話せない
 答弁は正直半分嘘半分
 正直なところ嫌いな国がある
 正直に話せば叱らないと母
 正直を表に出して肩すかし
 血糖値つまみ食いまで見破られ
 正直と嘘少し入れラブゲーム
 正直に鏡を着せような父
 正直な人と美味しい酒を飲む

川柳ささやま

遠山

可住報

正坊 萬的 百合子 和友 葉子 求芽 益子 巨詩 ますお 英旺 庸佑 輝美 満子 宏子 鹿太 則彦 惠美 純子 美智子 文子 美紗子 靖子 多美子 開子 つや子 八重子 富美

茜空両掌合わして折る癖
 三世代揃いめでたい箸袋
 青空も切つて一輪挿しておく
 万物のいのちそろそろ春の風
 故郷も雪に埋っているだらな
 雪の夜野良猫思う夜のしじま
 いちこ大福みんなきれいに化粧して
 水甕の水がガラスになっている
 冴えきつて手の切れそうな二日月
 冴えている人が早めに呆けるげな
 生かされて今が青春花盛り
 殺生や鶏冠の怒り冴えわたる
 いつの日かますます冴える花になる
 叫ぶこと忘れた男化粧する
 取り敢えず口紅ひいて出来あがり
 年老いて年寄りらしくする化粧
 八十歳になつても女紅をひく
 裏道を行くだけなのに化粧する
 化粧してお寺まいは賑やか
 化粧して時に気どつてみたくなり
 追い撃ちの被災地厚い雪化粧
 煮凝りの匂いに猫の盗み足
 約束を忘れてしまふ冴えた月
 カミソリの刃でもたじろぐ冴える脳
 千鳥足冴えた夜空に叱られる
 協奏曲隣のピアノ冴えている
 終止符を打てば頭が冴えてくる

君代 哲男 芳郎 可住 螢報 武子 くに子 はるお 石花菜 ひろ子 公子 きみ子 諷人 かつ乃 忠良 和子 汲香 房子 盛桜 喜与志 かおる 弘子 睦子 宣子 実満 菊乃 節子 みさ子

少年を繕う母の羨針

企てを固めた針が走りだす

既製甘買うから針が錆びてくる

潮風にさびぬ親父の羅針盤

百歳が駆使する魔性手も針も

待ち針をしておふくろが待っている

川柳塔きやらほく

福代

天雀報

新しい年に羽搏け千羽鶴

新しい願いをこめて初参り

七草粥で邪氣を払って商店街

一刻の重さ運命ふり分ける

被災地にも星は冷たくきらめいて

お雑煮が部分入函をひっこ抜き

また一つ正月迎え重くなる

自衛隊留守の日本が気にかかる

正月の賑わい久しく消えた町

余命表覗いてからの立ち眩み

とんど焼きあそその家も代替り

降る雪に南天の実あざやかだ

この世とは思えぬ神の仕打ちうけ

ウィルスに勝てる丈夫な鳥目指す

降る雪の春も近い濡れ帽子

めでたい日ポツケの鶴も翔ばそうね

雪にはたんうまい話はとんとない

妥協を交え昭和一粒まもりぬく

待ってたとばかり初雪舞いおちる

ナンダナンダと叫ぶ声あり大津波

年中行事無事にこなせるよう拝む

みどり

富人江

久枝

彩子

孔美子

螢

すみえ

章江

晶子

なみ

田鶴

蘭

那珂子

春枝

初枝

紫泉

天雀

雪江

亜弥

恵子

瑞枝

千春

てい子

ふみ

ゆき

寿々子

日枝子

冬に負けまい南天の実が赤い

川柳大版

高木

信醉報

千代

丁寧に生きて明日を大切に

気つぶよい店で飲みたい年忘れ

夢に酔い夢によろける影法師

スカタンの多い男で人氣者

胃薬をラストに飲んでいるノルマ

被災地に元気を配るボランティア

副作用抑える薬更に飲む

すかたん同士おもしろい夫婦やつてます

追伸がながーい母の書き足らず

街頭に和服が一人いる不思議

お母さん元気でいてね平和です

ポップコーンはじけて街へ春を呼ぶ

馬鹿になる薬を一つ売ってくれ

とり年にあやかり自分も羽ばたけと

チンドンの音も寂れし年の暮れ

好きやねん大阪で聞く除夜の鐘

スカタンを答えた言葉實を取り

薬指リング抜けないほど太り

夢配るサンタ何処まで来てるやら

乾杯のビールに泡にあてる平和

寝る前に明日を咲かす深呼吸

胃ぐずりと共に師走の風に乗る

子も孫も巢立ちと思う第九条

掛け違いのボタン直せば来る平和

配られたピラを取る人取らぬ人

街頭の影が延びゆく待ち呆け

千代

信醉報

章久

タカ子

隆司

修

ダン吉

宏

東吉

利昭

民

楽子

ひろゑ

一風

圭

珠生

照月

鉄心

すがお

一歩

かよこ

美花

柳昌

善純

義彦

司

敏

青道

百歳の笑顔は惜しみなく配る

生い立ちを少し飾っている媚薬

ホレ薬とうに効き目は切れている

健康を孫の手にぎり充電中

川柳塔なら

坊農

柳弘報

不覚にも毘にはまった怖い酒

料理酒で酔ってかわいいう下戸の妻

黎明の気配を持って産まれ来ぬ

祝電に大阪弁のよいひびき

祝著今年の名前妻ななくて

芯からの親切如来かも知れん

七転び男の芯が太くなる

根回しの酒が効き目を早くする

悪友と呑むから旨い酒になる

転ぶまで笑顔は見せぬ独楽の芯

生きてゆく芯に妻あり酒があり

4Bの芯うぬぼれているようだ

かざろいをひたすらに待つ白い息

デパ地下でみんな揃えた祝い膳

不器用な恋を助ける猪口二つ

わたくしの嘆き黙って聴く花芯

誰にでもやさしく見せて見せぬ芯

上向いて花を咲かせている笑顔

祝い酒今年は誰に幸をまく

憲法の芯九条をご存知か

酒に泣き酒に笑ってきた肋

地震台風地球の芯もぐらぐらだ

風邪の子がお代わりねだる玉子酒

重人

柳弘

まつお

信醉

ふりこ

登美子

美佐女

冬葉

春蘭

千梢

太一

章久

茂雄

春雄

修

とし子

博一

弘風

真理子

理恵

弥生

朝子

カズ子

ダン吉

秋雄

一風

隆盛

故郷は手酌でしようね雪見酒
遣伝子がだだをこねてる休肝日
正月を祝う八十路まで生きて
夜明けまで呑んだら酒場が転ぶ
輝いていた日酒は美しい
耳寄りの話が地酒下げてくる
したたかな芯だ表に出てこない

高知川柳社

川竹 松風報

年金を八つぎきにしてお年玉
陣笠へもち代配の選挙前
嫁配りまだしとやかな嫁である
気配りが過ぎて客人かしこまり
老夫婦どちらが先に杖になる
騒音も暮しの中の一部です
相談の後花びらの彩変わる
相談の出来る他人のいる強み
胃袋と相談するバイキング
結論を持ち相談に来た夫婦
ふところと相談します三次会
身に覚えある相談へが笑い
相談に乗って当った流れ弾
相談があるから来いは飲む話
相談に乗るのはバツジ付けるまで
月末に相談されている財布
年賀状友の一字に温まる

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

ゆとりつていい笑顔になれるから
大輪

良一
道子
笛生
美千子
富治
富子
俊彦

功
圭二
孝雄
快風
幸
悦子
哲史
てるみ
和江
典雄
まさ子
松風
暖
美々
圭風
良雄
竹萌

漂流の花びら亀の背なに乗る
前列に座りやる気を見せておく
流水がかえるわたしの想い置き去りに
漂流を楽しむ確かと現在地
人恋しそうに流水寄つてくる
漂流の海で再起を誓い合う
私が漂流しだす恋ころ
流水と語りつくした風の旅
漂流の父臍と二日酔い
連れ合う枯れ葉の如く漂流す
花粉症だから前列には出ない
孫たちの行列出来るお年玉
割り込んで来たのに文句つけられる
系列をぬけて自由な三次会
初対面敬語さがしているゆとり
物持たぬことがゆたかと知るゆとり
ころにも花を咲かせているゆとり
今のゆとりへ親に感謝の香を焚く
大器晩成母のゆとりを支えられ
たつぷりと笑い袋にあるゆとり
柿に桃みかんがゆとり生む紀州
晩学の小道にゆとり五味五感
見せかけのゆとりと母は知っている
物よりもこのころのゆとり欲しい春
罪一つ許すゆとりの年の功
子も育ちゆとりの時間手の中に
ゆとりある余生は米の値を知らず
心のゆとり持てば世間が広く見え
神様と明日を信じているゆとり

いわゑ
准一
朱夏
みつ子
保州
精伶
順子
輝子
よしこ
英子
智三
三喜夫
あつむ
寿子
あき子
夕胡
和子
泰女
裕吉
東吉
和香
紀久子
三男
さち子
和

緑良
佐一
正博

かわはら川柳会
上田 俊路報
叶うならあの健康をもう一度
神様に叶えてほしい無災害
叶うなら笑顔で老いを飾りたい
叶うなら花咲く春を中絶に
夢叶う地産地消の農の汗
短めの祝辞延々まだ続く
気短に添うて六十路が風となる
術後よく短い会話笑顔でる
蟬時雨短い生命こめて鳴く
愛してる短い五字にある無限

静子
登生
かず恵
余史子
泰良
寿子
悦子
雅子
好道
俊路

方程式で人の心はほどけない
雪に埋れた山古志村の寒い窓
温もりのまだある亡母の服ほどく
愛情のもつれをほどく児の寝顔
赤い糸はどいています倦怠期
冷えた仲笑顔でほどく味な人
深爪でアリバイの紐ほどけない
苺だちをほどいてくれる膝の猫
わだかまり時がほどきに来てくれる
絡む糸時が解決してくれる
達人と言われる人の物知らず
達人と言われ孤高の人となる
達人は広い背中を見せている
中華なべ達人手早く味付ける
偏屈のぼうが達人らしく見え

西宮北口川柳会
黒田 能子報
いわゑ
比ろ志
歳子
鹿太
朋月
松煙
孝一
江美
富喜子
美籠
正坊
房子
順子
奮水
石舟

究極の出来栄え達人が見せる

母さんの包丁達人だと思ふ

達人が活けると花が生きてくる

凍て蝶とはいるよ来いを唱つてる

木枯らしに冷えた体を屋台酒

ロボツと握手して体を指の冷え

飾られた言葉の奥に冷えが棲む

煮こごりがいつでも出来た台所

支え合う愛の言葉は友の声

柿右衛門料理のいらぬ皿の味

輪の中にいるのに居場所定まらず

昼の月何だか得をしたような

六段のしらべ今は眼の奥耳の底

階段を上り降りする物忘れ

へらず口ばかりと妻に皮肉られ

川柳塔まつえ吟社

三島 沁丘報

舞扇ひらり女の念が舞う

とんと焼きわたしの嘘が舞い上がる

無器用な私をたたむ舞い扇

僕が舞うマリオネットのコマ送り

舞い終えた枯葉が土に還る山

舞い上がる心おさえているつらさ

湯豆腐が煮え過ぎてるよ深い仲

豆撒いて女ひとりの城まもる

福の豆今年の運は天まかせ

鬼は外見えない闇へ豆をまく

豆知識拾い集めて袋詰め

豆の憂あなただけよと絡みつく

折杭

求芽

たず子

文

五月

哲子

哲子

哲男

絹

良恵

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

結い上げた髪を鏡に見てもらう

灯を消せば髪匂いのあるばかり

神様の結んだ糸で共白髪

いい話小耳に挟む理髮店

茶髪して深追ひをする冬虫

老いという哀しさがあられを梳く

がたがたと野党が唸る民主主義

がたがたと隣りフォームするらしい

地球儀がまわるこわれそうな音で

がたがたと治める鶴の一声だ

がたがたと云つては来たが良い夫婦

がたがたと味も素つ気もない便り

届いたと味も素つ気もない便り

届くまで私の思い離さない

絵手紙へ笑顔一杯届けます

あと二寸鴨居に届く孫の丈

あの人へ届け精神安定剤

届くのはいいが相手は痴呆症

南大阪川柳会

吉川 寿美報

歌麿の顔にぞつこん惚れました

顎落ちる母のバラずし日本一

まっすぐなだけが取り柄の友と呑む

親の引くレールを走るランドセル

まっすぐに歩いてまると生きている

まっすぐに生きた証拠の住住い

外れても細木数子は威張つてる

占いを信じ踏ん切りつけておく

きみえ

桂子

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

注湖

占いを信じて付いてきたと妻

古いに頼る心にある空虚

母さんがうなつてから逃げておく

うなるほど持つてたそんな五輪塔

母さんの啖阿セルルスうならせる

北の窓自然がうなる虎落笛

うなつても小粒チワワの自閉症

もう来たか申告用紙みてうなる

鉢巻をするとうなつてみたくなる

門前の小僧は釈迦もうならせる

被災地へきびしくうなる風の音

忍耐の男拳にあるうなり

災の漢字に納得してうなる

床擦れをさせぬやさしい介護の手

床上げにやつと家族の笑み戻り

今日の無事明日を願つて床につく

寒稽古床の冷たさ気が締まる

一輪が匂う茶室の牡丹雪

トンと床踏んで初春舞う三番叟

床の間の生花に人柄匂う

うならせる至芸そでから覗く弟子

ロース川柳会

山崎 君子報

牡丹雪亡友の便りか肩に置く

金婚の梅つががなし八年目

遅咲きの梅へのほほん陽の光

杉花粉シユクシユク泣いて春が来る

中立と言えどほんのり色が付き

梅の枝君と結んだ吉の籤

遠野

柳弘

シマ子

千梢

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

たもつ

想い出はつきぬ梅林抜ける風
梅林で俄か詩人になつて
真つ先に春を担いで来る紅梅
世帯はじめの庭の紅梅眼裏に
盆梅展過去も未来も春のいろ
湯の中で今夜は長い生命線

倉吉川柳会

竹信 照彦

美 籠
いわゑ
武庫坊
年 代
義 子
君 子

楽だから喜怒哀楽を惜しまない
楽も苦もあなた次第とプロポーズ
苦が無けりやそれでも楽かと言われても
楽しみは分けてあげても無くならぬ
楽天の前に苦戦が待っている
信じてる苦のあときつと楽が来る
音楽を聞いて至福の雪の朝
倒れてもきつと芽を吹く春を待つ
倒すまい気高く生きたあなたです
相方に倒れられたらどうしよう
朝靑龍倒す国産力士出よ
倒れても医学進歩で孕寿生き
山の神を拝み倒してめじろ飼う
倒産を免れた朝旨い飯
鈴つけに行った男の共倒れ
菩薩峠のトンネルを進行中
年金の口座トンネル短すぎ
戦いのトンネルにまだ無い出口
百歳を目指しトンネルまだ続く
八十日もトンネル早く出たわたし
トンネルの向う明るい明日が見え

康 子
萩 江
(前)喜美子
和 枝
鬼 一
和 子
秋 子
京 草
勝 誉
賀 寿恵
玲 坊
日出子
重 忠
十三男
忠 良
蜷 蝮
泰 輔
よしえ
酔芙蓉
克 枝
(前)喜美子

トンネルを抜けるとそこは春でした
地球から日本人はゼロになる
肉食つた人間どもの罪の数
御本人かぞえ忘れて数足りぬ
ひと房の数を目で追いバナナ買う
雑魚だつて馬鹿には出来ぬ数の中
数々の爪痕残り年明け
勘定はピタリ合います罪と罰
古稀目指すトンネル友が出てこない

川柳塔おとり

西原 艶子

や え
次 男
石 花
悠 子
玲 子
幸 子
龍 枝
修 彦

十字架の屋根賛美歌が聞こえそう
十分に食べて遊んで極楽へ
高笑いやさしい時間流れます
検診を終えて明るい作業服
幼な子の合す十指は躰から
トンネルを越すと明るい別世界
お笑いを聞いているのが笑えない
娘さん箸が落ちたとまた笑う
正論を笑つて潰す多数決
十指から笑顔がかかる手話まなぶ
二度の戦山も笑つて送り出す
怒つたら損をするので笑います
春が来る明るい服に着替えよう
宇宙語で稚孫家中笑わせる
赤ちゃんの十指が把む明日の夢

節分は季節を告げる春の音

むらつく川柳会

毛利 幸報

幸 報
幸 子
真 一
黙 光
艶 子

節分に主役演ずる鬼と福
節分が春の便りのふきのとう
泣きさけぶ園児鬼へと豆投げる
節分はアイサービースも鬼が来る
歳のかず節分豆が食べられぬ
祝う喜寿新たな心春の筆
予期しない恐怖の津波自然界
つつがなく新年迎え皆笑顔
しつけ糸つかない子供ふえている
震災地想いをはせる床の花
何べんも手抜かりないかと念押しされ
老夫婦土鍋ぐつぐつ雪の夜
建ち並ぶ高層ビルにくらくらし
とり年の平和を初日に拜んでる

翠洋会

谷口 義報

英 彰
信 夫
定 男
安 男
恵美子
ます美
喜 美
ふ さ え
昭 子
美 保
秀 子
明 朗
義 報
叡 子
桃 花
石 舟
春
良 一
舞 夢
尚 士
会 美
志 華 子
絹 子
千 梢
日 出 子
富 子

病人と軽く握手をして別れ
握手して別れた人が恋しくて
痛いほど握り返してくる無口
にこやかに握手した手の痛みとけ
握手嫌い一礼交わす紳士靴
ピョンヤン宣言しつかり紳士
關つた後の握手で目がうるむ
度の合わぬ眼鏡で世間丸く見る
鬼は外お面取つたら福の顔
豆碟おどけて逃げるパパが好き
合格の電話へばばも負けられぬ
大都市の墓標だろうかタワービル
守られて父よりでかいスニーカー
春うらら昨日は昨日今日は今日

岩美川柳会

石谷美恵子報

敬語などいらぬ吾が家は無礼講
激励に應えて孫は木工さん
世も移り真の敬語むつかしい
幼子に敬語で諭すお婆さん
午前様敬語で妻が灸をすえ
父にだす手紙紙上様と書く
敬語から妻になつたら命令語
口先に敬語舞わせて尾を振つて
酒提げて敬語魂胆あるらしい
にこやかな敬語の中にある野心
普段着の俺に應える冬の海
声援に應えて今朝も飯も食う
母の願ひに應え故郷に帰る

みつ子 蛙
理恵
蕉子
久峰
さと美
照子
満作
恭昌
千歩
正坊
真理子
義
蟹郎
孝男
重忠
一瑠
よしえ
たぬ
公子
雅女
茶子
石花菜
螢
一粹

やりくりを上手に應え株あげる
古里に鈔の返る森がある
酷寒に應えて光る軒つらら
ご先祖に應える農に行き詰まる
迷つたら應えてくれた父がいた
二月の寒さ一入米寿身に應え
さし延べて應え何処かこの世相
面つて道德の本説かれている
すり切れた辞書と歩いた半世紀
今の政治にエール送れるものがない
患者には家族のエール一番だ
母さんのエールへ感謝忘れない
たよりないエール我が身に送る日々
海外へ援助のエール無理もある
老木のエールころして受ける

川柳さんだ

北野 哲男報

鬼の面かぶらずに来る自爆テロ
孫の描く鬼はやさしい顔してる
モナリザの微笑みに鬼かくれんば
鬼こっこ遊んだ故郷に友がいる
リハビリで師は鬼と言ひ感謝
耳澄まし電話の向こうの顔描く
ケータイが無くした恋の待ちぼうけ
真夜中にコップ片手に長電話
時どきはうっかり夫人になります
何かある戸の開閉の高い音
梅一輪春の優しさ満ちて来る
すみれ咲く里に忘れた片想い

睦子
節子
和枝
公乃
節子
かつみ
菖子
忠良
裕子
はるお
圭一郎
一京
克枝
和子
美恵子
藤朗
歳子
房江
雅司
開子
和代
正和
朋月
順子
好文
章子
婦美子

川柳クラブわたの花 井尻

瓶ビール家では飲んだことがない
胃袋でくすり同士が揉めている
バブル期の緩んだ紐が締らない
仰ぎ見て松のこずえの雪落とす
伏せている男心を見すかさず
のんびりを破る振り込め詐欺のベル
のんびりと腕白遊ぶ土がない
筋播きの芽生えさわやか直線美
還暦過ぎて起伏ほど好い共白髪
ご自愛へ精一ぱいの愛こめて
千羽鶴折り空しく年越える
いい風は人の命も癒される
雪国のイロリ民話のページ繰る
寒土なが命はぐくむ路のとう
番犬に飼つた太郎は妻と寝る
のんびり娘玉の興夢見続けて
富士山に振り袖着せて祝う春
迷路でもどこかにきつとある出口
のんびりと暮す暇無く金もなく
誕生の拳の中にある未来
嫁姑口つつしんで溝もなく
ひとつしか無いから命貸せません
身近にいてもうちの嫁さん遠くみえ
筋がよい言われて今日もカルチャーに
家計簿の赤字を消した主婦の腕
延命のための薬を飲んでる
庭仕事ひと風呂呂あびて酒にする

哲男
千代
民報
はじむ
道子
宏至
ミツ子
君枝
宏
一風
きらり
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三
赤妙
ますみ
敏男
いつみ
たか子
義明
春江
知佐子
美代子
民
正純

愛犬とごくごく汚す雪の道
値引きするまでは帰らぬ僕の妻

富柳会 池

森子報

招かれた椅子で人間試される
九分九厘あと一息に喝入れる
私を透かすとブライドてんこ盛り
ブライドを畳むと見える針の穴
嫁ぐ日が迫り俄かに親孝行
ブライドが高くても千切れ雲
ブライドが薄れてからの輪が温い
幸せを招いた事は知らぬバラ
選別をされて巢立っていく若葉
重い荷をかついでるのが女房です
お招きの椅子にビエロの面がある
母の森いつかは抜ける子守唄
壊さないように代替な地球
招き猫十匹ほどは欲しいもの
冬ごもり愛を確かなものにする
一服のない正月の神はどけ
招待状少し迷った跡がある
天国の招きも今はおことわり
それはそれ改心しない冬すずめ
福笑い喜怒哀楽の百の顔
旅人になろう密やかな恋と
和をもつて尊し原点へ戻れ
耳たぶに愛のブライドぶら下げる
さよならは向うの角へ行ってから
また一つ夢を増やして誕生日

ふり子
八寿子

鐘造
巳代一
紅紫朗
アキ
高鷲
淳司
和子
一慧
和代
弘至
ひろこ
鬼焼
初太郎
信子
順子
欣之
扶美代
深雪
奈保美
英子
奏子
浩子
幸一
伸雄
富美子

生きるため今日も感謝の灯を点す
語らねど瞳に映る胸の奥
鬼やらい盾と矛見て泣く赤子
はてさて何しにここへ来たのやら
火の鳥になって渡った日の銀河

川柳塔みちのく 小寺

花嫁報

親指は五人家族の世帯主
腐つてるころ見返す寒ざくら
反則に押しした拇印に壓される
圧力をかけて骨まで食べる鍋
圧力に耐えた男の皺の数
入口も出口もなくて雪の山
親指を立ててOK合図する
凸凹の雪の歩道を漕ぐ不安
頼るのは親指だった亡父だった
入り口も出口もははが合図する
親指の一念賭けた撥擲き
春までも保つ沢庵の重い石
時に夜叉ときに女神となつて母
若者の肩に食い込む高齡化
末席の咳で静かになる会議
親指に絡む古傷まだ解けぬ
親指も小指も踊る手話講座
腐葉土が育てた甘いトマトです
親指と小指が絡むスキャンダル

小枝子
浩
一太
満子
森子
誠子
洋子
あすなろ
真美
きよし
てる
隼人
順風
銀波
ふさゑ
花匠
井蛙
黙人
岳水
慕情
花峯
一花
一花
五楽庵
欣史子

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

一番になると目的見失う
何一つ残さず幕をおろしたい
説法のみとつに今日の悔を抱く
極楽気分させせる庵主のお説法
漫画なら心にしみゆく説法
寺を出てよいお話に空青く
説法も一度だけでは忘れられ
職退いて妻の説法聞きあきる
返し縫いやつとみつけた妥協案
眉びりり動いて後は無表情

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

能子
香住
弘直
シマ子
あずき
慶子
加津子
ますみ
民
喜美子
幸生
アキラ
秋雄
はじむ
あかり
定男
更紗
とみを
欣子
芳香
一風
美代子
まつお
ますみ
民
柳伸
いっふみ

猫背でもあなた大黒柱です
下心もろに猫まで声の妻
新しい息吹きを貰う猫柳
陽を一杯食べた布団が叩かれる
人間を叩く人間から餅

義理などはないがと妻がチョコくれる
寝る向きを縁起かごとく変えてみる
夫の嘘も返事などしてやらぬ
針供養一針ずつにある情け
繰り言も笑って許す冬の海

百度石人のねがいで丸くなる
いずも川柳会
佐藤 治代報

治代報

枝豆が独りの酒を弾ませる
ステツを降りれば里は祭旗
豆撒いて八十路を祝う春の雪
再会に弾むステツ軽い靴
ステツを降りて安堵の空を見る
人生の節目ふしめに刺がある
節分豆噛めば仏の味がする
ステツで本当の事を言ってみる
吉報に大きくステツして帰る
節ぶしがくずる日雨になりそうだ
甦るために季節の種を蒔く
ステツをしてさわって見たい母の星
軽やかなステツがまだ踏めます
空っぽになつてしばらくペンを置く
鍋の底へこんだどこに意地がある
豆つまむ箸が嗤ってばかりいる

浩三 頂留子 昌子 直子 欣之 ダン吉 加津子 シマ子 弥生 さらり 宏至
英子 みち子 和歌子 ススコ 啓三 桂子 祐次 美江子 多輝子 治代 歌子 ちえ 昌枝 浜丘 昭二 玲子

節穴の向うに見えてきた花野
お茶碗の歪みもいつか手に馴染む
しばらくはだまって春の音を聞く
たった一人で踊るステツ味気ない
塩ふつてしばらく若いふりをする
節穴のぞけば広い海だった
ひずみからボクボク落ちてきた涙
ワンステツおいて私は楽になる
節分の豆ではにげぬ太い鬼
清濁の狭間でステツままならず
しばらくは続きますよと言う天気
身の内のひずみ青筋立てている
北の窓あけてしつかり豆をまく
樹もボクも歪んでからがおもしろい

川柳ねやがわ 森

初出です大振袖の揃い踏み
初詣で夢を占うみくじ引く
初めての女を一生忘れない
舞い初めの白足袋若さ呼びもどす
孫の顔初めて賀状で対面
空に雲男はいつも夢の中
父の夢継いで舞台の華になる
若者の夢がふくらむ始発駅
初夢になんと貧乏神の影
ポケットに夢のかけらをあたためる
さあやるぞ夢からさめたにぎりめし
その辺にころりころりと僕の夢
夢ひとつ消えるひとつ歳を取る

寿美 多喜 久子 美佐子 博子 満江 芳山 蘭水 房水 多賀子 茂美 文子 きみえ 章峰 茜報 あやめ 高栄 亜成 亜一風 亜也子 九好 寿子 栄二 一炊 はず子 とし子 房修 房子

これからは夢を主食に生きてゆく
ヨソ様と小百合互いの夢まくら
青空に雲一つ足し絵を仕上げ
青空を見上げ詩人になる瞳
青空(記念樹伸びてサクラサク
青空に羽ばたけ今日は卒業式
さかだちが出来た青空忘れない
青空に思いを馳せる拉致家族
行間に青空がある娘の便り
青空に日の丸似合うお元日
青空を仰ぐ瞳にある決意
折鶴を放してみたい空の青
新成人前途を祝う日本晴
思い切りゆめ描きたい青い空
たくましく生きよう青い空仰ぐ
白黒が決まり私も青い空
そこかしこへこんだ夢の殻だらけ
(山恵) 子

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

早まった決断後でほぞをかむ
早寝早起きでも懐はふくれない
龜だつて本気になれば早いこと
チョコレートひとつもらって早とちり
口癖が早うお迎え百を生き
陰になり日向になつて鬼コーチ
愛情も金が絡んでいた悲劇
愛情のマフラー首をしめつける
冷めてゆく愛情つなく紐が無い
メールで口説く口下手のアイラブユー

勲 仁清 さら子 西 かすみ 一笑 忠央 勇太郎 (龍) 恵子 利昭 博泉 度 たもつ 日出子 ルイ子 洋 章司 吐来 ヨシ枝 六点 かつみ 一知 たけし 喜久子 いさお 遠野

熟年の愛はゆつくり火が燃える
 愛情は小出し水もちする夫婦
 愛一パイ母の作ったにぎり飯
 初スキー尻もちついて穴だらけ
 雪けむりあなたのことを追っていく
 子はスキー祖母は温泉旅プラン
 一度だけスキーに行つて捻挫する
 息子より先に帰つたスキー靴
 事務的にハイ次の方診療所
 能率が上がつて今日は早仕舞い
 能率が上がると景気よくなるか
 冬ソナに合せてサツとママの風呂
 能率を良くするために尻尾さる
 一石で三鳥ねらう子の怠惰
 ロボットは汗も知らずにノルマ上げ
 能率より先ずはやる気を買うてやる
 能率給あれから僕の値が下がる

岬川柳会

八十田洞庵報

志洋 美代子 悦子 フジ みつこ 庸佑 一壺 扶美代 狹杏 昭平 耕策 洞庵 久仁雄 泰子 ダン吉
 みやこ とみ 年子 桜琴 信博 蛙城 孝子 俣子 里子 令子

生涯の第一希望君のそば
 葉取らずのりんごのように強く生き
 お互いに凶星外せる思いやり
 金婚の華やく顔に皺の数
 美人薄命どころか火傷するこわさ
 神頼み家族の無事を祈る日々
 城北川柳会 言岡
 好評なわりには効かぬ置き薬
 遠くてもよい評判の医者にゆく
 大好評謹厳居士のかくし芸
 好評をいただき頭下げ通し
 抜け目ない男の目玉よく動く
 ぜんまいを巻けば大正まだ動く
 動いたと素つ頓狂な嫁の声
 どつきりと祝いがやってくる節目
 人生の節目でいつも蹴躓く
 大らかに生きて節目をボンと跳ぶ
 スキップで軽く飛びます春はそこ
 女とは節目ふしめに角を立て
 ポロポロの節目へ叛旗捨ててくる
 棟梁の腕は節目に逆らわず
 食欲をそそのははやの湯気
 ほやほやの情報風に乗るたがる
 ほやほやの布団で明日の夢を見る
 必要な杖もお洒落な八十歳
 リフォームもいいがあれこれきりが
 身のほどを知られば自分が見えてきた
 スマトラの海の白浪墓標かも

和美 富美子 茂平 和香 洞庵 四郎 修報 とし子 順三 倫子 ルイ子 萬的 弘風 典子 たもつ ひさ乃 千歩 志華子 睦子 重人 達子 千里 集一 あやめ 昭子 朝子 高栄

震災のやすらぎ地蔵土を向く
 無欲でも出家の境地また遠い
 どうみてもほやほやらしい答弁だ
 温もりに捉まえてられて抜け出せず
 名人の一手に嘘もあるらしい
 僕だ僕じいちゃんお酒送つたよ
 ランドセル子にも親にも荷がかかり
 奥の手を出したばかりにまた採める
 フイクシヨンを重ね虚飾のペンを置く
 うぶみ川柳会 小谷美ツッ報
 京の町楷書のような鳥瞰図
 楷書からつなく楷書はわたし流
 般若経楷書で写経すれば良い
 楷書体基本三年書きました
 表札は楷書に限る三世代
 どうしても僕の楷書は右下り
 楷書の額忍の一字は師の形見
 楷書には独り善がりを通じない
 楷書から草書になつて筆も枯れ
 楷書から草書へ恋のハーモニ
 誤魔化しの利かぬ楷書で肩が凝る
 楷書でも読めない文字が多すぎる
 草書より楷書の方がむずかしい
 まだ若い若い楷書で誤魔化せぬ
 定規使つて楷書のラブレターを書く
 新卒が楷書みたいな顔で来る
 字も楷書性も楷書近づけぬ
 ぎこちない楷書母だとすぐ分かる

喜美子 桂作 修 美智子 一步 史風 正 利昭 柳弘 くに お 雄人 かつみ 睦子 常正 重忠 あつま 芳江 黙光 和枝 天雀 登 帆雀 はるお よしえ 天人 きみ子

熱いうちに楷書を叩き込んでおく
情熱を手首に溜めている楷書
神主は楷書坊主は草書体
ラブレター楷書のうちはまだ他人
恋の炎を楷書の中に閉じ込める
南風ほうら楷書も笑いだす
遊びなど視野に入つてない楷書
楷書ではとても書ききれないわたし
楷書から草書へ移る姫達磨

川柳藤井寺

高田美代子報

再会の友へおもわず出る渾名
ビヨナンへ届け再会への願い
何年振り言葉より先出る涙
再会にセビアの写真しゃべり出す
病床の友の所で再会す
再会に結び直した紅の糸
もう会わぬ会わぬと決めている涙
再会に積木崩れる音がする
再会の君から故里の匂い
危ないな会うな会うなという火種
再会で再々会を約束し
再会の相手も孫に手をひかれ
再会の街は匂いもなつかしい
初恋を約し握りも二人連れ
再会へ赤いネクタイしめて行く
十年ぶり十年分のシワの数
再会の恩師むかしのアノ眼鏡

ひかり 孔美子 石花菜 完司 ひろ子 宣子 登美枝 羅奈 美ツ千 耕策 いさお 志洋 ヨシ枝 静子 史郎 鐘造 みつこ 扶美代 昭子 シマ子 雅枝 喜代子 淳点 淳司 重人 登志子 井竿

会いにくる可愛い嫁と孫つれて
再会の余韻冷めない名残り雪
再会の朝の鏡は弾んでる
お互いに変つてないとうそも混ぜ
再会へ少し弾んだ派手を着る
もう一度会いたい人は一人いる
ライバルがなお輝いてやつて来た
険の裏にそれでいいんだ亡母がいる
再会へああ人生の幾山河
言葉などいらぬ再会劇の中にいる
タイムカプセルからはくの影を握る
再会へ少し背伸びをして見せる

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

酔うほどにすつかり人が変わり果て
晩学に時の流れが早すぎる
盆梅のニュースを聞いてバスに乗る
ダンボの耳で楽しいニュースなら聞こう
大事なものすつかり入れたと忘れ
億の金すつかり日常茶飯事に
嘘一つついたくなつた暗い空
時空超えて生きるモナリザの微笑
災害は中止してよマクガマさん
もつて来る話困つたことばかり
連れ添つてふと指折れば五十年
おとなしい母も時にはきはばをむく
ハンドルの子が気にかかる雪もよう
体操の中止二週でまた太る
目も耳もうといがすべて嗅きわかる

アヤ子 大八 瑠美子 惠勇 龍一 美代子 桂子 淑子 春蘭 悦子 一筒 千里 石舟 隆 和子 慶子 知香子 則彦 正坊 タミ 緑骨 尚士 都代子 重人 巴子 満寿巳

大雨も中止にしない食事会
すつかりと話せば友に傷がつく
言いかけた一言こつくと呑み降ろす
吹雪く夜は蝦夷開拓の哀史など
止めないで肩身せばめる喫煙者
春はそこいらんな切符買つてみる
このニュース暫くひとり温める
本題に入ると口が重くなる
白寿とて友もすつかりいなくなり
手作りのチョコでもダメなのはダメ
見清

とき 4月24日(日) 開場9時

川柳大原500号 記念川柳大会
合同句集発行

ところ 大原町総合センター智頭線大原駅から歩3分
参加料 2000円(発表誌・軽食)
欠席投句拝辞・御祝、寸志等拝辞
総合点10位まで呈賞
おはなし 川柳塔社主幹 河内天笑氏
兼題と選者「どこまで」岡田千茶・「しつかり」
小林由多香・「ここだけ」国米正
志・「すつかり」神原日出夫・
「にらむ」土居哲秋・「さわやか」
新家元司・「むげん」尾高水陽
事前投句 締め切りました
連絡先 〒707-02 岡山県英田郡大原町下庄町785
小林孝子宛 ☎086817812607
主催 大原川柳社 後援 岡山県川柳協会他

柳界展望

☆第5回三島地口行灯・川柳俳句部門の本社関係入賞者は次のとおり。

〈秀逸三席〉

魂のさまよう位置で出会う神
栗田 久子

〈佳作〉

出口セツ子・桑田ゆきの
☆第27回神戸川柳大会入賞者(追加)

〈準特選〉

シナリオへ塩一グラム追加する
小西 雄々

▽選者交代△

□朝日新聞大阪版「なにわ柳壇」は、薫風名誉主幹にかわり3月5日から西出楓

楽副理事長の選となる。薫風名誉主幹は25年間同欄の選者を務めた。

▽出 版△
□本本朱夏さん(常任理事・和歌山市)は、2月4

日付で川柳句集「転生」を発売。 (B6判・150頁) 頒価千円。句集紹介80頁。

☆朝日カルチャーセンター「はじめての川柳」講座(板尾岳人理事長講師)は、合同句集「ひこぼし」を発売。20名の句を掲載。(B6判84頁)

▽同人動向△
□川柳塔のぞみ句会へ出席のため2月22・23日、みつ子副主幹・たもつ、楓楽副理事長ほか15名東京行。

□園山多賀子さん(同人・出雲市)は、遠山多華のペンネームで、2月3日付島根日々新聞に「福寿草」と題したエッセーを発表。

新同人紹介

若^{わか}松^{まつ} 雅^{まさ}枝^え

—美代子・瑠美子・志洋推薦

あかつき川柳会

定例会

日時 5月6日(金)

午後2時から

「疼く」

「志」

「火花」

会場 国労会館

JR天満駅より300米

投句先

〒596-0824 岸和田市

葛城町891-22 岩佐ダン吉宛

○特別常任理事会Ⅱ6月7

日(火) 詳細は5月号で案内

します。

☆朝日新聞奈良版「大和柳壇」では12月23日年間賞を発表した。

くやしさに耐えて拳の開

く朝 大内 朝子
☆川柳塔わかやま吟社では、各賞を発表。2月13日の句会で表彰した。(○内順位)

〈葵水賞〉

西口いわえ選

③ひまわりの海でたつぷり

気をもろう 木本 朱夏

⑤川上大輪 ⑦三宅保州

⑨牛尾緑良

〈あおい賞〉奥田みつ子選

⑦堂上泰女 ⑧野村大茂

津 ⑩宮本三喜夫

〈たちはな賞〉宮口克子選

①自らは動かぬ石にある

重み 三宅 保州

決算、平成17年度事業計画、予算案などが審議された。
☆川柳展望社代表天根夢草氏は推されて主宰に就任。
3月12日ロイヤルホテルで披露パーティーが開催された。
今後同社は結社として活動する。

常任理事会Ⅱ3月7日(月)出席者21名

①川柳パンフ作成、保州氏出席を得て検討

②題と選者を決定 ③同人部、同人2名承認(1名は

次号掲載)、渉外部から、

のぞみ句会報告、各句会出席者依頼

次回常任理事会Ⅱ4月7日

16時、アウイーナ

大阪川柳人クラブ総会が

大阪ハートンホテルで開催

され、平成16年度事業報告、

続による。

☆大阪川柳人クラブ総会が

大阪ハートンホテルで開催

され、平成16年度事業報告、

続による。

☆大阪川柳人クラブ総会が

大阪ハートンホテルで開催

され、平成16年度事業報告、

続による。

☆大阪川柳人クラブ総会が

大阪ハートンホテルで開催

され、平成16年度事業報告、

続による。

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	12日(火)午後1時から 紙・並ぶ・のんびり	豊中市立池田公民館 阪急・モノレール 池田駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
岸和田川柳会	16日(土)正午から 身構える・麦茶・命ずる・目次	五風荘 岸和田城南東横 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳藤井寺	17日(日)午後1時から 大人・かつら	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
岬川柳会	17日(日)午後1時半から さわやか・陽気・着飾る	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	18日(月)午後1時から 器用・やっと・忘れる・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
高槻川柳サークル卯の花	21日(木)正午から 絡む・日曜日・ほんまターミナル・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
川柳クラブわたの花	22日(金)午前9時半から 泡・午後・真ん中・よろめく	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	23日(土)午後6時から 後ろ・悔い・やっぱり・花	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの市川柳会	24日(日)午後1時から 鉛筆・多数・深い・「ルート」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ねやがわ	24日(日)午後1時半締切り 遠足・咲く・友情・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳ふうもん社	24日(日)吟行会 オレ流・オンボロ・現ナマ	お問い合わせ先 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都塔の会	25日(月)午後1時から 貝・バック・相手	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	25日(月)午後7時半から 再会・電車・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪川柳会	27日(水)午後6時から あの世・でかい・とける・相棒	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などに変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 狙う・景色・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	2日(土)午後1時から 脱・変わる・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城北 川柳会	2日(土)午後1時半締切り 悔しい・段取り・たらふく 自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣り 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
倉吉 川柳会	2日(土)午後1時から 城・手帳・吐く	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津	4日(月)午後1時半から 点・式・たっぶり	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川柳塔 なら	6日(金)午後1時から 学ぶ・箸・ヒーロー	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
堺川柳会	9日(土)午後1時から 怖い(共選)・傷 か・ぶ・ら(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打吹	9日(土)午後1時から 仲間・首・抱く	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時半から 会う・期待・歩く・すくすく	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川柳塔 みちのく	9日(土)午後4時から 他人・糸・並ぶ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 わかやま	10日(日)午前11時開場 野村太茂津卒寿記念川柳大会	4月号 (P.97) 参照 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	10日(日)午後1時から ソロ・霧・登る・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 手口・格差・まぶす・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
尼崎 尾浜 川柳会	12日(火)午後1時から 裏・巣立ち・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太

編集後記

☆本社句会が4月から夜の開催となります。間違いないよう、ご注意下さい。

☆先日、鎌倉を観光した時のこと。鎌倉五山の第一位、建長寺の売店（？）お守りやお札を売っているところに、「朱印帖受付」と大書してあった。これは、校正のたび何度も調べているので、大阪のおばちゃんとしては黙っておれないと思い、「これ、ちがいがまっせ」と言った。

☆つまり、旅行・参詣などの記念に名所や社寺その他の印をおして、その印影を集める帖（「広辞苑」は、「集印帖」（しゅういんじょう）。朱印とは朱肉で押した印のことだから、まあ朱印帖で間違いないとも言える。しかし、格式の高いお寺の

こと、正確に書いてほしいなあ。

☆で、お寺の若い女性の返事は「はあくそうですか」と、はじめて聞いたという風だった。由比ヶ浜を見渡せる長谷寺も、やはり「朱印帖」とあった。

☆思うに、歌は世につれ、と同様、言葉は世につれ世は言葉につれ、なのだろう。例えば、拘泥（こたわる）も新しい辞書では拘ると表記してある。けれど、かわるとも読めるので、選の時気をつけねばならない。

☆ある日の天声人語に、子は親の鏡とあった。これって鑑（かがみ）ちゃうのと思つたが、考えてみれば親は子の鑑で、子は親の鏡が正しいのかな。（鷹が鷹を生む例もあるのに）もしかして全て鏡になつたのかな。ああ、ややこしい。校正恐怖が重症になつてゆく。

（ふ）

（よ）

あらまほし

波風に負けぬ

「のぞみ」であらまほし

奥田みつ子

ひとこと

二月二十二日「川柳塔のぞみ」満一歳の誕生会、沢山のご出席、ご投句で盛大に祝って頂きました。早産だったためか、ひ弱で皆様に「心配ばかりおかけ致しましたが、全国からの頑張れコールをパワー

に、ヨチヨチ歩き始めました。体力をつけ行動範囲を拡げてゆく、五歳の「のぞみ」にこの期待下さい。

翌日、関西からの皆様と鎌倉へ。建長寺のおみくじは大吉。「高い志操は鶴の様に世の人から美しいものに仰がれる。拘る事なく一路目標に進みなさい。世を見透す事を忘れてはならない。低俗になれば身を傷つ」とありました。

（播本 充子）

○今年水害、震災後の豪雪で困難を極められた地方の方々に、少しでも幸いです。春であることをお祈り申し上げます。

○さて、桜がおわる若葉の季節になります。私ことですが、若葉青葉のことは横におきまして「歯」のこととお話します。去年暮れとを痛み一晚疼きとおして、これはアカンと歯医者さんに飛んで行つた。私、

○さて、桜がおわる若葉の季節になります。私ことですが、若葉青葉のことは横におきまして「歯」のこ

とをとお話します。去年暮れとを痛み一晚疼きとおして、これはアカンと歯医者さんに飛んで行つた。私、

○さて、桜がおわる若葉の季節になります。私ことですが、若葉青葉のことは横におきまして「歯」のこ

とをとお話します。去年暮れとを痛み一晚疼きとおして、これはアカンと歯医者さんに飛んで行つた。私、

○さて、桜がおわる若葉の季節になります。私ことですが、若葉青葉のことは横におきまして「歯」のこ

とをとお話します。去年暮れとを痛み一晚疼きとおして、これはアカンと歯医者さんに飛んで行つた。私、

（よ）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（6月号）地名

市 県
姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

初歩教室 「サイズ」(3句) 三宅保州担当
課題吟 (3句)
 「たっぷり」 初山隆盛選
 「式」 中井ゆき選
 「点」 大塚節子選
茴香の花 (3句) 政岡日枝子選
愛染帖 (3句) 波多野五葉庵選
水煙抄 (8句) 奥田みつ子選
川柳塔 (8句) 河内天笑選

6月号発表(4月15日締切)

本社4月句会

と き 4月7日(木) 午後5時半開場・6時半締切り
 —開催時間が変わりましたのでご注意ください。
 と ころ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし
兼題 「象」 森本弘風
 「前向き」 田辺鹿太選
 「透明」 高田博泉選
 「吹く」 山本希久子選
 「思う」 三宅保州選
 河内天笑選
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

7月号

課題吟 「かび」「蠅」「か」
 「銀河」
初歩教室 「ほいほい」

本社5月句会 10日(火) 午後5時半から

兼題 「母」「洗う」「我慢」
 「切る」「良心」

第23年度 夜市川柳募集

第11回「ひびく」大野風柳選
 ハガキに3句 4月末締切
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

〒545-0005
 大阪府阿倍野区三町二丁目一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 編集兼 河内権治
 発行人 美研アト
 印刷所 美研アト
 発行所 川柳塔社
 電話 (06)6691-6914 四番
 振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)

二〇〇五年(平成十七年)四月一日発行

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
 - ・放射線科・ホスピス
 - ・デイサービスセンター
- 診療時間
月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00

JR 桃谷駅徒歩3分
<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL (06) 6372-1178